犬猿ふたり旅《完結》

田島

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナザリック第七階層を守護していた筈が気が付くと見知らぬ街の近くに飛ばされていたデミウルゴス、その隣には決して相容れぬ男がいた。

二人で転移しちゃったセバスとデミウルゴスがナザリックに帰ろうと頑張る話です。力は合わせないかもしれない。

目次

見知らぬ草原 1
登録と初依頼 14
昇級試験 27
普通の冒険者 40
亜人十傑 53
譲歩 70
困惑と寄り道 83
凶眼と計画 97
護衛と策謀 110
建国式典騒動 123
再会と帰還 138

見知らぬ草原

目の前には草原が広がっていた。彼方に見えるのは都市の城壁。その上には青空がどこまでも続いている。

おかしい、とデミウルゴスは思った。

デミウルゴスはナザリック地下大墳墓第七層の守護の任に就いていた。第七層は灼熱の溶岩地獄、こんな草原もあんな都市もありはしない。もし何らかの要因で知らない内にナザリックの外に出されたのだとしても、ナザリックのあるヘルヘイムは明けることのない永劫の夜に閉ざされた闇の世界、こんな青空が広がっている筈がないのだ。

とりあえず状況を確認しようと周囲を見渡す。すぐ横には、こんな所にいる筈のない人物が立ち驚愕と動揺を隠そうともせずデミウルゴスを見つめていた。

「デミウルゴス様……？」

鍛え抜かれ鋭く研がれた一本の鋼の剣の如き真っ直ぐで鋭い佇まい、鷹に似た射抜くような眼光。そこには、ナザリックの仲間達の中でただ一人だけどうしてもデミウルゴスが好きになれない男が立っていた。

「セバス……これは、どういう状況なのかな？」

「わたくしにも何が何やらさっぱり……デミウルゴス様は何かご存知ではないのですか？」

「第七階層にいた筈なのだが気が付いたらここに立っていたね。君も第十階層の守りに就いていた筈だったね？」

「ええ、わたくしも気付いたらここに立っておりました。プレアデスと共に守護の任に当たっていた所命を受け、モモンガ様に付き従って玉座の間で御前に控えておりましたが……他の者は……いないようですね」

セバスは周囲を見回したがプレアデスの面々はおろか、人っ子一人いないだだっ広い草原を風が渡っていくばかりだった。

情報が足りないまま分からない事を考え続けていても仕方がない、

まずは情報を集めなければ。ここは一体どこなのか、ナザリックはどこに行ってしまったのか、それらの情報を得る事が先決だとデミウルゴスは考えた。

「分からない事を君と二人で額を突き合わせて考えていても仕方がない、今後の行動の方針を決める為にも情報を集める事がまずは必要だろう。影の悪魔（シャドウ・デーモン）」

デミウルゴスは特殊技能（スキル）を使い影の悪魔（シャドウ・デーモン）を二体召喚する。

「あの街へ行き集められるだけのありとあらゆる情報を集めてきなさい。ここはどこなのか、ナザリックはどこにあるのか、何者が住む街なのか、言葉は通じるのか、使われている文字は読めるのか、住む者の強さ、装備品の程度、何者が支配しているのか……どんな小さな事でも構いません、とにかく集められるだけです。お前は何者が暮らしているかと強さの程度の確認が終わったら一度すぐに戻ってくるように。行きなさい」

デミウルゴスの言葉に従い影の悪魔（シャドウ・デーモン）二体は彼方に見える都市へと向かっていった。その様子を見送ってから、怪訝そうに眉を顰めたセバスはデミウルゴスを見やった。

「現在地やナザリックの場所の確認は分かりますが、言語や強さの確認が必要でしょうか？」

「これからあの街にコンタクトを取るにしても我々の力が通用するのかどうかによって出方は変わるだろう？　言語の確認は念の為だよ。ギルドの中には外国人ギルドなる言葉が通じない者達の集まりもあると至高の御方々がお話しになっていたからね、もしそのような者達の住む街であれば我々はまず言葉から学ばなければ情報を集められない」

成程、と呟いてセバスは頷いた。デミウルゴスとしては和やかに雑談をしたいような相手でもないので黙ったまま影の悪魔（シャドウ・デーモン）の帰還を待つ。

申し付けた通り一体はすぐに戻ってきた。住んでいるのは人間だけで、影の悪魔（シャドウ・デーモン）でも片手で殺し尽くせるような脆弱な者がほとんどである事が知れる。装備を整えた者も稀にいるようだが、装備品も貧

弱で影の悪魔（シャドウ・デーモン）一体すら倒せないような者達のようだった。そして、喋っている言葉は理解できる事も分かった。戻ってきた影の悪魔（シャドウ・デーモン）をもう一度情報収集の為に街に向かわせてからデミウルゴスは口を開いた。

「ふむ……あれは人間の街のようだね、脆弱な者しかいないようだよ。とりあえず言葉も通じるようだ。栄えあるナザリックに侵入した不届き者達のように至高の御方々に匹敵するような力はないらしい。完全に安全とは言い切れないが我々が接触しても差し当たっての危険はないと判断していいだろうね」

「……接触、というと？」

「影の悪魔（シャドウ・デーモン）での情報収集にも限界がある、私も直接街へ行き情報を集める必要があるだろう。安心したまえ、勿論穏便な手段でだ」

デミウルゴスのその言葉にセバスは僅かに頷き、そうですか、とだけ返してきた。一瞬漂った剣呑な気配は隠しきれない。セバスの危惧は分かる、デミウルゴスならばあの街を力で蹂躙し支配すると言い出すとでも思ったのだろう。だがその手段は現状ではメリットが少ない為デミウルゴスは端から考えてはいなかった。

まず第一に、いくら好きになれない相手とはいえナザリックの仲間である事には違いないし現状は二人きりでもある、少なくともナザリックに帰還するまではセバスとは協力していかなければならない。そのセバスが強く反対するであろう手段をとって敵対する事にでもなったら面倒だからだ。何かナザリックの不利益になったりナザリックの栄光に泥を塗るような真似をするならばデミウルゴスも容赦する気はないが、そうでないのにセバスと敵対する事に利益や意味はない。人を殺戮し蹂躙し支配するようなデミウルゴスの好むやり方を好まないセバスの善良さは至高の御方によってそうあれと創り出されたものだ、それをどうこう言うような真似はいくら好かないからといってデミウルゴスもしたりはしない。

第二に、この街にいないからといって至高の御方々に匹敵するような強者がどこにもいないという保証にはならない、街を陥としたとあればそういった輩に目を付けられる可能性もある。ここがどこで周

囲がどのようになっていてどの程度の強者がどれだけいるか分からないこの状況でわざわざリスクを冒してまで占拠する価値はあの街にはないだろう。

それに街を支配したとしてもそれを維持するリソースがナザリックにいる部下達を使えないデミウルゴスにはない。現状デミウルゴスの目的はあくまでナザリックへの帰還であって、街をどうこうする事ではないのだ。故にデミウルゴス自身が街に留まって支配を続けるという選択肢は端からない。あんな脆弱な人間しかいないというつまらない街を支配する理由は今の所ない。

「人間しかいないという事であればデミウルゴス様のお姿は少しばかり目立つのでは？」

「その通りだ。そこでだセバス、一つ頼まれてほしい。あの街へ行き、フード付きのローブと頭に巻く布を調達してきてくれないだろうか。魔法詠唱者（マジックキャスター）に化けて尾と耳を隠せばとりあえず私も人間共の中にいても然程違和感はないだろうからね。人間共に見つかると厄介だろうから、そうだね……私は近くにナザリックがないか空から周囲を探索してからあそこに見える森に潜んでいる事にするよ」

「畏まりました、早速行って参ります」

そう返事をすると栄えあるナザリックの家（ハウスチュワート）令に相応しいぴしりと美しい礼をしてセバスは踵を返し街へと歩きだしていった。セバスにとっても渡りに船の提案だったのだろう、恐らくはデミウルゴスと同じ気持ちの筈だ。二人きりでいると息が詰まる思いがする。ようやく一人になり思わずデミウルゴスはほうっと息をついた。本当は今後どう動くかは影の悪魔（シャドウ・デーモン）から齎される情報次第なのだからデミウルゴスの格好などその後気にすれば良かったのだが、セバスと二人というのは気詰まりだし、この辺りが人間の勢力圏ならば今後人間と接触する機会も多いだろう、ついでだった。

このセバスへの嫌悪については、同程度のものをセバスもデミウルゴスに抱いているようである。デミウルゴスは悪魔だが、ナザリックに所属する者達は皆大切な仲間と考えているし大事に思っている、その対象はデミウルゴスとは正反対の性格を持つメイド長ペストー

ニャ・S・ワンコですら例外ではない。それなのにセバスだけはどうしても好きになれない。こういう言い方は極めて理性的でないしまるで愚かな人間のようなので本来デミウルゴスは好きではないのだが、セバスに関してはウマが合わないというような軽い程度のものではない、生理的な嫌悪感さえ抱いている。不倶戴天と言ってしまってもいいかもしれない。

創造主、ウルベルト・アレイン・オードル様にそうあれと定められたわけでもないのにそう思ってしまう事にデミウルゴス自身も疑問を抱いている。この感情は一体どこから生まれてくるものなのか、その源がまるで知れないのにデミウルゴスにとってはごく自然に感じられる感情なのだ。

他の者であれば例え御しがたいシャルティアでもこんな重い気分にはならなかっただろう。セバスと二人でどこにあるのかも定かでないナザリックを探す、その事にデミウルゴスは暗澹たる思いを抱いていた。だがとりあえずは動かなくては何も始まらない、そう簡単に事は運ばないだろうがもし周囲にナザリックがあれば問題はそれで解決だ。人の気配が周囲にない事を確認してからデミウルゴスは蛙じみた外見の半悪魔形態へと姿を変え皮膜の翼をはためかせ空へと飛び立った。

正直な話、空からナザリックを発見できるとはデミウルゴスは考えていない。万が一にも見逃す事があってはならないから念の為に確認するだけだ。ナザリックがヘルヘイムのグレンデラ沼地から動いていないという可能性がまず一番高い。この場合はデミウルゴスとセバスがヘルヘイムへと帰還する手段を見つければいいだけだ。仮にデミウルゴスとセバスのように何処とも知れぬ場所に飛ばされていたとしても空から発見できる可能性は限りなく低いと思われる。他の至高の御方々が去られても最後までナザリックに残って下さった慈悲深き方にして至高の四十一人の纏め役、モモンガ様。計り知れぬ叡智に溢れた端倪すべからざる彼の方が空から容易に発見できるような状態にナザリックを放置しているとは考えられない、必ずや外敵に対し最大限の備えをされるだろう。それからもう一つ、それとは

別の可能性が故に発見できない事も考えられるがその可能性については確証がない限り出来るだけ考えたくないというのが正直なところだ。その最悪の可能性についても追々考えていかねばならないだろうが、まずは情報を集める事が先決だから後回しにしてもいい。

ざっと街の周囲を上空から回るが、やはりナザリックらしき建造物はどこにも発見することができなかった。セバスに指定した森へとデミウルゴスは降り立ち、影の悪魔（シャドウ・デーモン）の帰還を待つ事にする。待っている間にアイテムボックスの中を確認するが創造主（ウルベルト様）から持たされていたものはきちんと持っていた。

召喚限界時間近くに戻ってきた影の悪魔（シャドウ・デーモン）の報告は、驚くべきものだった。

まず近くに見える都市の名はカリンシャ、聖王国という国の都市だった。東には大城壁がありその向こうにはアベリオン丘陵という亜人達が跋扈し日々紛争を繰り返す危険地帯があるという。ナザリックの情報はやはりというか何というか何も得られなかった。言葉は通じるが文字は未知のもので、最初に確認した通り非武装の民衆はもとより武装した者すら影の悪魔（シャドウ・デーモン）の敵ではない。武装も貧弱で魔法の力を宿した武具すらほぼ見当たらなかったという。聖王国には九色なる強者がおり、東の大城壁ではその内の二人が亜人に対する備えに当たっているという情報も得られた。

ユグドラシルの常識に照らし合わせて考えれば有り得ない状況だった。魔法の武具など最低限の装備だ、下級の装備でさえ組み込まれたデータクリスタルによって何らかの魔法の力は宿している。そしてユグドラシルにおいて使用されている言語は日本語しかない、アルファベットはあるが英語が分からなければ理解できない事というものはないし、他の言語は使われていない。外国人という日本語を解さない存在もいたようだが、彼等にしても日本語をどうにか解読していた筈だ。影の悪魔（シャドウ・デーモン）が未知の文字というからにはアルファベットで書かれた英語という線も消える。話している言葉は理解できるのに文字は未知のもの、これは一体どういう事なのだろう。

デミウルゴスとてまだまだ未知の領域の残された広大なユグドラ

シルの世界全てを把握しているわけではない、都市名や国名や地名に心当たりがないのはデミウルゴスの知識の外の情報だからという事も有り得るかもしれないが、言語と装備については不可解すぎた。

これは、出来れば考えたくなかった最悪の状況についても検討する必要が出てきてしまったのではないか、という考えにデミウルゴスは至る。

可能性を少しも考えていなかった訳ではない、だがそれこそ有り得ないと思いたかった。ここはユグドラシルの世界の外である、という荒唐無稽な可能性。デミウルゴスとセバスが二人、どこか知らぬ世界へと飛ばされてしまったという可能性。もしナザリックが今もユグドラシルの世界のヘルヘイムのグレンデラ沼地にあるとしてデミウルゴスとセバスだけが全く異なる世界に来てしまったのだとしたら、一体どうやって帰ればいいというだろう。足元がぐらつく思いがする。

ナザリックはデミウルゴスにとって全てだ。ナザリックとそれを支配する至高の四十一人に仕える為だけに己の存在があり、ナザリックの為に働く事こそが己が存在する価値そのものだ。それがもし果たせなくなるとしたら、そんな事は考えたくもなかった。己の生きる意味も価値もナザリックと共にあり、他にはない。至高の四十一人の為に働けない己など存在する価値がない。

まだ何も分からない、この謎の地のどこかにナザリックも飛ばされているという可能性だって全くないわけではない。そうでなくてもユグドラシルの世界へと帰還できる方法だってあるかもしれない。兎にも角にも情報を集めなければ話が始まらない。己の置かれた状況が不明確過ぎるし考えようにも材料が足りなさ過ぎる。故にデミウルゴスはセバスが変装用のローブを調達して来てくれるのを待つことにしたのだが。

夜になってもセバスは帰ってこなかった。まさかとは思うが何者かに害されたのかと影の悪魔（シャドウ・デーモン）を送りセバスを探させたが、帰ってきた影の悪魔（シャドウ・デーモン）の報告は思いも寄らぬものだった。

セバスは無事だった。曰く、ローブを買い求める為の金銭を稼ぐ為

に建設現場で日雇いの仕事をしていて、ローブを買えるだけの金を得るにはもう数日かかる、とのことだった。
たかだかローブ一着ごときを調達するのに何をチンタラやっているのですかあの男は！
激しい苛立ちに任せて思わず影の悪魔（シャドウ・デーモン）に当たり散らして切り裂くところだったがすんででデミウルゴスは己を抑え、深い溜息をついた。セバスであれば正当な対価を払って物品を得ようとするだろう、それはそうあれと望まれて至高の御方に定められたセバスの性質だ、とやかく言うことはできない。
子供向けの文字の教本も追加で買い求めるようにセバスへの伝言を影の悪魔（シャドウ・デーモン）に申し付け街へと送り出す。情報を集めるにしても何にしても今後活動していく上で文字の習得は必要だろう。ナザリックへの帰還方法を探すべく本格的に動き出せるようになるのは今しばらく時間がかかりそうだった。
それにつけてもセバスと二人というのはデミウルゴスにとっては不安要素が大きすぎる。デミウルゴスの出す方針にセバスはいい顔をしないだろう事は容易に想像できる。例えばそれがモモンガ様を始めとする至高の御方々から全権を委任された上での命令だったならばセバスも従うだろうが、今はナザリックは無くデミウルゴスとセバスは対等な立場で共にナザリックを探す同志だ。セバスと同志であらねばならないというのがデミウルゴスにとってはまず頭が痛いのだが。セバスも容認できる方針となればかなり遠回りな道になるであろう事は想像に難くなかった。
だがそれでも、何としてもナザリックを探し出し帰還しなければならないのだ。例え帰る道がなくても作り出す。そうでなくてはここに今デミウルゴスが存在する理由や意味などなくなってしまう。それは恐らくはセバスも同じだろう。それならば己の感情など多少は飲み込んで協力していかなければならない。いくら好かない相手であってもセバスもナザリックの仲間、それにセバスに万一の事があればお優しいモモンガ様はさぞ悲しまれるだろう、別々にナザリックを探すという選択肢は今の所ない。セバスを一人にしておけばあのお

人好しのことだ、次々に厄介事に巻き込まれて何が起こるか分かったものではない。デミウルゴスが側に付いている必要があるだろう。
気は重いがすべき事ははっきりしている。為すべき事をデミウルゴスは為すだけだ。
とりあえずセバスが戻ってくるまでは何も出来ず動けない。出来るとすれば朝になったらまた影の悪魔（シャドウ・デーモン）を街に行かせ情報収集をする程度だろう。忌々しい思いを紛らわせる事もできずにデミウルゴスは重い溜息を再びついた。

＊＊＊

数日後、ようやくセバスが頼んだ物を持ち戻ってきた。デミウルゴスは頭に布を巻いて耳を隠し、服の上からゆったりしたローブを着た。尻尾はローブの下で丸めておく。ローブに皮手袋はデミウルゴスの美的感覚からすると許容し難いが、人のものでは有り得ない鋭い爪を見られるのはまずいだろうからそのままにしておく。
「たったこれだけの物を揃えるのに随分と時間をかけたものだね」
「申し訳ございません、身分がない者がすぐに金を得られる仕事には限りがございまして、稼ぎもそう良くはなかったものですから」
「身分ですか……これから活動していく上で厄介になりそうな点ですね」
セバスの申し開きにデミウルゴスはふむと唸り考え込んだ。この見ず知らずの地では何のバックボーンもないデミウルゴスとセバスに身分などあろう筈がない。（あながち嘘でもないのだし）遠方から来た旅人で通してしまえばいいだけの話ともいえるが、余所者に大切な情報を簡単に流す者はそうそういないだろう事を考えると情報収集の効率はあまり良くないだろう。支配の呪言で聞き出してしまう方法は相手に記憶が残るので聞き出した後消す前提になる、それはセバスがいい顔をしない。情報が伝達されていくネットワークがあの街にも構築されている筈で、出来ればそこに何らかの形で食い込みたい。
「その点は追々考えましょう。街に入ってまずは私は文字を習得したいと考えていますが異論は？」

「ございません。身分に関してですが解決できそうな話を一つ聞きました」
「ほう？　どのような話ですか？」
「冒険者というモンスター退治を主に行う職業があるそうで、流れ者等でも容易に登録できるようです。等級があり、上の等級になると国を超えた名声を得る事も可能になるとか」
「成程」
　セバスの説明を聞きデミウルゴスは再び考え込んだ。まずはその冒険者なる者達の実態について少しばかり観察する必要はあるだろうが、横の繋がりもあるだろうしもしかしたら情報屋等への伝手も得られるかもしれない。それに仮定の話にはなるが、ナザリックがどこか別の地にあったとして、モモンガ様ならば外敵への備えをしつつも外界の情報収集も怠らないに違いない。もし遠くまで届く名声をデミウルゴスとセバスが得られればナザリックにもその名が届く可能性があるということだ。検討する価値は十分あるだろう。そのような情報を得られたなら数日間デミウルゴスが待ちぼうけを食らったのも全くの無駄ではなかったという訳だ。
　とりあえずは街に向かう。セバスは門の衛兵に既に顔を覚えられていて、セバスがデミウルゴスを主人ですと紹介すると衛兵も特に不審を抱く様子もなく通してくれた。デミウルゴスは知る由もなかった事だが門を通る時に通行料が徴収された。初日通る時どうしたのかセバスに聞くと、燕尾服のジャケットを担保として預け日雇いで稼いだ金を払い返してもらったのだという。成程顔を覚えられる筈である。
　そのままセバスが拠点にしている労働者向けの宿に向かうが、道行く人からセバスはこの前はありがとうとかお世話になりましたとか次々に声をかけられて挨拶を返している。やけに日数がかかったのはこのお節介のせいではないのだろうかと思うと業腹だがその辺りはもうデミウルゴスの方が諦めるしかないのだろう、セバスに変われと言っても無理な話だ。だがこれから先は出来る限り控えてもらわなくては余りにも時間の無駄だ、後で注意すべきだと頭に留め置く。

それから二、三日の間、デミウルゴスは文字の習得に勤しんだ。教本を見れば大体の法則性は掴めるし、セバスに追加で子供向けではない普通の本を買わせて教本を参考にしつつそれを読み込んだ。街にも出て他の国から来た旅人で文字が読めないがこれは何が書かれているのかと看板やビラなどを指し通行人に聞いたりもした。その甲斐もあって聖王国語と思われる文字の読み書きと理解はデミウルゴスは今では完璧にこなせる。

差し当たってする事のないセバスは日雇いの仕事を続けていた。信憑性のない噂話がほとんどだが、日雇いの現場にも情報がない訳ではない。東の大城壁にいる九色なる強者がオルランド・カンパーノという剣士とパベル・バラハという弓使いであるという情報、聖王国は女王カルカ・ベサーレスによって統治されており、側近として九色の聖騎士レメディオス・カストディオと神官団のトップ、ケラルト・カストディオなる者がいるという情報、聖王国は封建国家であり領地を与えられた貴族が各地を統治しているという知識などを新たに得られた。セバスの賃金からも分かっていたが、この辺りで流通している貨幣はユグドラシル金貨ではなく聖王国の貨幣と交易共通金貨、略して交金貨と呼ばれるものに代表される交易共通貨幣である事も分かった。

準備が整ったところで夜、宿の部屋でこれからの方針について語る。

「さて、ではこれからの方針を決めようか。私達のすべき事はただ一つ、一刻も早くナザリック地下大墳墓へ帰還する事。ナザリックがどこにあるのかは杳として知れないが、宛てもなく闇雲に探すというのもいかにも効率が悪く愚かしいこと。身分や金銭の問題もこれから出てくるだろうし、それらを得る手っ取り早い手段として冒険者に登録するというのは悪い手ではありません。名声を得れば我等の名がナザリックにまで届くという可能性もあることだしね」

「異論はございません」

「モンスター退治は君の好きな人助けのようなものだ、ここで異論を差し挟まれては話が前に進まないから大いに助かるよ。この街にい

る冒険者らしき者を観察したがいずれも脆弱なゴミ、相手にするモンスターがどの程度の強さなのか未だ不明という点は留意すべきだろうが、これならば我々であればすぐにでも上に登れるだろう。ああ、これからは敬称は不要だよセバス、至高の御方々に創造されたナザリックに所属する者としても元々対等な立場なのだし、我々はこれから冒険者仲間となるのだからね」
「分かりましたデミウルゴス」
　にこりともせず無表情のままセバスは頷いた。ここで微笑まれても気持ちが悪いだけなのでデミウルゴスとしてもそれに文句を言う気はない。
「それから一つ言っておきたいのだが、君はあちこちで人助けをしているようだが、これからは控えてほしいものだね。我々の目的はナザリック地下大墳墓への速やかな帰還、他の事に割く時間はないと心得えたまえ」
「その言にも一理あります、留意いたします」
　素直に了解を返さないところがデミウルゴスに対するセバスの感情を表しているといえるだろう。
「一つ質問があるのですが」
「何だいセバス」
「ナザリックへ帰還する手段として、ヘルヘイムへ帰る道を探すのではなくナザリックを探す、というのは何故なのでしょうか」
「勿論ヘルヘイムへと帰る手段があるかどうかも探すとも。だが、今までの情報を総合するとこの地は我々の知らない未知の領域、ヘルヘイムへ帰る道があるかどうかも定かではない。そして我々が知らぬ内にこの地に飛ばされていたように、ナザリックもまた同じ現象に巻き込まれている可能性も留意すべきだろう？　もしかしたらナザリックの者がバラバラに分断されて様々な所に飛ばされているかもしれない、様々な可能性を考慮すべきだ。そういう意味でも、名声を高め名を広める事には大いに意味があると思うがどうかな？　社会的地位が高まれば集められる情報もより多く確実なものが増えていくだろう」

最悪の可能性について敢えてデミウルゴスはセバスに語らなかった。確証のない事を口にするのは好きではないし、セバスの希望を折るメリットなど現時点では何一つない。ユグドラシルにおいてモンスターはプレイヤーが狩るものである、冒険者という耳慣れぬ職業がある時点でこの世界がユグドラシルとは別物であるというのはデミウルゴスの中では事実としてほぼ確定しているのだが、証拠は何もないし証明の手段もないだろう。

「成程、納得いたしました。余計な口を差し挟み失礼いたしました」

「構わないとも、先程も言ったが我々は対等の仲間、疑問があるならどんどん口にすべきだ」

「はい、それではこれからは疑問点は遠慮なく質問させて頂きます」

軽く頷いてやはり無表情のままセバスはそう告げた。あまり会話をしたくないというのがデミウルゴスの正直な気持ちだがナザリックに帰るまでは二人力を合わせやっていくしかないのだ、個人的な感情など二の次である。できればセバスもその点をよくよく弁えていてほしいものだと心からデミウルゴスは願っていた。

デミウルゴスから見ればまるで豚小屋のような薄汚く狭苦しい労働者向けの宿の一室で、こうしてデミウルゴスとセバスのナザリックを探す旅路は始まろうとしていた。

登録と初依頼

予め場所を調べてあった冒険者組合に二人で朝向かう。デミウルゴスもセバスもお互いに雑談したい相手ではないので無言のまま歩を進める。ポーカーフェイスともいえる人好きのする笑みを薄く浮かべてはいるが、デミウルゴスの心中は重い。セバスと協力はしなければならないが別に仲良くなりたい訳ではないのでデミウルゴスとしても今の関係を改善しようという気にはならない、だがこの状況はどうにも気詰まりだ。隣にいるのがもし他の者であればデミウルゴスは心から喜んで楽しい話題を提供しているところだ。

何でよりにもよってこの男が一緒に来てしまったのだろう、その思いが強くなる。

デミウルゴスが守護者の中では非力であるという事を考えれば、格闘戦ではナザリック最強のセバスは戦力的には心強いといえる。互いに補い合えれば彼我の戦力差が余程開いている状況でない限りは切り抜けられるだろう。だがそれは、補い合えればである。デミウルゴスが我慢して合わせるとしてもセバスがデミウルゴスに合わせるというのはいかにも考えづらい。どれだけの強者がいるかもまだ分からないこの未知の世界で補い合う事が期待出来ないのは頭の痛い問題なのだが、期待するだけ無駄というものだろう。補い合わない事を前提に物事を考えるしかない。

数日街を歩き観察した様子ではデミウルゴスとセバスが警戒すべき存在はいないといえるが、モンスターにしろ人間にしろ亜人にしろまだ見ぬ強者への警戒は怠るべきではない。至高の御方々に匹敵するプレイヤーのような強さを持った者もいないとは限らないのだ。例えば情報を得た聖王国の九色、それらの者達はこの国でトップクラスの力を持つと考えられるから強さを計る基準になるだろう、力を見極める機会を持ちたいところである。

もしナザリックがどこかにある場合連絡を取る手段についても考えていたが、初日にアイテムボックスを見て〈伝言（メッセージ）〉のスクロールがない事は確認済みである。セバスも持っていなかった。それなりの

纏まった金を得てからになるだろうが、この世界の魔法について調べてもし〈伝言（メッセージ）〉に相当する魔法があるのであればそれを試してみるしかないだろう。

冒険者組合のドアを開き中に入ると、中にいた冒険者たちに困惑の空気が漂った。魔法詠唱者（マジックキャスター）に見えるデミウルゴスはともかく、（執事姿では余りにも冒険者らしくない為日雇いの賃金で用立てた）旅人用のマントを羽織っているとはいえ白髪の老人に見えるセバスが入ってきた事に戸惑いを隠しきれないのだろう。勿論周囲の空気などデミウルゴスにとっては至極どうでもいい事だ、真っ直ぐにカウンターへと進む。

「失礼、冒険者の登録をしたいのですがこちらでよろしいでしょうか？」

「はい、こちらで承っております」

デミウルゴスが声をかけるとカウンターの向こうに座った受付の女性は営業スマイルと思われる笑顔を浮かべてそう答えた。

「お二人様ですか？　まず組合に加入するのに必要書類料としてお一人様五銀貨を頂きたいのですが」

「問題ありません。セバス」

呼びかけるとセバスは前に進み出てきて、革袋から銀貨十枚を出しカウンターに置きすぐに一歩下がった。受付嬢が置かれた銀貨を確認してからカウンターの下へと移す。

「銀貨十枚、確かに確認いたしました。ではまず書類を書いて頂きたいのですが、代筆にいたしますか？　その場合は代筆料として銅貨五枚を頂きます」

「自筆で問題ありません」

「かしこまりました、ではこちらの書類に記入をお願いします」

書類とペンが差し出されたので、デミウルゴスは淀みなく書類に必要事項を記入していった。程なく記入が終わったので書類を受付嬢へと渡す。

「デミウルゴス様とセバス様の二人組、チーム名は堕落の果実でよろしいですね？」

「はい、結構です」
　誰が見ても好感を抱くであろう穏やかな笑みをにっこりと浮かべてデミウルゴスは受付嬢の確認に了承を返したのだが、斜め後ろからは強烈な殺気が漂ってきていた。
「デミウルゴス」
「何だいセバス」
「そのチーム名は一体どういう事なのでしょう。そういった物は普通チームで相談して決めるのでは？」
「チーム名の記入欄があるとは事前に知らなかったのでね、とりあえず相応しいものを記入しておいたまでだよ」
「それのどこが相応しいのですか、冒険者に相応しいとはこれっぽっちも思えませんね」
「サタンの化身した白い蛇から知恵の実を受け取ってしまいアダムとイヴは楽園を逐われた……知恵を得るというのは人間にとっては堕落の始まりだった、含蓄の深いチーム名だと思うがね？」
「チーム名に含蓄など不要ですし、あなたはともかく私は堕落とは無縁です」
「人聞きの悪い事を言ってもらっては困るね、私は堕落させる側だよ？　私自身は堕落などしない」
「ならば尚の事チーム名としては相応しくないのでは？」
「即興の割にはかなりいい名前を付けられたと思うのだがそんなに不満かね。では聞こうセバス、この名前以上にいい名前の案が君にあるのかな？」
　そのデミウルゴスの問いにぐっとセバスは答えに詰まった。しばらくの沈黙の後、ようやく悔しげに口を開く。
「……ありません。ですがその名前はお断りです」
「まるで話にならないな、代案のない反対意見など聞くに値しないよ。文句を付けるなら代案を用意してからにするのだね。ああ、連れがごねてしまってすまないね、その名前で問題ないよ。話を進めてくれたまえ」
　そう受付嬢に声をかけたものの、鋭い眼光だけでデミウルゴスを射

殺しそうなセバスの強烈な殺気にあてられ可哀想に受付嬢はすっかり怯えきっていた。所構わずそんな殺気を放つとはセバスにも困りものである。そもそもの原因が自分にある事は棚上げしてデミウルゴスは深い溜息をついた。
「セバス、殺気を収めたまえ。お嬢さんが怯えてしまって登録が進まない」
「……失礼いたしました。デミウルゴス、後でじっくりと話し合う必要があります」
「私の方はその必要を感じないね。大丈夫ですかお嬢さん、連れが失礼をいたしました」
　セバスが殺気を収めた後も受付嬢が落ち着くのにしばらくの時間を要した。その後、冒険者の基本的な心得や依頼の仕組み、冒険者の等級や昇給試験などの知識についての基礎講習が行われた。
「以上ですが、何かご質問はございますか？」
「……そうですね、基本的には組合が調査した依頼を引き受け達成し金銭を稼ぐという仕組みについては理解しましたが、依頼の中で倒したモンスターは該当部位を組合に提出する事によって報奨金が出るということでしたね？」
「はい、そうです」
「では例えば、依頼ではなくてもモンスターを狩って部位を提出して金銭を得る、という事は可能なのでしょうか」
「可能です。依頼のない時にモンスター討伐を行う事で糊口をしのぐ冒険者の方もおられます」
「成程、了解しました。では、各モンスターや亜人の提出部位を教えていただけますか？」
　そうデミウルゴスが質問すると、受付嬢は動揺を隠しきれず少しぎょっとした顔をしてみせた。
「今ここでですか？　モンスターや亜人の種類はかなり多いですが……よろしければ明日までに冒険者プレートと一緒に提出部位を記載した紙をご用意しますよ」
「問題ありません、記憶力には自信がございますので今ここでお教え

ください。ですが念の為紙でも頂けると助かります」
　微笑みを浮かべてみせると受付嬢は大丈夫かと言いたげな半信半疑の面持ちながらもモンスターや亜人の提出部位を教えてくれた。この程度の数の事柄を暗記するなどデミウルゴスにとっては造作もない。完璧に頭に入ったが、備えは大事だから紙でも持っておいた方がいいだろう。
　冒険者の身分証となる冒険者プレートは明日までに用意してくれるとのことで、明日また冒険者組合に来る事になった。組合を出る前にどのような依頼があるのか把握する為に依頼の書かれた羊皮紙が貼られたボードを見ておく事にする。
「ふむ……銅級（カッパー）の仕事というのはどれもつまらないものばかりだね。子供の使いではあるまいし」
「どのような仕事があるのですか」
「荷物運搬、薬草採取の手伝い、引越の手伝い、ペンキ塗り、人探し……取るに足りない仕事ばかりだ。だが、そうだね……」
　言いながらデミウルゴスは一枚の羊皮紙を剥がし取った。
「実際の冒険者の仕事がどのようなものか知っておく必要もあるだろうし、この中ではこれが最適だろう」
「どのような内容で？」
「商人の護衛任務に当たる上級冒険者の荷物運びの仕事さ。これなら先輩冒険者から知識を仕入れられるかもしれないし、上手くいけば繋がりも作れるかもしれない。そうすればそこからこの街や冒険者同士の情報網に辿り着く事もできるだろう」
「成程、請ける事に異存はございません」
　セバスも素直に頷いたのでデミウルゴスは羊皮紙を先程登録を行ってくれた受付嬢の所へと持っていった。
「まだ冒険者プレートは出来ていませんが、この仕事を請ける事は可能でしょうか？」
　受付嬢はデミウルゴスが差し出した羊皮紙の中身を確認すると、顔を上げ頷いた。
「はい、こちらの仕事は出発が明後日ですので請けて頂く事は可能で

す……ですが、その……荷物運びなのですが……冒険者の皆様の荷物はかなり重いですよ？」
　気遣わしげな受付嬢の表情に、他人から見た自分達の姿が腕力に劣る筈の魔法詠唱者（マジックキャスター）と老人である事をデミウルゴスは思い出した。
「問題ありません、体力と腕力には二人とも自信がございますので」
「一応念の為確認をさせて頂きたいのですが、お二人であそこにある袋を一つづつ持ち上げてみて頂けますか？」
　受付嬢はホールの隅に置かれた中身の詰まった麻袋を指し示してみせた。
　デミウルゴスとセバスはその言葉に従いホールの隅に向かうと、袋の結び目を掴み二人とも片手で持ち上げてみせた。もしかしたら人間にとっては片手では持てないようなかなり重い荷物かもしれない、だが力の証明にはなるだろう。これから最上級であるアダマンタイト級（随分柔らかい金属だがこの世界では最も硬い金属らしい）の冒険者になろうとしているのだ、この程度の力は示しておいて困る事はないとデミウルゴスは判断した。これを目撃した者から噂が流れ名が売れれば銅級（カッパー）のつまらない仕事よりはマシな仕事が入ってくるかもしれない。こんな軽い荷物小指の先でも持ち上げられるが手を使っているだけ遠慮していると言ってもいい。セバスは多分何も考えないで無造作に片手で持っただけだろう。
「……！」
「何か問題があったでしょうか？」
「いえ、あの、ないです……片手……あっ、もう降ろして下さって結構です、こちらへどうぞ」
　受付嬢は明らかに狼狽えていた。やはり人間からすると片手では持ち上げられないような重さらしい。だが荷物持ちとしては合格点を貰える筈だ。袋を降ろして元の場所へと戻しセバスとカウンターへと戻る。
「引き受けて頂く事には問題はないようですので先方に受け手が見つかった事を連絡しておきます。事前の顔合わせと打ち合わせを兼ねてということで依頼者をお呼びしておきますので明日の朝十時に来

て頂いてもよろしいですか？　その際に冒険者プレートもお渡しします」
「問題ありません。ではそのようにお取り計らいどうぞよろしくお願いいたします、また明日伺います」
　にこりと微笑んで一礼するとデミウルゴスは踵を返し、同じように一礼したセバスもそれに続いて冒険者組合を出た。
「デミウルゴス、宿に帰ったらチーム名についてじっくり話し合いたいと思います」
「君もしつこいね、代案のない反対意見など聞く気はないと言ったろう」
「案はこれから考えますがあなたにも変更する事を真剣に考えて頂かなくてはなりませんので話し合いは必要です」
「私としてはまるで必要を感じない、無駄な時間を使うのは真っ平ご免なのだが」
「無駄な時間とは何ですか、大体にしてあなたは――」
　宿に帰るまでの道程は勿論の事、宿に帰り着いてからも夜まで止める者のいない口論が続いたのは言うまでもない。

＊＊＊

　ダンデライオンというチーム名の冒険者チームは、戦士二人と野伏（レンジャー）と魔法詠唱者（マジックキャスター）の構成の金級（ゴールド）チームだった。たんぽぽ……？　と不審に思って顔合わせの際にデミウルゴスはチーム名の由来を尋ねたのだが、何でもこの地で信仰されている四大神が遺した今では由来の分からない言葉の一つらしい。語感がかっこいいのでチーム名にした、という答えだった。隣のスレイン法国という国では四大神に光と闇を加えた六大神を信仰し、六大神信仰こそが正しいと主張しているのだという事も教えてもらった。
　言葉一つだけでは確証とは到底言えないが、英語として意味の通る言葉が意味不明の言葉として残っているという事はその四大神或いは六大神は至高の御方々と同じ世界（りある、と御方々は言われていた）の住人だった、またはデミウルゴスやセバス同様にユグドラシルから飛ばされてきた存在という事も考えられる。可能性としては留

意しておくべきだろうとデミウルゴスは考えた。
　顔合わせの翌日朝六時、東門の前でダンデライオンと護衛対象の商人と合流しデミウルゴスとセバスは冒険者の野営道具などの荷物を背負子に負って出発となる。護衛は大城壁の砦までなので片道三日ほどの行程となる。魔法についての情報収集をしたいと考えデミウルゴスはダンデライオンの魔法詠唱者（マジックキャスター）、パヴェルの横に並んだ。
「初依頼と聞きましたが、その荷物を背負って汗一つかかないとは魔法詠唱者（マジックキャスター）としては驚異的な体力ですね……」
「鍛えておりますのでこの程度は造作もありません。これまで随分と遠くから旅をしてきましたから、旅人は体力勝負ですしね」
　にこりと人好きのする穏やかな笑みを浮かべてデミウルゴスは答えた。旅などしていない、気が付いたら立っていただけなのだがそんな言っても信じてもらえないだろう荒唐無稽な話をわざわざする必要は特にない。パヴェルは特に疑いも抱かずに納得したようだった。
「この辺りは最近来たばかりで不案内なのですが、我々の故郷と使われている魔法が同じなのかどうかが知りたいのです。この辺りでも位階魔法は使われているのでしょうか？」
「ええ、勿論位階魔法が使われております」
　軽く水を向けてみると、パヴェルはあっさりと頷いてみせた。答えによって対応を変えなければならないと様々に思いを巡らせていた為若干肩透かしを食らったような気になりつつもデミウルゴスは位階魔法が使われている事に安堵を覚えた。これならばデミウルゴスが魔法詠唱者（マジックキャスター）として活動しても何ら問題はない。ならば次は金級（ゴールド）の魔法詠唱者（マジックキャスター）がどの程度の魔法を使えるかどうかを探るべきだろう。金級（ゴールド）は冒険者としては中堅クラスだ、それなりの魔法が使えるとは思うが常識的な範囲を探っておきたい。
「パヴェル殿は何位階の使い手なのでしょう」
「私は第二位階の魔法が使えます。デミウルゴス殿は何位階まで使えるのですか？」
「わたくしは……第三位階までです。ちなみにお聞きしたいのですが、わたくしの故郷では第五位階の使い手も珍しくはなかったのです

がこの辺りでは第二位階や第三位階の魔法詠唱者(マジックキャスター)が一般的なのでしょうか」
せめて〈火球(ファイアーボール)〉程度は遠慮せずに使えなくてはさすがに困る、咄嗟に第三位階だとでっち上げた答えを返しつつもデミウルゴスは内心驚愕していた。ゴミだゴミだとは思っていたがまさかここまでゴミとは。デミウルゴス自身も(数は少ないが)第十位階までの魔法が使えるしユグドラシルでは第五位階どころか第十位階やその上の超位魔法を使えるプレイヤーが圧倒的多数だがそんな事を言い出したらこのレベルの低さでは気違い扱いされてしまうかもしれない。
「第五位階の使い手が珍しくないとは凄い国があるのですね……第五位階はこの辺りでは人を超えた英雄の領域、使い手は片手で足りる程です。魔法詠唱者(マジックキャスター)としては第二位階が使えれば一人前、才能があれば第三位階や第四位階にまで到達する者もおります」
「そうですか、それであればわたくしもこの辺りでは一端(いっぱし)の魔法詠唱者(マジックキャスター)を名乗れそうで安心いたしました、ありがとうございます」
にこやかに礼を告げるとパヴェルも和やかにいえいえと返してきた。その後(してもいない)旅の話になり、アベリオン丘陵の南にはエイヴァーシャー大森林というエルフの国がある森林地帯が存在する事、その先の遥か南方には大きな砂漠がある事などが新たに判明した。ナザリックを探すのに必要になるだろう、デミウルゴスとしてはどうにか地図を入手したいのだが書店などにはなく、一般的な店では取り扱っていない事が判明しているだけだった。それもついでに聞こうと思い立つ。
「しばらくはこの地に留まるつもりですが、この先の旅を円滑なものにする為にもこの辺りの地図を入手しておきたいと考えております。どうにか入手の伝手が欲しいのですが……」
「地図の入手は難しいでしょうね、冒険者組合や魔術師組合でも持ってはいるでしょうが外には出したがらないでしょう。地理情報は漏れると侵略に使われる恐れがありますからね。特にここはアベリオン丘陵がすぐ近くですから、万一にも亜人に情報が漏れたら大変な事

になりますから」
　成程、機密情報扱いだから一般的な店舗で取り扱いがないのか。理由に納得しデミウルゴスは頷いた。地図がない不便の方が大きいのではないかとデミウルゴスは思うのだが、この世界の人々の考えは違うようである。名声が高まれば入手の機会もあるかもしれない、地図についてはとりあえず後回しか、と考える。
「ところでデミウルゴス殿とセバス殿はどのような目的で旅をされているのですか？」
「わたくし共は、離れ離れになった同胞を探しているのです。今の所何の手掛かりも見つかっていないのですが、冒険者として名を馳せれば我々の名が仲間に届くやもと思いこうして登録したという次第です」
「成程、一日も早く見つかるといいですな」
　気遣わしげなパヴェルの声には特段感情を動かされなかったが、パヴェルがお人好しであるという事は分かる。確かに嘘は言っていないがデミウルゴスは本当の事も話してはいない。世間話とはいえ情報は情報、事実今デミウルゴスは情報収集をしているのだ、このパヴェルという男は情報を精査し真偽を見極めるという発想を持たず他人の言葉を鵜呑みにする愚か者とデミウルゴスには映った。
　幸い愚かな人間と話すのはそんなに嫌いではない。堕落させ破滅させる事が出来ればもっと楽しい、逃れられない状態で肉体的な苦痛を味合わせ怨嗟と悲嘆の呻き声を聞ければ更に楽しいだろうが、今は自分の楽しみを追求している時ではない。セバスも戦士二人と和やかに何かを話していた。セバスには前もって、今いる場所は色々とユグドラシルと勝手が違う為ユグドラシルと違う点について情報収集をするようにと言い含めてある。人当たりが良く善良なセバスは人と接触するのが上手いし、前もってきちんと言い聞かせておけば望んだ通りの情報を集めてくれる。精査は別とした情報収集役としては最適だろう。
　もしナザリックがこの世界のどこかに来ているとすればモモンガ様は外界の情報も必ず怠りなく集めようとされるだろう。その時セ

バスがいないというのはさぞやご不便な思いをされているだろうと思われ側近くでお仕え出来ない事に忸怩たる思いが滲む。だがその思いは執事としてその生を定められ主人の側に侍る事を至上の使命とするセバスの方がデミウルゴスよりももしかしたら大きいのかもしれない。好かないとはいえ主人を思う気持ちにデミウルゴスとて共感出来ない訳ではない、決して焦って事を仕損じるようなことがあってはならないが、出来る限り早くナザリックを探し当て帰り着きたい。ナザリックはこの世界にはなくユグドラシルの世界へと帰還する方法もない、という最悪の可能性については探し尽くしてから考えればいい、今考えるべき事ではない。

聖王国領内は聖騎士と冒険者がモンスターを討伐している為危険度は然程高くないという。ただ森に潜むゴブリンやオーガ等の亜人やモンスターが全くいないわけではないので移動の際には商人は護衛を付けるのが一般的とはパヴェルの談だ。丘の点在する草原の中を通る街道を進み三日目。砦近くは軍士が巡回している為危険度は更に低くなるとのことだったが森も深くなってきたので気は抜けないだろう。ゴブリンやオーガ程度（高レベルの亜種でなければ）手を出すまでもなく苦もなく殺せるデミウルゴスにとっては何ら恐れる相手ではないが、商人やダンデライオンの面々が傷付いて依頼達成に支障が出るのは困る。彼等の安全が差し当たっては優先度が一番高いか、と考える。

砦が近付く辺りは細い山道に差し掛かっている。見通しが悪く周囲の木々も密度が高い。狙われるとすればこの辺りだろうとダンデライオンの面々も警戒を強めていた。だが。

潜んでいたゴブリンとオーガは数が多かった。姿を表したのはゴブリン大凡二十体、オーガ五体。そして髑髏が天辺に付いた捻じくれた杖を持ちローブを纏ったゴブリンメイジが一体のオーガを盾にするようにこちらを窺っていた。

「ちゃんと狩っとけよな軍士！」

「愚痴っても仕方ないだろ、奴らときたらすぐ数が増えるしな」

「オーガは俺とレギス、他はゴブリン！　くそっ数が多すぎる！　レ

イモンドさん達は馬車に伏せて！」
　リーダーが指示を飛ばす。こういう時デミウルゴスとセバスは安全な所で荷物を盾にして身を守っているように言われているのだが、状況が状況だ。全員の安全を優先すべきだろう。
「セバス、分かっているね。組合への提出箇所は耳なので頭は潰さないように」
「はい」
　手短に返事をするとセバスは手近なゴブリンへと踏み込み腹に鋭い足蹴りを食らわせた。哀れなゴブリンの腸（はらわた）は水をぶち撒けたように背中を突き破り吹っ飛び辺りに四散する。そのまま流れるような動きで的確にセバスはゴブリンとオーガの腹を蹴り破っていった。デミウルゴス以外の全員が呆気に取られている間、全部を狩り尽くすまでに十秒程もかかったろうか、周囲は土手っ腹に大きな穴の開いた哀れなゴブリンとオーガの死体で埋め尽くされた。
「これでは準備運動にもなりませんね」
　しれっとした顔と平時と変わらぬ口調でそう独りごちるセバスに何か言える者などその場にはいなかった。デミウルゴスは面倒なので無視をした。この程度セバスにとっては準備運動にもならないのは事実であるし、それについての感想も特に何もない。
「ナイフを貸して頂けますか？　今回は荷物運びの仕事だったのでまだ用意していなかったものですから」
「はっ！　はいっ！」
　デミウルゴスが頼むと、弾かれたようにリーダーが大声で返事をし泡を食ってナイフを取り出し渡してくれる。ついでに組合に提出する為の切り落とし方なども聞き、全ての耳の回収が終わる。
「死体はこのままでは通行の邪魔になるでしょうが普段はどうされているのでしょうか？」
「ももも、森に投げ込んでおけば魔獣や野犬が始末してくれると！　思います！」
「成程。セバス」
「はい」

セバスが頷き無造作に死体の脚を掴んでは森に投げ込んでいく。巨体のオーガも背負子を負ったまま楽々持ち上げるその様子をダンデライオンの面々と商人はただ唖然として見守っていた。

その後街に帰り着くまでセバスに話しかけようとする豪の者はいなかった。デミウルゴスもセバスに命令をしていたからか敬語を使われ矢鱈と気を使われるようになった。力を持っているデミウルゴスに脆弱な人間が敬意を持って接するのは当然だからその事については特に感慨はないのだが、セバスは（いつもの無表情だが）少し寂しそうな顔をしていた。そんな顔をする位なら少しは力をセーブすればいいものを全力でやるからそういう事になる、というアドバイスはする気にならなかったのでデミウルゴスはしなかった。考えれば分かる当然の結果である、現時点でデミウルゴスは必要に迫られた時以外第四位階以上の魔法を使う予定はない。

荷物運びの仕事を請けた筈が大量のゴブリンとオーガの耳を提出され組合の受付嬢も極めて困惑していた。ゴミしかいないのだからすぐに上に行けるだろうとは思っていたものの予想以上のカスしかいないらしい。これはもう少し力を示せばすぐにも上の階級に登れるだろうと、デミウルゴスは既に考えてある手段について明日にでも着手するかと考えたのだった。

昇級試験

冒険者向けの宿の酒場兼食堂でデミウルゴスは夕食を摂っていた。セバスは帰り道で以前助けた人に夕食に呼ばれそちらで食べてくるという事で途中で別れた。銅級（カッパー）や鉄級（アイアン）の冒険者向けの安宿の食事は値段に見合った貧相で質の悪いもので、こんな豚の餌にも劣るような食事ならば（どうせ飲食は不要なのだから）食べない方がマシとは思うものの、人間の振りをする以上食事する姿を見せておく事は必要である為、かなりの我慢を強いられながらデミウルゴスは皿を床に叩き付けてぶち撒けてやりたい気持ちを堪えながら極めて口に合わない料理を食べていた。

宿の出入口が開き誰かが入ってきたようだった。特に敵意は感じられないのでデミウルゴスは気にも留めずに食事との格闘を続けていた。入ってきた人物はカウンターへ行き宿の主人と何事かを話すと、デミウルゴスへの座るテーブルへと真っ直ぐ歩いてきた。

「お食事のところすみません、堕落の果実のデミウルゴスさんでしょうか？」

「はい、そうですが」

声を掛けられテーブルの側に立った男をデミウルゴスは見やった。平凡な、取り立てて特筆するところのない容貌と服装の街の住人Ａといった感じの男だった。

「冒険者組合からの言伝を預かってきました。昇級試験についての話があるので明日冒険者組合まで来てほしいそうです」

「確かに承りました、わざわざありがとうございます」

「いえ、それでは失礼します」

街の住人Ａは挨拶をすると宿を出ていった。こんな簡単な用事を伝えるのにも人を使うとは何とも非効率である、位階魔法が使えるならば〈伝言（メッセージ）〉も使えるだろうにどうして使わないのだろうかとデミウルゴスは疑問を抱いた。今回の依頼の旅でもパヴェルが〈警報（アラーム）〉という知らない魔法を使っていた。ユグドラシルとこの世界は様々な事が違うようだから、〈伝言（メッセージ）〉はこの世界には存在しない、或いは何か

仕様が変わった、という事も考えられる。巻物(スクロール)を買えるだけの余裕が出来てからの話にはなるがその辺りも確認しておく必要があるだろう。

依頼達成の報告の際に受付嬢から軽く聞いておいたのだが、巻物(スクロール)の販売など魔法に関する事は魔術師組合が行っているらしい。顔を売っておく必要もあるし一度訪ねてみるのもいいかもしれないと考える。パヴェルに聞きに行ってもいいだろうが、どうも恐れられてしまっているようなので先輩冒険者との顔繋ぎは失敗だったかもしれない。それもこれもセバスが加減というものを知らないからである。忌々しい思いと共にようやくデミウルゴスは最後の一口を口に運び飲み下した。下等生物の粗末な食べ物を口にする今日の試練はこれで終了である。

しかしセバスの加減知らずも悪い面ばかりではないだろう。ダンデライオンからセバスの力について噂が流れれば冒険者の等級とは別の意味合いで名声が高まる。上の等級に上がるには一つ一つ昇級試験を受けていくしかない事は講習で説明されたがそれはいかにもまどろっこしい、圧倒的な力を持つと評判になれば冒険者組合の方でも飛び級を検討してくれるかもしれない。或いは何か大きな事件を解決すれば飛び級も可能かもしれないが、こちらは事件が起こってくれるかどうか運頼みな所がある。適当な悪魔を召喚して騒ぎを起こさせそれを倒してもいいのだが悪魔を召喚すればデミウルゴスの仕業である事はセバスにはすぐに分かる、決していい顔はしないだろう。

デミウルゴスは部屋へと戻り今後の行動について考える。明日話があるという昇級試験は鉄級(アイアン)へのものだろう。どうせ子供のお使いのような内容なのだろうからこなすのに苦はないだろうが、鉄級(アイアン)では評価として不足であるとどうにか冒険者組合に認めさせたい。力を認めさせるのに考えていた手段を今回の試験の内容として提案してみるか、という結論に至る。要は鉄級(アイアン)に相応しい力があるという事が示せれば試験の内容としては問題ない筈だ、鉄級(アイアン)などでは留まらない力があると認めさせたいデミウルゴスの狙い通りに事が運べばそれ

は十分示せる。
　本当は愚劣な人間共に混じって冒険者の等級上げなどというまだるっこしい事をするのは真っ平御免だ、ナザリックを探す為に飛び回りたいのは山々なのだが闇雲に探しても見つからないだろう事は明白、探す為には情報が必要でそれを得る為の地盤固めをしなければならない。今は忍耐の時だ、臥薪嘗胆である。
　食事の際に冒険者達の噂話にも耳を傾けているもののナザリックに関係していると思しき情報はまだ得られていない。この辺りにはナザリックはないのか、それとも表立っては活動していないのか。用心深いモモンガ様であればナザリックが関与していると簡単に分かるような行動はされないだろうから後者の可能性は十分にある。その場合はこの街にデミウルゴスとセバスの名が広まれば必ずコンタクトがある筈である。
　影の悪魔（シャドウ・デーモン）による情報収集も継続しており、この街の情報屋と思しき者達の名前や人相、普段いる場所も大凡当たりは付いている。ただ情報屋から情報を得るには先立つ物が必要である、銅級（カッパー）や鉄級（アイアン）の報酬では心許ない。唯でさえ上手くいっているとは言い難いセバスとの関係を拗らせない為には正当な報酬を払わずに聞き出す強引な手段は取れない。やはり上位の冒険者ランクへの昇級は喫緊の課題だろう。
　程なくセバスも戻ってきたので明日の話を切り出すことにする。
「明日冒険者組合への呼び出しがかかったよ。昇級試験の話だそうだ」
「ほう、それは喜ばしい事です」
　無表情のままセバスは答えたので言葉通りに喜んでいるのかどうかは分からないが、この男はいつもこうだ。いちいち気にはしていられないからデミウルゴスは話を進めることにする。
「昇級試験の事なのだがね、恐らく下らない内容だろう。合格する事自体は問題ないだろうが、それを毎回繰り返すのも徒労というものだ。そこでだ、アベリオン丘陵で亜人討伐をしてその成果をもって我々の力を示そうと思うのだが」

「組合で説明があった通り飛び級は認められないのでは？　郷に入れば郷に従えと申します、指定された内容で試験を受けた方がよろしいのではないでしょうか」
「そんな事をしていてはアダマンタイトまで登るのにいつまでかかるか分かったものではない。我々の為すべき事は一刻も早いナザリックへの帰還、そうではないかね？　その為に手段は……私も最大限譲歩して君が嫌がらないだろうものを選んではいるつもりだし、その範囲でより迅速に為せる手段があるならそれを採るべきだと考えるがセバス、君はどう考えているのかな」
　デミウルゴスの問い掛けにセバスは僅かに表情を硬くした。ナザリックへ一刻も早く帰りたい気持ちはデミウルゴスもセバスも変わらないだろう。そこを突かれてはセバスも弱い筈だ。
「……亜人討伐と申しますが、どの程度の強さの者達がいるかも分からないでしょう」
「大城壁があるとはいえこの地の人間共と睨み合っているという時点で大体の程度は知れるよ。無論、我々では対応できない強敵がいた場合はすぐに退く事を前提にする。敵が〈次元封鎖（ディメンジョナル・ロック）〉でも使ってこない限りは安全に離脱できる」
「〈上位転移（グレーター・テレポーテーション）〉ですか……」
　心から嫌そうな顔をセバスはしているがデミウルゴスだって同じ思いだ。この男と引っ付いて転移など想像するだけで胸がむかむかする。いっそ魔将を召喚して間に挟んで〈上位転移（グレーター・テレポーテーション）〉を使わせようかと思う程だ。だが安全な離脱方法としては最適なのだから採用しないわけにはいかないだろう。
「君の気持ちは分かるがそんなにあからさまに顔に出すのはどうかと思うね」
「同じ台詞をそっくりお返しします」
「で、どうなんだい、私の案にはまだ反対かい？」
「……いえ。それが今出来る中で最善であるという事は分かりましたので反対はいたしません。一刻も早くナザリックへ帰還したいという思いはわたくしも同じですから」

「分かってくれて嬉しいよ。恐らく明日この話を持ち出したら組合長辺りが出てくるだろう、そして君と同じように規則に反する事を容認できないと言う筈だ。話は私がするから君はもし聞かれたら私に賛成していると答えてくれればそれでいい」
「分かりました」
　そうしてセバスの了承を取り付けて次の日。朝一番の時間帯は仕事を求める冒険者で混み合っている為少し遅い位の九時頃に冒険者組合へと向かう。思った通りに受付は空いていて、すぐに話をする事ができた。
「おはようございます、昇級試験についてお話があると伺い参りました」
「堕落の果実のお二人様ですね。先日のゴブリンとオーガ討伐の功績が評価されて鉄級（アイアン）への昇級試験を受ける資格が認められましたが、どうされますか？」
　チーム名を呼ばれてセバスが嫌な顔をして睨んできたがデミウルゴスは無視した。受けないという選択肢は勿論デミウルゴス達にはないのだが組合側の出す条件を一々飲んでいては牛歩の歩みになってしまう。故に先手を打たなければならない。
「その前に一つご提案があるのですが。わたくし共はこれからアベリオン丘陵へ行き亜人討伐をしてこようと考えておりました。試験の内容を亜人討伐にして頂き、その結果によってランクを考慮していただくという事は可能でしょうか？」
「申し訳ありませんが組合から指定された内容以外での試験は承っておりません」
　試験の内容変更、そんな事を受付嬢が一存で決める事など出来よう筈もない。そして通常はランクは昇級試験を受けて一つ一つ上に登っていくしかないのだ。この返答はデミウルゴスの想定内である。
「そうですか、残念です。では昇級試験は受けずに銅級（カッパー）のままモンスターや亜人の討伐で食い繋ぐ事にしましょう。どうせこの街にいつまでもいる訳ではない、いずれはまた旅に出るのですからね」
「……あの、このままで少しお待ち頂いてもよろしいでしょうか」

「はい、お待ちしておりますよ」
にっこりと微笑んでデミウルゴスが返答すると、受付嬢は席を立ち階段を上へと登っていった。ある種の賭けだったがどうやら勝ったようである。
話を聞いた限りでは冒険者のシステムは冒険者を育成するのではなく上に登れる優秀な者をふるいに掛けるシステム、それならば優秀な冒険者になれる見込みのある者をなるべく囲い込みたい筈である。大城壁が破られた場合アベリオン丘陵の亜人の脅威に真っ先に晒されるこの街なら尚更の事だ。セバスの圧倒的な力はもう上の耳にも入っているだろう、だからこそ恐らくは即日で昇級試験が決まったのだ。カリンシャの冒険者組合としてはデミウルゴス達に上の階級に登ってもらいずっとこの街に留まってほしいと考えているに違いない、だからこの街を離れる事を示唆すれば引き止めに動くという寸法だ。その意向が果たして受付嬢にまで伝わっているかという懸念はあったのだが杞憂だったようだ。そのまましばらく待っていると受付嬢が戻ってきた。
「恐れ入ります、組合長からお話があるそうなので上まで来て頂いてもよろしいでしょうか」
「勿論、参りますとも」
快く返事をしてデミウルゴスは階段へと向かった。セバスもそれに続く。階段を四階まで登り、奥の部屋の前で受付嬢は立ち止まりドアをノックした。
「失礼します、堕落の果実のお二人をお連れしました」
ドアを開け中へどうぞと受付嬢が招いてくれたので中へと入る。中はソファとテーブルが置いてありその奥には書類の積まれた机、壁には本棚が並んでいた。デミウルゴスにとってはさして見るべきものの無い見窄らしい部屋である。ソファに座った恐らくは組合長と思しき男がこちらへ掛けてくれというので一礼して組合長の向かいのソファに腰掛ける。
「私がカリンシャ冒険者組合の組合長をしているオルズベックだ、よろしく頼む」

「よろしくお願いいたします」
「話は聞いている、昇級試験を受けない意向との事だが」
「ええ。わたくし共の目的は名声を高める事と日々の糧を得る事です。冒険者としての等級を上げずともモンスターや亜人の討伐で成果を上げれば日々の糧は得られますし自ずと名声も高まりましょう？　それであれば子供の使いのような試験を受ける必要もないと判断したまでです」
　子供の使い、の所で組合長の顔は強張った。苦い顔をした組合長が反論しようと口を開く。
「いやしかし……試験内容を聞いてもいないというが」
「銅級（カッパー）や鉄級（アイアン）の仕事内容は大凡把握しております、そこから大体の難易度の推測は付きます」
「名声を高めるならばオリハルコンやアダマンタイトのプレートを得れば他国にまで名前を轟かせることも出来る、君達の目的は同胞を探す事と聞いたがその目的にも適うのではないかね？」
「仰る通りの目的で冒険者に登録したのですが、実力に見合わぬ下らない試験で毎回力を示すのも面倒な事。ならばわたくし共の探す情報がある程度得られた時点でこの街を離れようと思った次第です」
「申し訳ないのだが、特例は認めていないのだよ。どんな上級冒険者でも一歩一歩階級を登ってきている、君達だけを特別扱いするわけにはいかない。これはどこの冒険者組合でも同じ事だ」
「朝令暮改では組織が立ち行きませんからね、そのご判断は正しいと考えますよ。ただ、それであればわたくし共の結論としては昇級試験は受けない、というお答えになります」
　デミウルゴスの答えを聞き、蓼でも食べたような苦い顔をして組合長は黙り込んだ。しばらくの沈黙の後、組合長はセバスの顔を見た。
「セバス君だったね、君も同じ考えなのだろうか」
「この件に関してはデミウルゴスに一任しておりますのでわたくしも同じ考えと思って頂いて結構です」
　にこりともせず無表情でセバスは言い切り、答えに詰まった組合長は再び押し黙る。最下級の銅級（カッパー）の冒険者の名前を組合のトップが把

握している時点でかなり重要視されている事が分かる。
「……アベリオン丘陵へ亜人討伐に行くつもりと聞いたが」
「はい、その予定でおります」
「試験内容の変更は認めよう。だが成果によってランクを決めるという件は了承しかねる」
「成果を見れば考えを変えて頂けると思いますよ。試験内容の変更を了承して頂いたお気遣いに感謝いたします」
デミウルゴスは自信に満ちた笑みを浮かべてみせるが組合長はただ苦い顔を返しただけだった。

＊＊＊

前回と同じ大城壁の砦まで、同伴する商人や冒険者はないので二日ほどの行程で踏破する。それこそ〈上位転移（グレーター・テレポーテーション）〉で移動すれば効率的なのだが、デミウルゴスもセバスもお互いにその手段は最終手段として最後の最後まで使いたくないと考えているし、アベリオン丘陵まで行ったというのにあまりに帰りが早くては不審を抱かれるだろうという理由もあるので歩く事にした。力ない人間に合わせるというのも中々苦労するものだとデミウルゴスは心の中だけで愚痴を零した。
門まで進み丘陵まで亜人討伐に赴く旨を告げると、衛兵は銅級（カッパー）のプレートを見て顔を顰めた。
「自殺願望なら止めんが、やめておいた方がいいと思うぞ」
「ご心配痛み入ります。ですがもし丘陵に命散ったとしてもそれが我等の運命（さだめ）だったという事でしょう、冒険者として戦って死ねるならばそれも本望というものです」
引き止められるのも面倒なのでデミウルゴスは自殺願望を装う事にした。
「そこまで言うならもう止めんが……知らんからな？」
死に行く者を見送る切なげな哀れみの眼差しをデミウルゴスに向け、衛兵は門を開けに歩き出そうとした。それを呼び止める者があった。
「おい、ちょっと待ってもらってもいいかい？」

「はっ！　カンパーノ班長閣下！」
　衛兵を呼び止めたのは鍛えられた肉体とごつい風貌に丸くきょろりとした目だけが不釣り合いな変わった容姿の男だった。班長の称号に閣下を付けるのも不釣り合い極まる。だがデミウルゴスは呼ばれた名に心当たりがあった。推測が正しければこの男はオルランド・カンパーノ、聖王国で強者が得る称号である九色の一色を頂く一人である。
「そちらのご老人、かなりの使い手とお見受けするが。どうですかね、俺と一戦」
「……失礼ですが、あなたは？　わたくしはセバス・チャン、ご覧の通りの銅級（カッパー）冒険者ですのであなたのご期待に添えるかどうか」
「おっと、焦って名乗りも忘れてましたね、こいつは失礼。俺の名はオルランド・カンパーノ、しがない聖王国軍の班長ですよ」
「申し訳ありませんが我々は先を急ぎますので……」
「いいではないですかセバス、そんなに時間はかからないでしょうし受けて差し上げれば」
　断ろうとするセバスをデミウルゴスは横から制した。九色の力は見極めておきたいと前々から考えていた、それにこの砦を最前線で守る者の力量を見られれば丘陵にいる亜人の程度もより正確に分かろうというものである。この程度でも撃退出来ていると思うのか、これ程の力を持ってしても制圧できないと思うのかはまだ分からないが。デミウルゴスが見た所の印象としてはこのオルランド・カンパーノという男は他よりは多少マシなだけのゴミなのだが何か隠し持った力があるとも知れない。腰に何本もの剣を携えているのはどういう訳なのか、そこまではカリンシャに流れる噂だけではこの短期間では調べきれなかった。手合わせというからには命の奪い合いにはならないだろうしセバスで様子を見るのはいい手だろう。
「お連れさんもそう言っている事ですし是非、そんなにお時間は取らせませんから」
　オルランドが手を合わせ軽く頭を下げてくる。セバスはデミウルゴスに渋い顔を向けて盛大な溜息を漏らした後で、オルランドに向き

直り渋々といった様子で頷いた。
「仕方ありませんね、では軽く一手、胸をお借りいたします」
「決まりですね、ではこちらへ」
　オルランドが歩き出したのでセバスとデミウルゴスもそれに続く。やがて着いたのは簡単な柵で囲われた訓練場だった。柵に訓練用と思しき剣や槍や盾が立てかけられている。
「本当は命の奪い合いって奴が出来れば一番なんですがね、さすがにそれはまずいでしょうから。武器は何を？」
「わたくしは修行僧（モンク）ですので己の肉体が武器、お気遣いは無用です」
「ほう、そいつは楽しみだ」
　楽しげに笑みながらオルランドは剣を二本取ると両手にそれぞれ握った。利き腕でない方の腕にも同じ剣を持った二刀流、扱いが難しく熟達に困難を要する剣術だがそれだけではセバスにとっては然程脅威ではないし、腰に携えた何本もの剣の答えにもならない。どうにかあれを使わせて手の内を見られればとデミウルゴスは考えたがさすがにオルランドにも命の奪い合いまでする気はないようなので腰の武器は抜かないだろう。そしてデミウルゴスの目が正しければオルランドは腰の武器を抜く余裕すら与えてもらえない。
　野次馬が徐々に周囲に集まり出していた。両者がそれぞれ構えをとり、先程デミウルゴスを哀れんできた衛兵が始めの合図を出した。
　先手を打ったのはオルランド、右腕の上段からの鋭い斬撃がセバスへと浴びせられる。だがそれはセバスの拳で阻まれ、がきんと金属がぶつかったような音がした。そのままの流れでセバスは反対の拳を繰り出し、それをオルランドの剣が阻もうとする。まさにぶつかろうとする刹那、セバスの腕が上方へと振り抜かれ、防ごうとしたオルランドの剣はその拳に弾き飛ばされた。がら空きになったオルランドの胸目掛けて、オルランドが対応できない速度でセバスは掌底を繰り出した。その動きを視認できた者はデミウルゴス以外にはその場にはいなかっただろう。オルランドは勢い良く後ろへと吹っ飛ばされ、ばきばきと柵が折れる音が派手に鳴る。
　オルランドが立ち上がる様子はなかった。デミウルゴスを哀れん

できた衛兵が様子を見に行く。オルランドの顔を覗き込み呼吸を確かめる。
「は、班長閣下は……気絶しておりますので、勝負はここまで！」
その結果に野次馬の兵士達は騒然となった。モンスターや亜人相手には容赦がないのに人間相手ならきちんと手加減できるのだからセバスの甘さの基準というのは曖昧である、感情で物事を決めるセバスのそのやり方がデミウルゴスは好きではない。デミウルゴスのセバスに対する感情はさておき、何にせよ九色の一人がこの程度という事は知れた、この男が最前線を任されているという事は亜人達はこの男程度かそれより下と考えていいだろう。九色にオルランドを遥かに上回る強者がいないとは言い切れないので警戒を解くべきではないだろうが、目先の心配はなくなったと考えてもいいだろう。
オルランドは重いのだろう三人掛かりでどこかへと担がれていき、今度こそデミウルゴスとセバスは門を開けてもらい通してもらった。門を抜け目の前に広がっているのは平坦な大地、丘陵地帯はここからずっと先になるようだった。門から歩く事一日、ここまで来れば門からの人間共の監視の視線は気にしなくてもいいだろうとデミウルゴスは判断した。
「さて、あなたにばかり働かせているのも悪いですから、亜人共は私が狩ってきますよ」
「どういう風の吹き回しですか、それに一人では対応できないような強者がいないとも限らないでしょう」
「その場合はここまで転移で戻ってきます。あのオルランドという男を見る限りその心配はいらないと思いますがね。そんな強者が亜人にいたならあんな男では砦の守りは務まりませんよ」
デミウルゴスのその言葉にセバスはそれ以上の反論ができなかったようで、憮然とした表情で頷いただけだった。オルランドの手応えのなさは実際に戦ったセバス自身が一番良く分かっているだろう、当然の結果だ。
デミウルゴスはローブを脱ぐとセバスに預け、背中から皮膜の翼を生やした。創造主（ウルベルト様）から賜った衣装は魔法の装備だから穴が空いても

塞がるが、人間の街で買ったローブはそうはいかない。
「すぐ戻りますのでここで待っていてください」
「お気を付けて」
まるで心の籠もっていないセバスの見送りの言葉を聞き流してデミウルゴスは飛び立った。空からの方が亜人の集落は発見しやすいだろうがセバスを抱えて飛ぶなど真っ平御免である、敵の力量もある程度見極めが付いたというのもあり一人になった。デミウルゴス一人の方がこれから先はやりやすい、セバスがいれば間違いなくいい顔をしない。
半刻ほども飛んだだろうか、集落らしきテントの集まった地点を見つけデミウルゴスは広場の中心と思われる地点に降り立った。そこにいたのはコブラのような頭を持ち鱗に覆われた身体を持つ二足歩行の亜人、恐らくは蛇身人（スネークマン）と呼ばれる種族だろう。提出箇所は尻尾の先でしたね、とデミウルゴスは自分の記憶に確認を取る。
蛇身人（スネークマン）達は降り立ったきり何もしようとしないデミウルゴスを強く警戒しつつ周囲を取り囲んだ。知らせが行ったのだろう、包囲の数は徐々に増えている。数が多ければ多いほどいい、後の手間が省けるというものだ。見たところこの集落の蛇身人（スネークマン）はオルランドにも劣る者しかいない。これであれば最小限の手間で最大限の見返りを得られそうだった。そろそろ頃合いか、と考えデミウルゴスは口を開いた。
『自分の爪で自分の喉を切り裂きなさい』
朗々と響き渡ったその声を聞いた広場の蛇身人（スネークマン）達は一斉に己の爪で己の喉を傷付け切り裂いた。痛みの余りにほとんどの者が倒れ伏し苦悶と苦痛の呻きを上げる。その声はデミウルゴスにとっては妙なる調べだ。
ああ、もし拷問（トー）の悪魔（チャー）がこの場にいたなら治癒させてまた己の手で己の喉を切り裂かせ永遠の苦痛を与えるのに。親が子の喉を切り裂くという趣向もいいし、逆もきっと楽しいだろう。友人同士、恋人同士、そういった絆を引き裂いてやりたい。抗えない絶望に光が失われる瞳を見たい。終わりのない苦痛に心が死んでいく様を見たい。

そこまで考えて、いけない、とデミウルゴスは思い直した。今は己の楽しみを追求している時ではない。出血が多く息絶えた者もいるようだったが息が残っている者もいる。止めを刺してやるのは慈悲深すぎる、苦しみ藻掻いている様をデミウルゴスとしてはこのまま眺めていたいがセバスを余り待たせるのもさすがに悪いし機嫌が悪くなられても困る。さっさと仕事を済ませるか、と頭を切り替える。

「悪魔の諸相：鋭利な断爪」

片手の指先だけを八十センチほどの鋭利な長い爪に変え、まだ息のある蛇身人（スネークマン）に止めを刺し尻尾の先を回収する作業にデミウルゴスは掛かった。全ての死体から尻尾の先を回収し終わるがおおよそ二百は集まっただろうか。成果としては恐らく十分だろう。集落を皆殺しにしてもいいが子供の尻尾が混ざっていたらセバスがうるさそうなのでやめておく。戦士なら殺して良くて子供は殺してはいけないというのはデミウルゴスには理解できない論理である。

セバスと合流しそこからはまた歩きでカリンシャに帰還する。帰った足で冒険者組合に報告に行ったが、アベリオン丘陵に出ていって生きて帰ってきただけでも驚きなのに背負い袋一杯の蛇身人（スネークマン）の尻尾の先を提出され、受付嬢はとうとう卒倒した。ランクについて検討したいので数日考える時間をくれ、と組合長が頼み込んできたのはデミウルゴスからすれば当然といえば当然の結果だった。

普通の冒険者

ランクについての組合からの回答が出る数日の間、デミウルゴスはセバスと影の悪魔（シャドウ・デーモン）も使い自身も動いて情報収集に勤しんだ。この先の一手については既に考えてある、その為の準備である。

幸い多額の報奨金が手に入ったので情報屋から情報を買う余裕も出来たし、あちこちでお節介をしているセバスになら喜んで知っている事を話してくれる者も多い。情報収集の幅が広がったのは喜ばしい事だ。

調べたのは主に亜人の中の強者についてだ。大城壁に程近いカリンシャには亜人についての情報も多くある。〝七色鱗〟、〝豪王〟、〝氷炎雷〟、〝獣王〟、〝灰王〟、〝螺旋槍〟、〝黒鋼〟、〝魔爪〟、等々……二つ名を持つ有名な亜人についての評判や判明している能力等の情報はすぐに手に入った。

その中でも特に興味深かったのは山羊人（バフォルグ）の王、〝豪王〟バザーについての逸話だ。バザーは大城壁まで兵を率いて攻め込み、オルランド・カンパーノと戦ったのだという。バザーは武器破壊という恐るべき武技を持ち、破壊王という異名も持つ。バザーはオルランドの持つ武器全てを破壊しあわやという所まで追い込んだが砦からの援兵を見て撤退したという。オルランドは試合に勝って勝負に負けたといったところだろう。だがデミウルゴスにとっては問題はそこではない、重要なのは話を聞く限りではバザーがオルランドとどっこいの実力しかないという所である。わざと手を抜いて遊んでいたという可能性もゼロではないが、たかだか人間の兵士が援軍に来たからといって退く辺り、オルランドを殺しきれなかったと考える方が現実的だろう。

異名持ちの亜人の長は亜人の中でも十傑と呼ばれる者らしいが、その中でバザーだけが弱いというのは考えづらい、恐らくはそれぞれの実力はそれなりに拮抗しているだろう。突出した実力を持つ者がいれば亜人同士の紛争が日夜続くアベリオン丘陵をその者が率いる部族が平定していてもおかしくはない。亜人の世界は力こそが正義と

いうから尚更だ。それにしても力こそが正義というのはシンプルで実にいい、共感できる考え方だとデミウルゴスは思った。全てを腕力だけで決める脳の中身まで筋肉で出来ているような者達は論外だが、腕力が力なら魔力も智もまた力である。最後まで立っている者こそが勝者であるというのは覆せない真理だろう。

評判としては十傑に対抗できるのは九色の中でも最強と名高い英雄の領域に達した聖騎士、レメディオス・カストディオが最右翼だろうというものだった。どれ程の実力の持ち主かは実際に見てみないことには分からないが、一応警戒はすべきかと頭に留め置く事にする。位階魔法は第五位階の使い手が英雄の領域とパヴェルが言っていた筈なので警戒しすぎる程の事もないかもしれないが気は抜かない方がいいだろう。

アベリオン丘陵は人間にとっては極めて危険な未踏の地の為、どの部族がどこにいるのかなどの詳細は得られなかった。遊牧民のように様々な場所を移動する者達もいるというからどちらにしろ所在の情報は足で稼がねばならないようだった。それについては何もデミウルゴスが自分自身で行う必要はない、適当な悪魔でも召喚して探させればいい。

金銭的に余裕が出来たので魔術師組合も訪れた。〈伝言（メッセージ）〉の巻物（スクロール）があるかを問うとあるとすぐに答えが返ってきたが、何に使うのかと言いたげな怪訝そうな受付係の顔が気になり念の為デミウルゴスは詳細を問う事にした。

「確認の為なのですが、〈伝言（メッセージ）〉の巻物（スクロール）について詳細を教えて頂けますか？」

「はい。〈伝言（メッセージ）〉は離れた者との交信を可能にする魔法ですが、距離が離れると会話が極めて聞き取りづらくなる為情報の信頼性には欠ける魔法です。会話が明瞭な状態で交信できる距離は術者の魔力によって左右されますが巻物（スクロール）ですと……ここからですと精々首都辺りまでしょうか」

やられた、とデミウルゴスは思った。まさかそんな制限がこの世界で〈伝言（メッセージ）〉にあろうとは考えてもいなかった。これではもしナザリッ

クが遠い地にあった場合はこちらの所在を伝える事もナザリックの所在を確認する事も出来ない。だが、〈伝言(メッセージ)〉を使ってみることでもしかしたら未だ確認が取れていないこの世界にナザリックの者達が存在するかどうかを確認する事位は可能かもしれないし、付近に存在すれば交信する事も可能だろう。

デミウルゴスは結局〈伝言(メッセージ)〉の巻物(スクロール)を二本買った。交信相手はモモンガ様とアルベドの予定だ。最も優先して交信すべきはモモンガ様なのは言うまでもないが、モモンガ様はもしかしたらりあるに既にお隠れになられているかもしれない。その辺りも含めた状況をアルベドならばナザリックの面々の中では一番把握しているだろうという理由での人選だ。宿の部屋に帰るとセバスも既に戻っていた。

「〈伝言(メッセージ)〉の巻物(スクロール)があったので買ってきたよ」

「本当ですか、それでしたらナザリックとすぐにでも連絡が付くのでは」

「それが、残念な事にこの辺りで使われている〈伝言(メッセージ)〉は距離によって減衰して遠くなればなるほど交信が困難になるらしい。ナザリックが近くにあればいいが、遠い地にある場合は交信できないかもしれない」

デミウルゴスのその言葉に、セバスは僅かに俯き目線を伏せ、明らかに落ち込んだ。期待が大きかったせいもあるのかもしれないが相当気落ちしたらしい。さすがに哀れになりデミウルゴスは言葉を続けた。

「そう気落ちする事はないよ。モモンガ様とアルベドに交信を試みてみようと思うのだがね、〈伝言(メッセージ)〉が繋がれば例え話す事は出来なくても存在は確認できるだろう？　それならば我々が名声を高めれば我々の存在は必ず届く、という事さ。モモンガ様がそのような情報を見逃す筈がないからね」

「……そうですね、お近くにおられるという可能性もございますし」

「とりあえずは使ってみよう、その結果によって今後どうするかを考えればいい」

言いながらデミウルゴスは巻物(スクロール)を開き〈伝言(メッセージ)〉の魔法を発動させ

た。交信相手はまずはモモンガ様だ。糸のようなものがデミウルゴスから伸びて何かを探る感覚があり、それはどこにも届かずにやがて〈伝言(メッセージ)〉の効果時間が過ぎ去り糸は切れた。無言のままデミウルゴスは二枚目の〈伝言(メッセージ)〉の巻物(スクロール)を発動させる。アルベドを探す糸もどこにも届かずにやがて切れた。

セバスが結果を聞きたそうにこちらを窺っているがあまり話したい結果ではない。この結果もナザリックがこの世界には存在しないという事を立証するものではないとデミウルゴスは考えていたが、セバスに話すにはその可能性はあまりにも不確実なものだ。

デミウルゴスの中では既に確信だがこの世界はユグドラシルとは全く異なる世界であるという可能性。〈伝言(メッセージ)〉の魔法が届かなかったのはこの世界ではまだモモンガ様ともアルベドとも顔を合わせていないから、という可能性だってなくはない。何せ距離によって減衰するなどという制限がこの世界の〈伝言(メッセージ)〉にあった位なのだ、それにそう考えればモモンガ様や他の者から〈伝言(メッセージ)〉での連絡がない事にも説明が付く。だがそれをどうセバスに説明するか、それをデミウルゴスは今考えていた。

「まず結論から言おう、〈伝言(メッセージ)〉はモモンガ様にもアルベドにも繋がらなかった。だがそれで絶望するにはあたらないと私は考えるよ」

「……何故ですか？　〈伝言(メッセージ)〉が繋がらないという事は相手がログアウト状態、つまり存在しないからなのでは？」

「可能性についてずっと考えていたのだが、余りに荒唐無稽すぎるので君に信じてもらえるかどうか分からなくて話していなかった事がある。私は、我々二人がユグドラシルではない別の世界に飛ばされたのではないか、と考えている」

そのデミウルゴスの言葉に、セバスは怪訝そうに眉根を寄せ正気かと言いたげな目でデミウルゴスを見た。デミウルゴスにとっては想定内の反応だ、デミウルゴス自身も出来れば信じたくなかった可能性なのだから仕方のない話だろう。

「ナザリック一の智者の言葉とは思われませんね、何を根拠にそのような事を」

「可能性、と言ったろう。逆に問いたいのだが君はおかしいとは思わなかったのかね。ユグドラシルには存在しなかった文字、存在しなかった魔法や魔法の制限、武技なる特殊技能（スキル）とは異なる体系の技、冒険者なる職業の存在、暮らす人間の脆弱さ……我々の知るユグドラシルとは余りに違いすぎる。それにここがユグドラシルだとしてモモンガ様がログアウトされている可能性は十分にあるが、ＮＰＣであるアルベドがログアウト状態というのはユグドラシルでは絶対に有り得ない事だ」

「それは……アルベドがログアウト状態なのは何故なのかは分かりませんが……そのような場所もユグドラシル内には存在している、と考える方が自然では？　位階魔法が使われているという事はユグドラシルであると考える方が自然かと」

「私はそうは思わないね。ここはユグドラシルのどこかと考えるにはユグドラシルとの相違点が多すぎる、別の世界にユグドラシルの存在から位階魔法が持ち込まれた、と考えた方が自然だよ。ダンデライオンという英語を遺した四大神という存在は我々のようにこの世界に迷い込んだユグドラシルの存在だったのではないかと私は考えている。もし過去に他にも我々のような存在がいたとしたら、その者が位階魔法を広めたとしても不思議ではないだろう」

　推論でしかないがそうでも考えなければ辻褄が合わないのだ。デミウルゴスの推論を聞いたセバスの目線は険しくなったが、それ以上の反論をしてこようとはしなかった。

「……もし、そうだったとしましょう。それと〈伝言（メッセージ）〉が繋がらなかった事にどのような関係があるというのです？」

「この世界では我々はモモンガ様ともアルベドともまだ顔を合わせていない、だから繋がらなかった、という事は考えられないかい？　勿論ナザリックが今もヘルヘイムにあるという可能性が一番高いだろう、別々の世界にいるからＮＰＣであるアルベドとも交信出来ない、と考えるのが最も可能性が高い。だが我々がこの未知の現象に巻き込まれたようにナザリックもまたこの世界のどこかに飛ばされている、という可能性だってまだ完全には否定出来ない。絶望するのは考

え得る手段を全て講じて世界中を探し尽くしてからでも遅くはないと思うがね？」
　諭すようなデミウルゴスの言葉にセバスは視線を和らげ少しだけ俯く。少し考え込んでからセバスは顔を上げ、真っ直ぐにデミウルゴスを見据えた。
「絶望するのにはまだ早いしまだまだ全ての手段を講じたわけではない、というのには同意いたします。あなたの言葉を全て受け入れた訳ではありませんが」
「それだけ分かって貰えれば十分だよ。私の言っている事は推論に過ぎない、何も確証はないのだしね。ただ、様々な可能性を考慮すべきだ、という話さ」
「それにしてももし……あなたの言う事が正しかったとして……ナザリックが未だヘルヘイムにあるのだとしたら、我々はどうやって帰ればいいというのでしょう……」
　そう呟いたセバスの面に浮かんだ苦悩の色は、デミウルゴスも抱くものと同じものだ。至高の御方々にお仕えする事が二度ともう叶わないのではないか、という考えの端に浮かべるのもおぞましい恐ろしい可能性。デミウルゴスとセバスの存在意義や存在価値を根本から否定するその可能性だって、決して無視できない。
　デミウルゴスはセバスの事を相容れない存在だと思ってはいるが、ナザリックと至高の四十一人に対するセバスの忠誠心は微塵も疑っていないし己と同じものを抱いていると考えている。だから、ナザリックに帰還出来ない可能性について感じる底知れぬ恐ろしさもよく分かる。セバスについて他の点はまるで理解出来ないがデミウルゴスにとって最も重要である至高の四十一人及びナザリックへの忠誠についてだけは共感出来るから二人でやっていこうと何とか思えているし可能な限りの譲歩もしている、というのが正確だろう。
「帰れない可能性も確かにないわけではないが、その事を考えるのは打てる手を全て打ってからでも遅くはないだろう。今は為すべき事を考えよう」
　デミウルゴスのその言葉は、セバスだけではなく自分に向けたもの

でもあった。もしナザリックもなくヘルヘイムへと還る道も見つからず寿命のない異形種である二人がこの世界に取り残されたとしたら、長い長い年月をどう生きていけばいい。何の意味も価値もない生を生きる事など一秒たりとも耐えられそうもなかった。だがそれを考えるのは世界中を隈無く探し尽くしてもナザリックもヘルヘイムへ帰還する手段も見つからなかった時まで先延ばしにしてもいい筈だ。今は全力でナザリックを探す、それだけを考えればいい。改めてデミウルゴスは自分にそう言い聞かせた。

＊＊＊

冒険者組合から呼び出しがかかり、デミウルゴスとセバスは組合へと向かった。受付に顔を出すと組合長から話があるという事で組合長の部屋へ再び通される。

「よく来てくれたね、掛けてくれたまえ」

「失礼いたします」

デミウルゴスとセバスが一礼しソファに掛けると、組合長は二人へと白金のプレートを差し出した。

「協議の結果、君達の実力は下位のランクには相応しくないだろうという結論が出た。特例として白金（プラチナ）ランクへの昇格が認められた。これが新しいプレートだ」

「ありがとうございます」

白金（プラチナ）とは安く見られたものです、という内心はおくびにも出さずデミウルゴスは穏やかに笑んでプレートを受け取った。このカリンシャにいる冒険者の最高ランクはミスリルである事がセバスの情報収集で分かっている。恐らくは実績のない二人を一気にミスリル以上にしては他の冒険者からの反発を食らうという政治的配慮の末のランク付けだろう。デミウルゴスとて余計な厄介事はご免だから仕方ない側面もあると言える。

それに実績がオーガやゴブリン、蛇身人（スネークマン）といった雑魚では数をどれだけ狩っても白金（プラチナ）止まりもやむを得ないともいえる。先の時点では情報を集める時間が不足していたのもあるしある程度は段階を踏んだ方がいいだろうと判断したのもあるが、ここから先は一気に行きた

い。予め計画してあった通り、もっと分かりやすく、はっきりした形で実力を示す必要がありそうだった。
「君達も十分理解しているとは思うが今回は特例だ、今後は一切認めないので覚えておいてほしい」
「心得ております。白金級ともなればさすがに子供の使いのような仕事はありませんでしょうし、わたくし共も不足はございません」
「……そうである事を心から願うよ」
　悄然とした様子で組合長はそう答えた。言葉通り心からの願いなのだろう。
　白金のプレートを付けて銅のプレートは返却し一階まで降りて、依頼の貼り出された掲示板をデミウルゴスは眺める事にした。セバスは意外そうな顔をして小さな声で尋ねてくる。
「普通の依頼をされるので？」
「どうやらアベリオン丘陵は大分広いようだし、必要な情報を得るまでには今しばらく時間がかかるからね。それに普通の冒険者の振りも多少はしないと組合長殿が余りに気の毒というものだろう。普通の依頼では君には不足かな？」
「いえ、そのような事はございません。階級に見合った仕事をするのは望ましい事であると考えます」
「そう答えるだろうと思ったよ。異論がないなら、この仕事はどうかな。死者の大魔法使いが廃墟に出没しているという噂の真偽を確認し存在すれば討伐、だそうだ」
「死者の大魔法使いですか……」
　僅かに目を細めセバスは何とも微妙そうな感情の乗った声で呟いた。この程度だとはセバスは考えていなかったのだろうが、残念ながら階級に見合った仕事とはこの程度なのである。これでもデミウルゴスは白金級が受けられる仕事の中では難易度の高いものを選んだのだ。
「不満かね？」
「いえ、そのような事はございません」
「ではこれにしよう」

セバスの了承が得られたのでデミウルゴスはセバスに笑いかけると掲示板から羊皮紙を剥がし取り受付へと持っていく。この件は組合が依頼主の為前回のように依頼主との顔合わせなどはなく、その場で廃墟の場所などの説明が行われすぐに出発できる準備が整った。

疲労もなく眠らないデミウルゴスとセバスに野営道具など不要の為、前回念の為に用意して使ったシュラフすら持たずに組合を出た足で二人は現地へと向かった。睡眠が必要な人間で二日ほどの道程というから、一日あれば着けるだろう。まずは街道沿いに北西へと進む。

「もし君の希望通り一階級ずつ地道に昇格していったとしたら、こんなつまらない仕事をいくつもこなさなければならなかった訳だが、分かってもらえたかね」

「つまらない仕事というのは些か言い過ぎでは。あの街の人間にとっては死者の大魔法使い（エルダーリッチ）でも大変な脅威でしょう。それを排除する事には意義があると考えますが」

「我々の実力に見合うかどうか、という話をしているのだよ。人間如きどうなろうが私の知ったことではない。白金（プラチナ）だから死者の大魔法使い（エルダーリッチ）討伐の仕事があったが、下の階級の仕事ときたら更にレベルが低いのだよ？　そんな下らない仕事を一つ一つこなしていく事を想像してみたまえ」

「仕事に貴賤はございません」

「私はそうは思わないね。貴賤はともかくとして、適材適所、各々の能力に見合った仕事をするべきだ。至高の御方々がナザリックの者達にそれぞれの能力を最大限活かせる役割を配置したように、とまでは言わないが人間ももう少しばかり頭を使ってほしいものだよ。どんな能力の者でも銅級（カッパー）から始めなければならないという冒険者のシステムは実に効率が悪い、事前に審査を行い能力を査定すれば解決する話だというのに」

「その方法では上位冒険者に慢心を生むことになるのでは？　叩き上げで経験を積めば戦いの恐ろしさも身に沁みるでしょう」

「慢心か、下らないね。それこそが人間の愚かしさの証だよ。自らの

力に傲り必勝の場を用意する事を怠る、実に愚劣極まりない。君は随分と人間贔屓のようだが、あんな蒙昧な種族に肩入れする君の気が知れないね」
「人間と一括りにされますが、人間にも愚かな者もいれば賢い者もいますし、善き者も悪しき者もおります。十把一絡げに論じるのはデミウルゴスらしくもない乱暴な理屈では？」
「君の気にする程度の差など私にとっては気にかけるまでもない小さなものだ。稚拙な知恵の付いた中途半端な智者など愚者よりも読みやすいものだ。極少数の例外は確かにいるかもしれないが、人というものは総じて愚かだね」
「愚かだからといって見下しきるその態度の方が愚かでは？　そのような考えではいずれ足元を掬われないとも限らないと考えますが」
「私が人間に足元を掬われる？　どのような状況になればそんな石に花咲くような事が起こるのだろうね？　私は人間を愚かだと考えてはいるが、それは備えないという意味ではないよ。そんな慢心が私にあると君は考えているのかね？」
「時に人は想定外の力を出す事があるものです、人間を見下している限りその力を読み切る事は出来ないのでは」
　道中の会話は白金（プラチナ）の仕事のつまらなさの話だったのにいつの間にか人間がいかに愚かしいかという事とデミウルゴスが万一足を掬われないかという話になっていた。道中一度デミウルゴスがアベリオン丘陵を探るための悪魔を放つため転移したので中断はしたものの、言い合いは結局目的の廃墟に着くまで双方一歩も退かずに続いた。奥に大きな館のある廃村が見え、ようやく二人は口を閉ざした。後で議論する必要があるというのは共通認識である。
「ふむ……死者の大魔法使（エルダーリッチ）いが支配しているのであれば村にアンデッドが跋扈している可能性もあるが、アンデッド反応を探れる手駒はない。死者の大魔法使（エルダーリッチ）いではなく我々では対抗が難しい相手という可能性もゼロではないですし、一応確認だけはしますか」
　呟いてデミウルゴスは飛行能力があり探知能力にある程度長けた悪魔を特殊技能（スキル）で一体召喚した。

「あの廃村の様子を探り何者かが潜んでいないか探してきなさい。奥の館は念入りに調べるように」
命令に従い悪魔は村へと飛び立っていく。口を開けばどうせ不愉快な言い合いになる事は分かっているので、デミウルゴスもセバスも悪魔の帰還を無言で待った。
帰ってきた悪魔の報告を聞き、ほう、と呟いてデミウルゴスは口元を緩めた。報告が本当ならばこれは白金級（プラチナ）の仕事ではない、また階級を上げるチャンスかもしれない。
「村には何者もいませんが奥の館はアンデッドの巣窟のようだね。動死体（ゾンビ）やら黄光（ワイト）の屍やらの低級アンデッドばかりだそうだが。そして、それらを支配しているのは死者（エル）の大魔法使（ダーリッチ）いで間違いないようだ。但し三体」
「そうですか。それでしたら特に問題はございませんね」
「そうだね、何も問題はない、むしろ好都合だよ」
「では参りましょう」
セバスが歩き出したのでデミウルゴスも後に続いた。村の最奥にある大きな館の前まで辿り着き、無造作にセバスはドアを開けた。玄関ホールは低位アンデッド達が数多く徘徊していた。
「私も一応仕事をするとしましょう。〈火球（ファイアーボール）〉」
大体はセバスに任せるつもりだが全く何もしないというのも悪いだろうと思い初っ端にデミウルゴスは玄関ホールのど真ん中に火球を炸裂させた。轟と炎が燃え上がりそれを合図にセバスが中へと突入する。提出箇所に胴体が指定される事はないため胴体を狙うようセバスには予め言い置いてある。低位アンデッドの胴をセバスは的確に狙い次々その偽りの生命を狩っていった。
一階にいたアンデッドが狩り尽くされた頃、ようやく階段を踊り場まで降り死者（エル）の大魔法使（ダーリッチ）いが姿を見せた。一体しか降りてこなかったがどちらにしろ二階も掃除するつもりなのでその点は問題ない。
魔法を放つ暇も与えられず階段下から一気に跳躍したセバスの飛び蹴りに胴を貫かれ一体目の死者（エル）の大魔法使（ダーリッチ）いは灰と化した。掃除はセバスに任せる事にしてデミウルゴスは組合への提出部位を集め

る仕事に取り掛かった。ナイフも一応用意してはいるものの人間の作る刃物は切れ味が悪い、誰かが見ている時の為の用心で用意したに過ぎない。前回同様片手の指先を断爪に変え指定部位を切り取り集めていく。

じきにセバスが降りてきた。掃除は終わったらしい。ナイフを渡し部位回収を手伝わせる。

「全く面白みのない仕事だ。これではただの単純作業だよ」

「人々をモンスターの脅威から守るという意味と価値がございます」

「その意味と価値には私は全く興味がないね。君の楽しみに付き合ってやるという酔狂もたまには悪くはないだろうが、それもたまにならだ」

「楽しみでやっている訳ではございません、誤解です」

「趣味のようなものだろう？　君の使命はナザリックに尽くす事、ナザリックに属さない人間を助けるなど趣味や酔狂の他にどのような言い方があるというのだね」

「確かにわたくしは至高の御方々とナザリックにこの身を捧げておりますしそれが最も優先されるべきものですが、それに関わりない範囲であれば善良な人々を守る事は十分に意味と価値がございます」

「善き者もいれば悪しき者もいるのだろう？　君の行いは悪人まで守っているように思うのだがね」

「悪しき者でも心を入れ替え善良になる事はできます、あなたの考えは人間の可能性を否定し考慮していないものです」

「人間が良くなろうが悪くなろうが興味がないのだが。私にとっては人間の価値というのはいかに私を楽しませてくれるかその一点のみしかない。人間の可能性などというどうでもいいものに何故考えを向けなければならないのかね？　大半の人間は精々が私の掌で踊って楽しませてくれるしか能がないというのに」

「あなたは人間の価値というものを正しく理解していません、だからそういう偏った見方が――」

部位を回収し終わった後も口論は続き、今回もデミウルゴスのアベリオン丘陵への転移による中断はあったが結局カリンシャに戻るま

で言い争いは続けられた。街が見えたので二人は口を閉ざしたが後で議論の必要があるというのは共通認識である。街に帰り着いたその足で冒険者組合へと報告に向かう。
「調査の結果ですが死者の大魔法使い（エルダーリッチ）はおりましたので討伐して参りました、これが回収部位です」
　デミウルゴスから袋を受け取り受付嬢は部位の確認を始める。低位アンデッドばかりだから大した金にはならないだろうが細かい稼ぎも馬鹿には出来ない、小さな積み重ねも大事である。確認していた受付嬢の顔に疑問の色が浮かび、それが次第に驚愕へと変わっていった。
「あの……死者の大魔法使い（エルダーリッチ）の部位が……三つ、あるんですが」
「はい、三体おりましたので」
「三体、ですか……？」
「はい」
　受付嬢は信じられないものを見るような目でデミウルゴスとセバスを見、確認していた部位に目線を移してそれから再び二人を見た。この反応ならばミスリルへの昇格の話も近日中に来るかもしれないとデミウルゴスは機嫌よく微笑みを受付嬢に向けたのだった。

亜人十傑

亜人の情報と並行して、聖王国内の政情や周辺国家についてなどもデミウルゴスは情報を集めていた。

まず聖王国の政情はそれほど安定しているとは言い難く、火種が燻っている状態である事が知れた。女王カルカ・ベサーレスの政治には大きな瑕疵はないものの然程の成果も上げてはいない。また兄がいるのに聖王国初の女王となった事も主に南方の貴族からは面白く思われていない様子で、その不満は女王の側近であるケラルト・カストディオの策謀によって専ら封じ込まれているらしいというのが真偽の程は知れぬ噂として流れている。今すぐ使える情報ではないが今後聖王国内にナザリックの探索範囲を広げていく際には使えるかもしれないと記憶に留め置く事にする。

周辺国家については人類の生息圏の事しか分からなかった。北のリ・エスティーゼ王国と北東のバハルス帝国が睨み合い、帝国の北東にはカルサナス都市国家連合が存在する。東のスレイン法国の隣には竜王国、リ・エスティーゼ王国の北西には亜人中心だが人間も暮らすアーグランド評議国。それらの外側は亜人の領域の為脆弱な人間は踏み入れない領域のようだった。予想外に狭い範囲の状況しか分からなかったが、冒険者としての地盤が固まり聖王国内を探索し終えたら次はこれらの国々を巡りナザリックを探すべきかと大まかな方針が定まる。

兎にも角にもまずは冒険者としての名声を得る事から始めなくてはならない。アダマンタイト級ともなれば人類の生息圏ならばどこへ行っても通用するだけの顔となれるし、情報を得るのにも有利な事が多いだろう。実際アダマンタイト級冒険者の業績は他国の冒険者のものであってもカリンシャにおいて広く流布し、酒場では噂話が絶えず吟遊詩人が酒場や広場で冒険譚を披露している事もある。白金（プラチナ）にランクが上がったので（食事の酷さに耐え兼ねていたのもあり）宿を変えたが、銅級（カッパー）の時とは宿屋の親父の態度が明らかに違った。食事の酷さは結局（デミウルゴスから見て）大して改善されていないのだ

が、付けているプレートによって相手の態度が明らかに変わるというのは事実である。

名声を得るという意味ではセバスのお節介も悪くはない手なので口うるさく言う事もないかと考え直しデミウルゴスは最近は放置している。実際この短期間で心優しい親切と気遣いの紳士としてカリンシャではセバスはちょっとした有名人になっている。次第に広まり始めた堕落の果実の業績の噂と合わさりセバスの名声は中々のものだ。相手の信頼を得て情報を得やすくなるという意味でも役に立っている。「今日も堕落の果実のセバスさんですかと聞かれたのですがいい加減パーティ名を変更しませんか」と毎日のようにセバスに言われるのは鬱陶しいが、それに対するデミウルゴスの答えは決まっている。既に広まっているパーティ名を変更するのは名声を高めるという目的にはマイナスにしかならない為不可、である。それに反論する材料はセバスにはない。登録の段階で阻止できなかった時点で、いや読み書きをデミウルゴスのみが習得した時点でセバスの敗北は確定していたのだ。

アベリオン丘陵の探索も順調に進んでいる。主に悪魔を放って各部族の位置や強さ、力関係や同盟関係等を情報収集させているが、デミウルゴス自身も転移で赴き各地に転移ポイントを作ってあるので、必要な情報が集まり仕込みが完了すればセバスを連れて目的地にすぐに転移できるようにしてある。セバスとの転移は心から嫌だが目的の為には我慢するしかない。計画が思惑通りに進めばアダマンタイトに相応しいと誰もが認めざるを得ないだけの功績を手に入れられる事は間違いない。聖王国にはアダマンタイト級冒険者はいないそうなので政治的配慮でオリハルコンに留まる事も考えられなくはないがそれでもオリハルコンへの昇格は確実だし、実質アダマンタイトの力がある事は誰にでも分かる事実になるだろう。

仕込みの為に今日もデミウルゴスはアベリオン丘陵に転移し目的の部族を回っていた。集落の付近に転移し最近よく使っているシェイプシフターという悪魔を召喚する。シェイプシフターは普段は悪魔の像（ガーゴイル）に近い姿をしたゲル状のスライムのような見た目をしてい

るが擬態能力があり、好きな姿を取ることができる。誰でもない誰かの姿をとる悪魔である。またゲル状で自在に形を変化させられるので潜入にも向いている。知能はそこまで高くないので高度な自己判断を要するような重要な仕事は任せられないが、情報収集と噂の操作や扇動程度の事はきちんと命令を与えれば問題なくこなしてくれる。

はてさて、亜人共は狙い通りに動いてくれますかね。

命令を与えてシェイプシフターを集落へと送り出してから、顎に手をかけデミウルゴスはしばし黙考する。相手の戦力は今までの情報収集でほぼ把握しきったし全てが狙い通りに進まなくてもそれなりの成果を得られる案ではある。だが中には救いようのない愚者がいてデミウルゴスの読みきれないとんでもない行動に出て計画を破綻させるという可能性もないではない。今の所は計画通りに事は推移しているが気は抜けない。幾通りもの事態を想定した修正案も頭の中には用意済みだが想定外の事は起こると考えておいた方がいい。

その為にも更なる扇動による誘導が必要か、とこれから他の集落で与える予定の命令案に多少の修正を加える。次の集落に向かうべくデミウルゴスは転移し、誰もいなくなった丘を一陣の風が吹き抜けていった。

＊＊＊

堕落の果実のミスリル級への昇級試験の話が持ち上がったのは、死者の大魔法使い（エルダーリッチ）の依頼の後三つほど依頼をこなしてからだった。どれもつまらない依頼で特筆に値しない下らない仕事だった。正直セバス一人いれば十分片付くのだがパーティを組んでいる手前デミウルゴスも出向かない訳にはいかないし、セバスを一人にするのも不安といえば不安なので結局益体もない仕事にデミウルゴスも付き合わされる羽目になった。人助けが好きなセバスにとっては人を脅かすモンスター退治の仕事はやり甲斐があるだろうがデミウルゴスにとっては何ら価値を感じられないので正直苦痛である。

恐らく堕落の果実のスピード出世に対する他の冒険者からの反発を組合側は危惧して仕事をしたという実績を積ませようとしているのだとは思うが、能力のあるものが上に行くのは当然というデミウル

ゴスの価値観からすると依頼をこなした数を重視するその姿勢自体が理解に苦しむ。
だが時間があったお陰で丘陵の方の準備も万端整った、後は導火線に着火するだけだ。タイミングは良いと言っていいだろう。
組合から呼び出しを受けたデミウルゴスとセバスは組合へと足を運んだ。ドアを開け中に入って他の冒険者達から向けられる視線は初回のような困惑と奇異の眼差しではない。羨望、嫉妬、憧憬、様々な物が錯綜している。そんな様々な感情をつまらぬものと意識の端にもかけず涼しい顔をしてデミウルゴスは真っ直ぐにカウンターへと向かった。
「おはようございます、昇格試験についてお話があると伺い参りました」
「堕落の果実のお二人ですね。ミスリル級の資格があると判断され昇級試験を受ける権利が与えられましたが、如何なさいますか？」
「試験の内容を伺ってから判断したいのですが、お教え下さいますでしょうか」
「はい。今回の試験の内容はアベリオン丘陵での亜人討伐です。討伐対象や数の指定は特にございません。お二人は既にミスリル級の実力が十分あると組合側でも考えておりますので、試験という形式ではありますが実質行って帰ってきて頂けるだけで合格出来ると考えて頂いてよろしいです」
受付嬢の言葉に、デミウルゴスは機嫌良さげな笑みをにこりと返した。アベリオン丘陵での亜人討伐をデミウルゴスが試験内容として希望するだろう事を組合側が先読みする事が前提での作戦だったが上手くいった。無論他の内容が指定されたなら丘陵での亜人討伐に変更させる予定だったが。これで大手を振って計画を進められる。
行って帰ってくるだけでいいというのは蛇身人（スネークマン）約二百体のような事をしないでほしいと釘を刺しているのかもしれないが、そんな事はデミウルゴスの知ったことではない。今回はあの時の比ではない戦果が上がる予定である。組合が蜂の巣を突付いたような騒ぎになるのが容易に想像できる。

「その内容でしたら特に問題ございませんね、是非お受けしたいと思います」
「試験の期限は十日、期限内に組合に報告に来て頂けない場合は不合格となります。何かご質問はございますか？」
「いえ、大丈夫です。では早速向かうとしましょう、失礼」
　受付嬢に軽く一礼してデミウルゴスは出入り口へと向かった。セバスもそれに続く。今回も歩きで丘陵へと向かうが、東門に向かう道すがらデミウルゴスは袋を買い込み馬車を借りた。デミウルゴスの今回の計画の説明をまだ受けていないセバスが訝しげな顔をする。
「馬車など邪魔になるだけではないでしょうか、一体何に使うのですか？」
「今回は鹵獲品が大量になる予定なのでね。アイテムボックスで持ち運べばいいのだから本来は不要だが、これも人間に合わせてのことさ」
「……まさか、何か良からぬ事を企んでいるのでは？」
　鋭いセバスの目線がデミウルゴスに向けられる。その視線に応えデミウルゴスは口の端を上げた。
「人聞きの悪い事を言わないでほしいものだね。効率的に名声を高める為の計画を進めていただけだよ」
「特例は二度とないと言われましたが」
「そんなつまらない事は組合長も口が裂けても言えない程の成果を上げる予定だよ。準備は整っているから、後は我々が現地に向かうだけだ」
「非道な事をするのであればわたくしは協力できません」
「正々堂々と君には戦ってもらうから安心したまえ、非道な事を君に強要しようなどとはいくら私でも思っていないよ」
　笑みを崩さぬままデミウルゴスは言い切った。セバスは尚も疑いの眼差しでデミウルゴスを見やるが、ならばいいでしょうとやがて呟き目線を前方に戻した。セバスには非道な真似などさせない。させようとしてもセバスはしないだろう事は自明の理、そんな無駄な労力をかける気はデミウルゴスにはない。そう、セバスは戦うだけで他は

何もしない、そこが重要だ。されても困るし出来ないような状況にもっていくが。
　街を出て街道を進む。今回は馬がいるため歩みの速さは人間のもの程、夜も休憩を取る事になる。街から離れたところでデミウルゴスはようやく今回の計画をセバスにも説明する事にする。
「今回は、亜人の十傑と呼ばれる強者を一箇所に集め一度に倒す予定だ。後は各部族の同盟者からの使者を装った悪魔を送り込むだけで集まる手筈は既に整っている」
「いくら同盟者の使者が来たからといって、そんなに簡単に集まるものなのでしょうか？」
「準備は万端、抜かりはない。各部族には既に噂をばらまいて扇動し不和の種を撒き散らしている。一触即発の状態だよ。同盟者から敵対部族と交戦中で劣勢と知らせが来れば確実に動き出す程度には仕込んである。集まったところに我々が乗り込み、君が一網打尽にするというわけさ」
「十傑というからには亜人の中でも強い者でしょう、どの程度の強さなのか調べはついているのですか？」
「勿論だ。どれもオルランド・カンパーノよりは多少強い程度、という調べはついている。君にとっては誤差の範囲だろう」
　ほう、とセバスは感嘆の声を漏らしてから僅かに目線を伏せた。
「援軍というからには軍勢が来るのでは？」
「雑魚は私に任せたまえ、君は十傑を片付けてくれるだけでいい」
「……どのような方法で処理されるつもりなのか聞いてもよろしいですか」
「支配の呪言を使えば何万だろうが声の届く限りは手を下すまでもなく始末できる。君はあまり好まないやり方かもしれないが、雑魚を一人一人潰すなど蟻の列を一匹ずつ潰すようなものだよ、あまりに非効率だ」
「十傑を倒せば戦意を喪失するかもしれないでしょう、戦いを挑んできたわけでもない者を殺すのはどうかと思いますが」
「いいだろう、では、軍勢が撤退の意思を見せたら私は何もしない。撤

退しない場合は支配の呪言を使う、これでいいね」
「分かりました」
セバスが了承を返してきたので、デミウルゴスは頷き前に向き直る。こんな簡単な答えにも行き着けないのだからセバスにも困ったものだ。こんな馬鹿正直なお人好しだからこそ人間などという愚昧な種族に愚かにも肩入れするのだろうが。デミウルゴスも人間は決して嫌いではないが、それは玩具(おもちゃ)として面白いからだ。自分が人間などと同列の存在であるかのように振る舞うセバスの気が知れない、誇りあるナザリックの一員として恥ずかしくはないのかというのが正直な感想だ。
だが、例えばペストーニャが人間に肩入れしたとしてもデミウルゴスはこうは思わなかっただろう。博愛の精神は彼女の特質であり、それをデミウルゴスは受け入れている。セバスの行動を理解できないのと同様にデミウルゴスの価値観からは外れる行いかもしれなくても、至高の御方にそうあれと定められた特質による行動なのだからそれはそうあるべきだからだ。それはユリ・アルファでも同じ事だ。セバスのお節介だけがデミウルゴスの神経に障り気持ちを苛立たせてくる。こんな妙な執着じみたものを隣のこの男に抱きたくないとは思うものの、どうすればこの敵意にすら似た反感が消えてくれるのかがデミウルゴスの頭脳をもってしても全く分からなかった。何故受け入れられないのか、その原因が全くもって不明だからだ。
そうあれと定められていないこの執着のような強い感情に、デミウルゴスは内心当惑している。ナザリックの同胞であり今現在唯一仲間と呼べる存在である筈のセバスを、ウルベルト様がそうあれと望まれた訳でもない忌々しいという感情を抱いて忌避してしまう事に罪悪感すら覚える。至高の御方に望まれた訳ではない不純物ともいえるこの感情は邪魔だし、美しくない。デミウルゴスという至高の御方の最高の作品の見栄えを損なっている。不要なものなのに捨てようとしても次から次から湧いてくる、きりがない。
セバスと顔を合わせずにいられればこんなにもこの感情と向き合う必要もなかった筈なのだが、何せ今は四六時中一緒だ。嫌でも顔を

突き合わせなければならない。見たくもないものを目の前に突き付けられているような不快感が常にある。いっそ考えずに嫌いなものは嫌いで済ませられれば楽かもしれないが、それはデミウルゴスの強い理性が許さない。どうにか原因を究明して解決したい、そう考えているのは確かだ。だが話をしたところで不愉快な言い合いになるだけで原因に近付く事など出来ないのは目に見えている。原因の究明方法すら皆目浮かばない。

だからデミウルゴスは、隣の男を心底苦手だと感じているし距離を測り兼ねている。埒の明かない言い合いなど元よりしたい訳ではない、どうしてもそうなってしまうだけだ。原因も分からないまま苛立つなどという感情的な心の動きはまるで愚かな人間のようで己に相応しくないと思うものの、それをデミウルゴスは止められない。理性で己を制御できないその事実にまた苛立つという負のスパイラルがセバスに対しては出来上がっていて、抜け出す道はどこにも見当たらなかった。

三日かけてゆっくりと進み大城壁の砦へと到達する。門の衛兵は今日もまた以前デミウルゴスを哀れんできた男だった。

「亜人共の動きが活発になっていて不穏という報告が上がっている、悪い事は言わんから引き返した方がいいと思うぞ」

「ご心配痛み入ります。ですが我々も昇級がかかっておりますので退くという選択肢はございません。もし丘陵に生命散ったとしてもそれが冒険者としての我々の運命だったのでしょう」

引き止められたら面倒臭いので今回も自殺願望をデミウルゴスは装う事にした。衛兵はやはり死に行く者を悼み憐れむような哀惜の情を込めた眼差しを送ってきた。

「そうまで言うならもう止めんが……知らんからな？」

「待てっ！　待ってくれっ！　セバス殿ーっ！」

門を開ける為動こうとした衛兵とセバスを呼び止める大声が響いた。向こうから駆け込んできたオルランド・カンパーノは、走る勢いを殺さずに膝を折りセバスとデミウルゴスの眼前でぴたりと止まり深く頭を下げて土下座した。見事なスライディング土下座である。

「何卒頼みます！　セバス殿、俺を弟子にしてください！」
　頭を上げないままオルランドはセバスにそう懇願した。セバスは明らかに戸惑い困り果てている。
「弟子といっても、わたくしは修行僧（モンク）ですので剣士のあなたに教えて差し上げられることはございませんが……」
「その強さの秘密を！　少しでも掴めればいいんです！　何も教えてくれなくたって構いません、荷物持ちでも何でもいたします、雑用だってこなします！　だからお側に置いて頂けませんか！」
「申し訳ないですがお断りいたします。弟子も雑用係も求めておりませんし、我々には旅の目的がございますので」
「どこまでだって着いていきます！　いいお返事がもらえるまでこの頭は上げません！」
　頭を下げたまま必死さの滲む声でそうがなるオルランドの様子に、セバスは眉根を寄せて目を細めどうしたものかと考えているようだった。デミウルゴスとしてもこんな弱い人間に着いてこられてもメリットが何一つないし足手纏いになって困るだけだから本当ならばセバスに助け舟でも出してやるべきなのだろうが、自分でどうにかしなさいという気分になってしまったので困り果てたセバスを口を出さずに見守っていた。
「……あなたは、話によると聖王国でも九色という強者だとか。軍を辞めては何かと不都合があるのでは？」
「俺は軍士じゃないですから、辞める事自体に問題はありません！」
「そういう事ではなく、自らの仕事を責任を持って果たすべきという事です」
「国にはこれまで十分奉公したと思います！　俺は、自分の強さを求めたい、ずっとそう思ってたんです！」
　ああ言えばこう言う。オルランドの決意は固いようで、生真面目なだけのセバスでは言い包められそうになかった。このまま眺めていてもいいのだがそれも時間の無駄かと思いようやくデミウルゴスは助け船を出す事にした。
「申し訳ないのですが、あなたのような方に着いてこられても邪魔な

だけなのですよ」
「だから強くなりたい、そう思ってるんです！」
「強くなれると、本当にそう思っているんですか？」
　人間如きが、という部分は口に出さずにオルランドにだけ分かるように向けた殺気を一瞬だけデミウルゴスは放った。効果は覿面で、勢い良く頭を上げたオルランドはそのまま後ろにひっくり返り腰を抜かした。これ以上纏わり付くようなら鬱陶しいから本当に殺してもいいとデミウルゴスは本気で思っている。セバスが苦い顔をして見てくるが助けてやったのだから少し位は感謝してほしいものだとデミウルゴスはこれ見よがしなため息をついた。
「先を急ぎますので、失礼」
　優雅に礼をしてデミウルゴスは門を開けるよう衛兵に頼んだ。何が起こったのか分からない衛兵は呆気に取られていたが、デミウルゴスの言葉に仕事を思い出し門を開けた。呆然としたオルランドは座り込んだままでセバスが去るのをもう止めようとはしなかった。止めれば死ぬ、というのがいくら何でも本能で分かってしまったのだろう。
「少しやり方が強引では？」
「ああでもしなければ我々は門の前で今も立ち往生していたと思うが、その方が良かったかい」
「そうではないですが……納得するまで話し合うという方法もあったでしょう」
「君では彼を納得させられなかったと私は思うがね。どうやら彼は君に心酔してしまっていたようだから、どんな手段を使ってでも着いてこようとしたと思うよ。君に心酔など気が知れないが、正気ではなかったのだろうね」
「そのよく回る口を使ってあなたが納得させればよかったのではないですか？」
「何故私がそんな手間を掛けなければならないんだい、君の為に」
「本を正せばあなたが手合わせを受けろと余計な口を出したからこういう結果になったのでしょう」

「あれはこの砦を守る九色の実力を見るという重要な目的があった、必要な事だったのだがね。あそこでオルランドの実力を見られたから丘陵の亜人の程度も知れた」
「ならば少し位はわたくしを助けて下さってもいいのでは？」
「それとこれとは話が別だ。大体にして私が君を助けるなど気持ちが悪くないかい」
「それは……全くもって同感ですが、本当に困っておりましたので」
そう呟くとセバスは憮然とした顔をして黙った。本当に困っていたのだろう。ならば手段はどうあれ助けたデミウルゴスにもう少し感謝を向けてもいいと思うのだが、そういう心持ちにはなれないようだった。（有り得ない話だが）もし逆の立場だったらデミウルゴスもそう思うだろうからその気持ちは分からないでもない。
前回同様大城壁の砦からの監視の目が届かないと確信できるまで一日程度進み、その場で馬車とセバスに待機させてデミウルゴスは目的の集落付近へと次々転移して回り、最後の仕上げである同盟者の使者を装うシェイプシフターを召喚して命令を与え送り出していった。これで準備は完了である。シェイプシフターが十傑を呼び寄せてくる予定の地点まで転移し、上空で待機し集まってくるのを監視する。
さて、亜人の皆さん。あなた方はどの位愉快に私の掌の上で踊って私を楽しませてくれますかね。
これから幕を開けるであろう饗宴を思い、デミウルゴスの頬には嗜虐の喜びに満ちた酷薄な笑みが浮かんだ。

＊＊＊

〝魔爪〟ヴィジャー・ラージャンダラーからの救援要請を受け、ヘクトワイゼス・ア・ラーガラーは兵を率い使者の先導に従って軍を進めていた。最近この丘陵を覆う、決戦が近いという予感を抱かせる不穏な空気はいかにも不自然なもので、ヘクトワイゼスとしては本来ならば今は兵を出さずに静観したいところだったが、ヴィジャーの種族・獣身四足獣（ゾーオスティア）に恭順を誓う半人半獣（オルトロウス）の一族を率いる身としては正当な理由なくして救援要請を断る事は出来ない。それに部族内も戦うべしとの声が不自然な程に強く、それにもヘクトワイゼスは更なる不

審を強めているのだが、ここで兵を出さないという決断をして血気盛んな者共を抑えきれるか、という事情もあった。

何者かが意図してこの空気を操作して作り出しているのではないか、そんな正体のはっきりしない不安がヘクトワイゼスにはあったのだがそれを作り出しているのが誰なのかと問われれば全く分からない。丘陵の亜人に今までそんな事を仕掛けようとする者はいなかったしそういう手段を取ると考えられる者もヘクトワイゼスの知る限りではいない。ならば丘陵の外部の者か、と考えるしかないのだが、人間が外部からやって来て亜人に対し情報操作を仕掛けるなど不可能である。人間など見つかれば餌として生きたまま即喰われる事になるのだし、人間の齎した情報などに左右される者はいない。そもそもアベリオン丘陵を無事に歩ける人間などいる筈がない。急に丘陵の空気を「変えられた」としか思えない不自然さが付き纏うのにその正体は杳として知れない。不気味さだけが強まっていって悪い予感を抑え切れない。この決断は間違いだったのではないか、その不安をヘクトワイゼスは振り払う事が出来ぬままでひたすら駆けていた。

だがこの不安も根拠のないものだ、何も証拠はない。確証が無くては誰も説得する事は出来ない。ヘクトワイゼスの中では今の状況が不自然過ぎるという事は既に確信であるというのに、論拠となるものが状況証拠しかないのだ。

丘を越えると、多くの軍勢が集まっていた。戦っている様子はない。何事か、と問おうとして前方を走っていた筈の使者の姿が消えているのにヘクトワイゼスは気付いた。蛇王（ナーガラージャ）、魔現人（マーギロス）、獣身四足獣（ゾーオスティア）、石喰猿（ストーンイーター）、山羊人等（バフォルグ）々……集まっているのはヘクトワイゼスの推測が正しければ十傑の率いる軍勢だ。引き返したいのは山々だが向こうからも既にこちらの姿は確認されているだろう、今背中を見せては後背から襲い掛かられる危険もある。それならば睨み合いの中に加わり現状を確認した方が賢明か、と考えヘクトワイゼスはそのまま進む事にした。

率いている兵を他の兵と睨み合う形で留めヘクトワイゼスのみが中心へと歩いていく。そこには推測通りに十傑が集結していた。

「……これで、十傑が集結した事になる訳だが、一体これはどういう状況なのだ」
　ロケシュの言葉はヘクトワイゼスの疑問でもあった。敵対関係の者もいれば同盟関係の者もいるし、ヘクトワイゼスの様に他種族に恭順している者もいる。十人全員が揃うなど有り得ない状況である。やはりこの状況は不自然だ、後背を取られる危険を無視してでも逃げた方がいい、そうヘクトワイゼスが考えた時だった。
　十傑が睨み合う円の中に突如として現れた者があった。魔法か？
　と考え一番魔法に長けているであろうナスレネをヘクトワイゼスは見やるが彼女の顔もまた驚愕に歪んでいた。アベリオン丘陵の亜人の中でも屈指の魔法の使い手であるナスレネですら驚愕させる魔法という事なのだろうか、だがそこに現れたのは人間らしき者二人だった。
「ようこそ皆さん、わたくしの招待に応じて頂き感謝いたします」
　人間の魔法詠唱者（マジックキャスター）と思しき風体の男が優雅に礼をして口を開いた。やけに耳当たりのいい、思わず聞き入ってしまいたくなるような声をしている。
「招待とはどういう事だ、人間如きが我等を招待して一体何をしようというのだ」
「皆さんにはこれから、我々の名声を高める為の踏み台になって頂くのですよ。セバス、どうやら十傑の皆さんの装備はマジックアイテムの様子、この世界ではマジックアイテムは貴重品のようですからね、組合に見せれば十傑を倒したという証拠になるでしょう。壊さないよう注意して下さい」
「承知いたしました」
　返事をして一歩前へ進み出たのは白髪の男、やけに鋭い眼光と鋼の剣の切っ先の如き真っ直ぐに鋭く通った姿勢が強く印象を残す。一見すればただの人間だが、違う、とヘクトワイゼスの本能が告げていた。見たことはないが竜（ドラゴン）を前にすればこのような圧を恐らく感じるのではないか、とヘクトワイゼスの脳裏に浮かぶ。最強の種族である竜（ドラゴン）と人間如きを並べる事をおかしいと理性は断じようとするが、本能

は警鐘を鳴らし続けていた。「あれ」に近付いてはいけないし近付かせてもいけない、今すぐ逃げるべきだと。「あれ」だけではない、隣の魔法詠唱者（マジックキャスター）もだ。あの二人には、この場の者を簡単に殺し尽くす力がある、そう獣の本能が告げる。

「ひっ……しっ、死ねぇっ！　〈白銀騎士槍（シルバーランス）〉！」

白髪の男に眼光を向けられたナスレネが魔法を放つ。鋭く男を穿とうとする魔力の槍は――正面から男の拳に砕かれた。

何が起こったのかがヘクトワイゼスにも分からなかった。あの白髪の男は、魔法を、拳で砕いた？　そんな事が可能なのか？　考えている間にもナスレネとの距離をまるでなかったものであるかのように男は瞬時に詰め、その拳がナスレネの胸を抉る。後ろから放たれたハリシャの石を男は振り向きもせずに後ろ回し蹴りで蹴り返し、それがハリシャの頭を砕いた。バザーの武器破壊も肉体を武器とする男の前では何の意味も持たない、ロケシュの竜にも匹敵すると言われる鱗も男の拳の前では無意味だった。瞬きする間に十傑が倒れ伏し、逃げ出す間もなくヘクトワイゼスの眼前に男が現れ、次の瞬間には。

手袋をしただけの素手とは思えぬ鋭さを持った手刀がヘクトワイゼスの首を落としていた。首を失った自分の身体を眺めながら逆さまに頭が落ちていき、やはり引き返すべきだったのだと強い後悔の中でヘクトワイゼスはその生を閉じた。

＊＊＊

十傑とやらもセバスの前では赤子同然、大した抵抗も出来ずに殺し尽くされてしまった。これは事前に集めていた情報の正しさを立証するものであるからデミウルゴスにとっては何ら驚くに当たらない、当然の結果である。

それにしても十人全員集まってくれるとはデミウルゴスも思っていなかった。誰か慎重な者が来ない可能性も考えていたし、その可能性は高いだろうと思っていたのだ。勿論十人全員集まってくれるのが最良の結果であるから喜ばしい事だ、亜人にはそこまで慎重な者がいなかったという事かもしれないし、もしいたとしても来ざるを得ない状況にデミウルゴスが追い込んだというのもある。

十傑は倒されたがそれを見守っていた周囲の軍勢は誰一人動こうとしなかった。当然だろう、信じられないような光景を目の当たりにして指揮官を失い正気を保っていられる方がどうかしている。恐慌状態に陥り秩序を失って逃げ出す展開も考えていたし、それならそれで十傑を倒したという功績だけでもアダマンタイト昇級には十分だろうから構わなかったのだが、動かないというならばセバスの了承を得た通り今度はデミウルゴスが楽しむ番が回ってきたという事だ。

『最後の一人になるまで殺し合いたまえ』

「デミウルゴス！」

セバスの制止は遅い。デミウルゴスのその声は、張り上げた大声ではないというのに丘陵の中の平野部に布陣した兵全てに行き渡った。そして始まるのは酸鼻を極める阿鼻叫喚の地獄絵図だ。何せ殺し合う対象はまず近くの者、つまり同胞である。友を、家族を意に反して攻撃し殺し合う地獄。その悲嘆と絶望に満ちた声はデミウルゴスを恍惚とさせ愉しませるのに十分なものだった。

「何故そのような事を命じるのです！　戦う意思もなかった者達に！」

「言った筈だよ、退かなければ支配の呪言を使う、と。内容については……すまないね、君の道楽に付き合っていたらストレスが溜まってね、ついやってしまったよ。今後気を付けよう」

同胞同士が殺し合う惨憺な声に平野部は包まれている。その声はデミウルゴスにとっては妙なる調べだ。デミウルゴスもたまにはこういう気晴らしをさせてもらえなければ不公平というものである。

「……デミウルゴス、後でじっくりと話し合う必要があります、とにかく今すぐ辞めさせて下さい」

「何故だね？　手間を省くための支配の呪言だよ。話なら後で聞くから今は邪魔しないでくれないか」

「どうしてこのような残忍非道な事をするのです！」

「どうしてと問われれば私が悪魔だからだろうね。それにこの際だ、聞いておきたいのだが、君は同じ質問をシャルティアやニューロニストにもするのかね？」

「……！」
デミウルゴスの質問にセバスは答えずに拳を強く握りしめて俯いた。思った通りと言えばいいのか、セバスの側でも許容できないのはデミウルゴスだけらしい。そして反論がない事から見て恐らくは、デミウルゴス同様その理由はセバスにも分からないのだろう。
デミウルゴスと顔を合わせていたくないのだろう、セバスは十傑の装備品と部位の回収を始めた。デミウルゴスも今はセバスの事を忘れ、今もまだ続く饗宴が奏でる至妙なる旋律にしばし身を浸す事にする。
ボロボロの状態で残った最後の一人はデミウルゴスが止めを刺し、低位悪魔を大量に召喚して亜人の軍勢の死体の部位回収にかかる。特殊技能（スキル）で呼べる限界まで大量に召喚したので大量の部位回収もじきに終わり、デミウルゴスとセバスは無言のまま馬車まで転移して戻り帰路についた。
＊＊＊
冒険者組合に戻るまで結局デミウルゴスはセバスと一言も口をきかなかった。元々好んで話したい相手ではないし今は話す用事もない。組合の前に鹵獲品を載せた馬車を停め出入り口を開け、カウンターまで進む。
「昇級試験のアベリオン丘陵での亜人討伐を行って参りました。十傑を倒してきたのですが、装備品や部位などがかなり数が多いのです。今は馬車に積んでいるのですがどういたしましょう？」
「じゅっ……けつ……十傑、ですか？」
「はい、十傑です」
「あの、十傑の、誰を……」
「全員です」
微笑んで答えたデミウルゴスの前で受付嬢の血の気がどんどん引いていく。ふらついて隣の嬢に支えられた受付嬢は、慌てて立ち上がりふらつきながら階段を登っていく。
降りてきた組合長は、またお前達か、という顔をしていた。
「十傑を全員倒したと聞いたのだが……」

「ええ、そうです」
「証拠は」
「装備品を剥ぎ取ってきました。組合の前に停めた馬車に積んであります」
　組合長の顔色も見る見る青褪めていった。わなわなと震え、しばらく思う様震えてから組合長はやけになったように叫び出した。
「魔術師組合から鑑定魔法が使える魔法詠唱者（マジックキャスター）を呼んでこい！　それから冒険者を総浚いして十傑の装備確認を出来る者を探せ！　大城壁の砦にも使いを出して確認できる者を探せ！　すぐにだ！　今すぐ動け！」
「結果が出るまで時間がかかりそうですね、我々は宿で待機していた方がよろしいでしょうか」
「……そうだな、そうお願いする」
　最早やけくそとしか言い様のない渋い顔をした組合長は、デミウルゴスの問いに力なく答えた。
　堕落の果実がアダマンタイト級に昇進したのは、それから一週間後の事だった。

譲歩

アダマンタイト級冒険者となるという当面の目的は達成したし、カリンシャで得られる情報もほぼ得たと思えた為、デミウルゴスは他の街への移動を考えていた。このままカリンシャに留まっても、十傑を一網打尽にした以上の武功を上げる事は出来ず名声も高まらないだろう。これ以上の名声の事はひとまず後回しにして、聖王国のどこかにナザリックが存在するかどうかを探す段階に来ているとデミウルゴスは考えた。

もしナザリックが聖王国内に存在したとしても用心深いモモンガ様の事だ、そう簡単にデミウルゴスが尻尾を掴めるような迂闊な事をなさっているとはとても思われないが、それでも探さないという選択肢は端からないしだからこそ懸命に探さなければならない。

となれば情報の集まる大きな街に向かった方がいいだろう。もしモモンガ様が外界の情報を得ようとするならばやはり大きな街で諜報にあたるだろうからナザリックの者と接触できる機会が生まれる可能性もあるし、この世界の脆弱な人間や亜人に比してナザリックの者達はかなりの強者であるから何かしらの噂も流れているかもしれない。カリンシャから西にはカリンシャよりも大きいプラートという都市があり、更にその西に首都ホバンスがあるという。まずは聖王国北部の街を巡り、十分に情報を収集して尚ナザリックが発見できなければ南部へ向かうか、と概ねの方針が定まる。

方針を決めたのだからセバスに話をしなくてはならないが、宿にセバスは不在だった。昼はいつも街へ出て何某かのお節介を人間に焼いている。二人とも〈伝言（メッセージ）〉は使えないのだ、待機中に軽々に宿を空けられては不便なのだが、人々に優しい英雄という名声を高めるのには十分に役に立っていることだしデミウルゴスと顔を合わせていたくないのだろうと思えばあまり強く止める気にもなれなかった。顔を合わせていたくないのはデミウルゴスとて同じだからだ。

十傑を討ち帰ってきて以降、セバスとデミウルゴスはまともに話らしい話をしていない。何も言って来ないのは予想外だったが、あの時

最後にした質問がもしかしたらセバスには余程堪えているのかもしれない。
ナザリックの仲間達の中で、どうしてお互いだけを許容できないのか。
セバスも考えていないわけではなかったろう。だがもしデミウルゴスと同じ状況ならば、いくら考えようとも答えの出ない疑問だ。出口のない迷宮のような堂々巡りのその疑問に、そこまで深くセバスが足を踏み入れていたとは考えづらい。それを言葉ではっきり形にされた事で目の前に突き付けられ、デミウルゴスへの対応をどうするか迷っている、といったところか。
亜人の軍勢へのあの命令はデミウルゴスとしてはこの先を見据えてセバスに思い知らせておく必要があると思ったからやった事だがどうにも気詰まりだ。セバスと二人にされて以降気詰まりでなかった事などないのだが。プラートへの旅程は普通の人間の足で十日程かかるそうで、召喚限界時間を考えると影の悪魔（シャドウ・デーモン）を先行させて情報を集めておく事は出来なさそうだった。
面倒だが人間の振りをする上では必要な事の為、デミウルゴスは宿を出て冒険者組合に出向きこれから首都に向かう旨を告げておいた。こうしておけばもしモモンガ様やナザリックの者が噂を聞きつけカリンシャの冒険者組合に問い合わせても消息が分かるだろう。十傑という上位者が消えた亜人達の紛争は統制を失い激化する事も考えられるが、それは対外的な立場としては一介の冒険者に過ぎないデミウルゴスの知ったことではない。後はオルランドでも対処出来るような者しか亜人には残っていないのだから、人間がどうにかすればいい事だ。
宿に戻りしばらくするとセバスも戻ってきた。ドアを開け中に入りデミウルゴスを見ると僅かに眉根を寄せた。見た目は小さいがセバスの感情の動きはすぐ顔に出る。馬鹿正直とも愚かともいえるその性質は、至高の御方に定められたものである筈なのにやはり許容出来ずにデミウルゴスの神経に障る。
「只今戻りました」

「話があるのだが、座ってもらってもいいかね」
「はい」
　デミウルゴスの言葉に従いセバスは椅子に掛けた。デミウルゴスを見据える無表情はそれでも不愉快さが十分に伝わってくるほど滲み出ている。デミウルゴスとてセバスの顔は見ていて愉快ではないが、こうもあからさまに態度に出されるとこちらも不愉快さが増すというものだった。
「当初の目的であるアダマンタイト級への昇進も達成したし、この街で集められる情報も概ね集め切ったと言っていいだろう。故に、そろそろ次の街へ移動しナザリックを探そうと思うのだが。具体的にはまず聖王国北部を巡ってナザリックを探し、見つからなければ南部へ行くつもりだが、何か異論は？」
「ございません。ですが、言っておきたい事はございます」
「ほう、何かね？　言ってみるといい」
　笑顔でデミウルゴスがそう応じると、セバスははっきりと眉根を寄せきつくデミウルゴスを睨み付けてきた。余程不愉快なのだろうがデミウルゴスとてそれは同じ事だ。それどころか、セバスの不愉快さはあの件一回かもしれないがデミウルゴスはセバスから齎される不愉快さに常に苛まれているのだ。
「今後もしまたあのような非道な事をなされるのであれば、あなたと一緒に行動はできません。いえ、例え後でモモンガ様からどんなご不興を買おうとも、あなたを殺してでも止めます」
「ほう、つまり君はこう言いたいのだね？　至高の御方であるウルベルト様にそうあれと望まれて創られた私の悪魔としての性質を許せない、と」
「……それは……しかし！」
「悪いが私はウルベルト様に創られた我が身をこの上なく誇りに思っている、君にとやかく言われたところで自分を枉げる気などないよ。ただ、今は状況が状況だから臨機応変な対応はしているがね。無論、至高の御方にそうあれと望まれ創られた自分を枉げる事を君にも私は望まない。事実、君が自分を枉げずに済むようにとうるさく口出し

もしていないし手段についても出来る限り譲歩して最善のものを選んでいたつもりなのだが、どうだね？」
「……」
　デミウルゴスの言葉にセバスは目線を伏せ黙り込んだ。カルマ値マイナス五百の極悪の属性を持つ悪魔であるデミウルゴスの性質を思えば、相当譲歩している事はどんな馬鹿でも分かるだろう。セバスに対する配慮だけではなく、人間の中で穏便に情報を得る為に必要な事でもあったという理由もあるのだが、人間に手出しをして使い捨てていないのはセバスに対する配慮なのは確かだ。
「君は大きな勘違いをしているようだから知っておいてほしいのだがね、君とやっていく為に本来の性質を枉げるようなかなりの譲歩を私は常にしている。君の側に私に対する譲歩があるとはとても思えないのだが、譲歩をする気が君には元々ないのだろう？　自分が正しいから私が君に合わせるのは当然、そう考える君のそういう所が私は心底気に食わない。己が正しいと信じるのは大いに結構、好きにしてもらって構わないが、独善的なその正しさで自分だけならともかく他者まで規定するのはやめてほしいものだね」
　デミウルゴスの言葉をセバスは目線を伏せたまま黙って聞いていた。言いたいことをデミウルゴスは言ったのでそれ以上何か付け足す事はなく、しばしの間沈黙が流れてやがてセバスが顔を上げた。
「……あなたの言う事は一々もっとも、わたくしの方に気遣いが足りなかったのも事実でしょうからその点は謝ります、申し訳ありませんでした。ですが、それでもあのような所業はやはり許し難いですし二度としないでほしいと考えます。それをお約束して頂けないのであれば、わたくしはあなたとやっていく事は出来ません」
「言ったろう、今後は気を付けるとね。ただ君の方にも私に対する寛容さが少しは欲しいものだが」
「……十分に考慮いたします」
　そう答えたセバスのきつい目付きは譲歩を考えているようにはまるで見えなかったのだが、もしそうでもその時はもう一度思い知らせるまでだとデミウルゴスは考え、この件については一旦終わりにする

ことにした。どんな未知の危険が潜んでいるかも分からないこの世界ではセバスとの決裂による戦力分散は悪手だし、一人になったセバスに万一の事があればモモンガ様も悲しまれるだろう。そういう意味では今回取った手段も決して良い手ではなかったのだが、これ以上一方的に譲歩するのはデミウルゴスの精神衛生上耐え難かった。それにこうでもしなければデミウルゴスがどれだけ普段は自制しているのかをセバスは思い知らなかっただろうという確信がデミウルゴスの中にはある。

「ではこれからの話に移ろう。我々はこれから西へと向かう。途中にあるプラートという街を経由し、首都を目指そうと思う。プラートまでは普通の人間の足で十日ほど、我々ならば一週間もあれば着くだろう。プラートから首都までも同じ位の距離のようだ。冒険者組合には首都へ向かう事は既に報告済みだ。まずはプラートである程度の期間をかけ十分な情報収集を行う予定だが、何か質問は？」

「ございません。出発はいつにいたしますか」

「明日でいいだろう、準備は不要だし、この街でやり残した事も特にはないだろうしね。君が挨拶回りの時間が欲しいというなら明後日に延期しても構わないが」

「いえ、そのような事でナザリックを探すという本来の目的に支障をきたすことはできません。明日、出発いたしましょう」

「よろしい。話も纏まったところで、気は進まないが人間の振りをして夕食を食べるとするかね」

苦笑交じりにそう言うとデミウルゴスは席を立ち部屋を出た。セバスもそれに続く。極めて口に合わない料理をセバスと一緒にという最悪の食事だが、パーティを組んでいるという名目上一緒に食事をしないのはおかしいし、人間の振りとして毎食食べる事も必須だ。これなら歩いている方が余程気楽だ、早く明日が来ないものかとデミウルゴスは深い溜息をついた。

＊＊＊

街道を歩き一週間程をかけ、デミウルゴスとセバスはプラートへと到着した。南部からの大きな街道が通っているこの街は南部からの

商人も多く、賑わいのある大きな街だった。要塞都市であり亜人の脅威に対する防衛の最前線であったカリンシャとはまるで違う雰囲気で、街の規模も面積だけ見ても倍はあるだろう。

検問でもアダマンタイトのプレートを見ただけで衛兵達は敬意を払った。目に見える印がないと相手の力量を把握することすらままならないとは人類とは本当に愚昧だと内心嘆息しながらデミウルゴスはそんな内心などまるで覗かせない穏やかな微笑みを浮かべ軽く礼をして門を潜る。

とりあえず冒険者組合に顔を出す事にしたのだが、まるで歩みが進まなかった。セバスのお節介が次から次へと発揮されるのだ。重い荷物を運ぶ人があれば助け、殴られる人あれば止めに入り、迷子あれば親を探し、仕舞いには杖を突いた足の不自由な年寄りを背負って家まで送り始めた。これではいつまで経っても冒険者組合にすら辿り着けない。セバスのお節介は名声を高めるという意味ではプラスに働くのは十分に分かっている事なのでこのプラートでも好きにさせた方がいいだろうとデミウルゴスは判断したから止めないが、それにしても目的地へ辿り着けないのは困る、故に別行動を提案する事にした。セバスのお節介にデミウルゴスまで別に律儀に付き合ってやる必要はないのだ。

「すまないが君と一緒に歩いていてはいつまで経っても冒険者組合にすら辿り着けない。君は好きにしてくれて構わないから、私一人で行く事にするよ。宿もこちらでとっておく。夕方に中央広場で待ち合わせよう」

「承知いたしました」

にこりともしないでセバスが返事をしたのでこれ見よがしな溜息をデミウルゴスはついて表通りへ向かい歩き出した。セバスの相手は本当に心から疲れる。デミウルゴスにとってはこれ以上ない苦行だ。

冒険者組合は表通りの分かりやすい場所にあり、一人で歩くとすぐに辿り着くことが出来た。セバスと歩いていた時間がどれだけ無駄だったかがよく分かるというものである。中に入ると、依頼の相談や

ら情報交換やら雑談やらで賑やかだったホールはしんと静まり返った。アダマンタイトのプレートを付けた見知らぬ男が一人で入ってきたので何者かという好奇が向けられる視線に込められた感情の大半を占めているだろう。無論そんなものに応えてやる義理はデミウルゴスには一切ないので、真っ直ぐにカウンターへと進む。
「すみません、しばらくの間この街に逗留いたしますので一言ご挨拶を、と思い伺いました。わたくしアダマンタイト級冒険者チーム堕落の果実のデミウルゴスと申します。もし我々に見合う依頼があればご紹介頂けると嬉しいのですが」
「は、はい、あの、今はアダマンタイト級の方にお願いするような依頼がございません、申し訳ありません」
　受付嬢が慌てて頭を下げようとするので、デミウルゴスは本来なら鼻で笑ってやりたいような侮蔑丸出しの内心などまるで窺わせずに穏やかに微笑み軽く首を横に振って受付嬢の動きを制した。
「いえいえ、何かあればお教え頂ければと思ったまでなので、どうかお気になさらず。それから、この街には初めて訪れたばかりで不案内なのですが、どこか適当な宿はございますか？」
「それでしたら、銀の鈴亭がこの街ではアダマンタイトの方には相応しいかと思います。ここから中央広場に進んでいくと途中にあります」
　デミウルゴスの質問に受付嬢は淀みなく答えてくれた。カリンシャの時もそうだったのだが、冒険者組合の受付嬢という仕事は普段扱っている知識や情報のせいか冒険者の事に関してはかなりの事情通で、支配の呪言でも使って情報を引き出せればとつい考えてしまう。しかし（セバスのせいで）使えない手段について考えても詮無い事だし竹頭木屑の冒険者共の情報など得ても役には立たない可能性は高い。それでも集められる情報は出来る限りとにかく集めてから有用性を吟味したいものだが、状況が許してくれないのをデミウルゴスは歯痒く思う。
「そうですか、ではそちらの宿に行ってみましょう、どうもありがとうございます。また伺います」

軽く一礼して踵を返しデミウルゴスは冒険者組合を出た。教えられた通りに中央広場方向へ歩くと、銀の鈴亭と書かれた宿の看板がやがて見えてきた。人間の宿としては外観も立派な方なので恐らくこの街では最高級の宿なのだろう。人間にとってどれだけ高級であろうともナザリックの艶麗繊巧たる有様には遠く及ばないのだが。

宿で二人部屋をとり、部屋で影の悪魔（シャドウ・デーモン）を召喚して情報収集に送り出す。（特にナザリックの）噂を探る者と情報屋を探す者に分かれ影の悪魔（シャドウ・デーモン）達は命令に従い街に散っていった。

この二人部屋も人間にとっては高級なのだろうが、デミウルゴスにとっては日雇い労働者向けの粗末な宿と大差はない。ナザリック第七階層の赤熱神殿が恋しい。あそここそがウルベルト様が丹精込めて作り上げて下さったデミウルゴスの居るべき場所だ、一刻も早く帰り着きたい。だが焦りは思わぬ失態を招く元だ、そんな下らないものに支配されないように厳しく己を律していかなければならない。やはり歯痒さが強く滲んでデミウルゴスはまた溜息をついた。

亜人十傑を全て討ち果たしたというだけでも堕落の果実の業績が他国に喧伝されるには十分だろうが、後もうひと押し目玉になるような業績が欲しいというのが正直なところだ。そしてこの名声を高めてナザリックに届くのを期待するという手段の問題点は時間がかかる事だ。交通手段は徒歩か馬、転移は〈次元の移動（ディメンジョナル・ムーブ）〉程度しか精々まともに使えない術者しかいないときている。噂が広まるのには今しばらくの時間がかかりそうだった。事実堕落の果実のアダマンタイト級昇格の話はまだプラートには広まっていないらしいのが冒険者組合での人々の反応からも分かった。

あともう一手、となれば悪魔騒ぎを起こして解決してしまうのがやはり一番手っ取り早いのだが、セバスの強い反対があるだろう。どうにかセバスの譲歩を引き出す方法があればいいのだが、今の所は見つかりそうもない。機会を伺うとしてとりあえずは保留か、とデミウルゴスは案を頭の隅に追いやった。

その内に陽が翳ってきたのが宿の窓から確認できたので宿を出て中央広場へとデミウルゴスは移動する。セバスは目立つのでナザ

リックのシモベしか持たない気配を辿るまでもなくいればすぐに分かるのだがまだ来ていないようだった。セバスの方からもデミウルゴスはすぐに確認出来る筈なので適当な場所で待つ事にする。

それにしてもこの人の街の猥雑な在り様がデミウルゴスの目には酷く醜く映る。破壊と混乱と殺戮を齎して地獄と化せればどれだけ愉しいだろう、使える手駒がもっとあったなら本当にそうしてもいいのだが、そんな他愛もない空想を浮かべながら足早に過ぎゆく人々を眺める。この何の価値もないつまらない人間共も怨嗟と悲嘆の叫びでデミウルゴスを愉しませてくれるならば少しは価値が生まれるというものだ。蟻のように踏み潰すなど勿体ない事だ、蟻ならば瓶に閉じ込めてしまって出られないのも知らずに必死に惑いよじ登ろうとしてやがて弱って死んでいく様を眺める方が余程愉しい。

亜人を手駒にしてアベリオン丘陵を足掛かりに聖王国を呑み込んで勢力を拡大するという方策も考えなかった訳ではないのだが、どう考えてもセバスが反対するためその案は破棄せざるを得なかった。よくよくセバスの意向に足を引っ張られていると我ながら思うものの、無視する訳にもいかないので自分でも言った通りにデミウルゴスは相当譲歩している。心底嫌いな男にこんなにも気を遣わなければならない現状がほとほと嫌になるのだが打開策は今の所まだ見つからない為、この状況はこれからも続いていきそうだった。

夕闇が濃くなる頃、ようやくセバスが姿を現した。結構な時間をデミウルゴスは待たされたのだがその理由が下らない人間へのお節介かと思うと嫌味の一つも言いたくなるというものである。だが言ったところでセバスには暖簾に腕押しなのは分かり切っているし、こんなどうでもいい事でまた押し問答にでもなったら面倒だ。故にデミウルゴスは行こうとだけ手短に口にして宿へと戻る事にした。

宿に戻って夕食を済ませ、情報収集から戻ってきた影の悪魔（シャドウ・デーモン）達の報告を聞いた後は朝までする事のない時間になる。最高級の宿とはいっても食事の味はやはり酷いものだし、それにこの世界に来てからというもののする事のないこの時間が来るのがデミウルゴスは嫌だった。現状で選べる方策が人間からの情報収集と人間の間での名

声を高めるという方法の為否応なく人間に合わせた活動時間で動かなければならなくなる。この無駄な時間も本来ならばナザリックの為に働いていた時間だというのに、と思うと口惜しくなるが考えても仕方ない事だろう。
「聞きたい事があるのですが」
　珍しくセバスの方から口を開いた。デミウルゴスはセバスを見やるが、特段の表情は浮かんでいない、いつもの仏頂面だ。
「何だね？」
「あなたは私に対して譲歩しているといいましたが、もし譲歩していなかったとしたらどのような方法でナザリックを探すつもりだったのか聞いてもよろしいでしょうか」
「そんな事を聞いてどうするのだね？　君にとっては不愉快極まりない話になるだろうし、そんな仮定に過ぎない下らない話で君と押し問答したくもないのだが」
「わたくしの方もあなたに気を遣い譲歩する必要があるのだという事は分かりましたが、どのように何を譲歩すればいいのかが分かりませんので、それを探る手掛かりになればと思っての質問です」
「ふむ、いいだろう。まず情報を集めるという基本姿勢は変わらないが、手段は変わるだろうね。支配の呪言を使って知っている事を全て吐き出させてから消す、という方法になるだろう」
　ぴくり、とセバスの頬が強張った。だからやめておけと言ったのに言わない事ではない、とは思ったが本人が希望した事なので構わずにデミウルゴスは続けることにした。
「そして名声、これも必ずしも冒険者としての名声に拘る必要はない。例えばアベリオン丘陵の亜人を倒すのではなく支配下に置いて手駒を増やし聖王国を併呑して国として動く、という方法もあった。この場合国として動く事での情報収集力の大きさにも見るべき点はあるだろう。ただこれはまだ見ぬ強者に目を付けられる危険もあるから他国の情報も集め十分に検討してから取り掛かる必要があったろうがね。その危険も亜人を表に立てて我々は影からの支配に徹する、という形にすれば差し当たっては回避できないではないし亜人を贄に

して強者の力を見る事も出来たろうが……まあ今更言っても詮無い案だ。それに冒険者としての名声を高めるにしてももっと方法はある、例えば亜人に聖王国を支配させてから街を解放していって亜人を打ち倒し……」
「分かりました、もう結構です」
　これ以上出来ないという程にセバスは渋い顔をしてデミウルゴスが言葉を続けるのを制止した。だからやめておけと言ったのに、と再びデミウルゴスは思ったしこれでセバスが譲歩をする気になるかというとならないだろうという気がした。聞くだけ無駄な話を聞いてセバスは何をしようというのだろう、気が知れない。馬鹿正直というか生真面目だから話し合って妥協点を探ろうという結論に至ったのかもしれないが、話し合って妥協できるような間柄ならばデミウルゴスはセバスに対してこんなにもストレスを溜めずに済んでいる。考えが甘いとしか言いようがない。
「何故あなたは周囲に与える被害を度外視するのか理解に苦しみます」
「こちらこそ聞きたいのだが、何故そんな事を気にかけなければならないんだね？　最も有効でリターンの大きい方法を最も最小の手間で、これが理想的だと思うのだが」
「それでは敵を作りすぎてしまうでしょう」
「その点は勿論考慮する。要は我々がやっていると分からなければいいのだよ、簡単な話だ」
「我々、という言い方はやめて頂けませんか、わたくしを巻き込まないで下さい。それに周囲への被害を考えてほしいという事を申し上げているのです」
「私に対する君の配慮の話だったと思っていたのだが、いつの間に論点がずれたんだね」
「そのつもりでしたがあなたのやり方にはついていけそうもありません、人々に大きな被害を出すような事を臆面もなく平気で仰る。あなたに合わせるという事は人々が悲しむという事です、許容できかねます」

「被害被害と言うが、人間共の悲嘆と怨嗟は私にとっては愉快この上ない。今話した案は全て破棄したものだからどれも実行する気はないが、私だって楽しみは欲しい、人間共の悲鳴も多少は聞かせてくれると嬉しいのだがね。譲歩というのはその程度でいいのだよ」
「……罪もない善良な人々を傷付ける、という事は承服できかねます」
「例えば君は今日酔っぱらいに殴られていた人を助けただろう。あの殴っていた方を好きにさせてくれるとかその程度の小さなもので構わないよ」
「あなたに預けてはどのような目に合うか分かりません、酔っ払って人を殴った程度でそれ程の地獄を見なければならないような悪事をしたとは到底思えませんので出来かねます」
「残念ながら拷問（トー）の悪魔（チャー）のような治癒魔法を使える者もいないしその手段もない、無限に苦しめる事は無理だからそんなに苦しまない内に出血で死ぬ事になると思うから心配は不要だと思うがね」
「そういう事を言っているのではありません、要らざる苦しみを与えてそれを楽しむような非道に加担しろとわたくしに仰るのですか」
「君にとって人助けが喜びであるように、私にとっては非道が喜びなのだが、どうも君はやはり譲歩という言葉の意味を分かっていないようだ」
「言葉の意味は十分存じ上げております、ただその点は許容できない、と申し上げているのです」
「とことん狭量なのだね君は、寛容さというものをどこかに置き忘れて来てしまったのかね。自分が正しいと信じて疑わない者はこれだから救い難い、少しでも己の正義から外れるとすぐこれだ」
「正しくない事を正しくないと言う事が間違っているとは思いませんね。譲歩はいたします、ですが人に被害を出すような事は許せない、そう申し上げているだけです。何一つ譲らないなどと言っているつもりはございません」
「私が譲ってほしいのはまさにその点なのだが、少しの犠牲にも目を瞑る事が出来ないのだから狭量としか言いようがないだろう。何も何万と殺そうと言っているわけではないのだよ？　私としてはこの

国全体を地獄に変えられれば至福だが、最大限譲歩して少々回してくれればいい、と言っているんだ。それすらも許せないというなら君は一体何を譲るというのかね」
「人に被害を出さないような形で考えて頂きたいものです、ナザリック一の知恵者なのですからその程度容易でしょう」
「君が何を譲歩するかは君自身が考えるべき事なのだから私に考えさせるのは筋違いではないかと思うのだがその点はどう考えているのかね。大体にして私の智は本来ナザリックの為に使うべきもの、そんな事に浪費する為に与えられた訳ではない」
「二人揃ってナザリックに帰還する為の方策なのですからナザリックの為に智を用いているといえるのでは？　あなた程の知恵者であれば人に被害を出さずに済ますよう考える事など容易な筈、大体にして――」
　結局その夜は朝まで互いに一歩も譲らず無為な押し問答が続き、無駄な時間が潰れていったのだった。いつものように手持ち無沙汰な時間も困りものだが、終着点の見えない無意味な言い合いも困りものだとデミウルゴスは精神的な疲労を覚えながら思った。

困惑と寄り道

プラートの冒険者組合から堕落の果実に呼び出しがかかったのはデミウルゴス達がプラートに来て五日目の事だった。

情報収集は順調に進み、複数の情報屋とも既に接触しているが、ナザリックの存在を感じさせるような情報は残念ながらまだない。例の如くセバスにもお節介のついでに情報収取させているがこちらもナザリックに関しては成果なしだ。

聖王国内の情勢等の情報は九色の構成、聖王国軍の構成と戦力、主要な貴族の力関係等々多岐に渡って集まっている。冒険者には不要な情報といえばそうだが、集められる情報はまずは集めてから有用かどうかを判断したいデミウルゴスは集められる限りの情報を集めていた。アダマンタイトのプレートを見るだけで支払いを心配しなくて済むと情報屋の口は軽くなったので大いに役に立っている。神官団の長、ケラルト・カストディオは公式には第四位階の信仰系魔法詠唱者（マジックキャスター）ということになっているが実は第五位階を使えるらしいという不確実な噂も得られたがこれこそ使い所のない情報だろう。第五位階信仰系魔法〈死者復活（レイズデッド）〉によって有用な戦力や要人を蘇生可能かもしれないケラルトはもしこの国を攻め滅ぼすならば真っ先に潰すべき存在だが、今の所デミウルゴスの目的はこの国を滅ぼす事ではない。

デミウルゴスにとっては、ケラルトの姉である聖騎士団団長、レメディオス・カストディオの持つ聖剣サファルリシアの話こそ最も警戒すべきものだった。具体的な事については今ひとつはっきりしなかったのだが何でも滅多に出さない大技があり、邪悪なる者に対して大いなる力を揮うのだという。冒険者として活動している限りは聖騎士団と敵対する事はないと思われるが、警戒の度合いを強めるべきかと考える。何があるかは分からないのだし（そんなへまをするつもりは毛頭ないが）万一正体が露見すれば悪魔であるデミウルゴスは確実に聖騎士の敵だろう。

九色の中にはオルランドが勝てないと言われる相手がいる事も分

かった。先述のレメディオス・カストディオ、オルランドと共に大城壁中央砦の防衛に当たっているパベル・バラハ、海兵隊副隊長エンリケ・ベルスエ、人魚（マーマン）であるラン・ツー・アン・リン。これらの者達は機会があれば実際に実力を見極めておくべきと思われた。カリンシャにいる内にパベル・バラハを実際に見られなかったのは残念だが、彼はどうやら夜間の警戒担当らしく人間に合わせて昼間活動しているデミウルゴス達では出会えないのは道理だったから仕方のない事だろう。オルランドと共にあの砦を守っているという事は、オルランドや十傑との力の差はデミウルゴスやセバスから見れば誤差の範囲内に収まっているだろうという予測も大体立つ。もしオルランドと圧倒的な力の差があるならば十傑を討ち果たし亜人の脅威をアベリオン丘陵から払い平定していてもおかしくはない。

情報収集をしている間にようやくプラートにも堕落の果実が亜人十傑を討ち滅ぼしアダマンタイト級へと昇格した話が広まり大きな話題となり、ただでさえ目立つ行動をしているセバスは否が応にも注目の的となっている。これならば早晩首都にも他国にも堕落の果実の評判は広まるだろう。

呼び出しを受けた時セバスは例の如く街に出ていて宿にいなかった。デミウルゴス一人で話を聞いてもいいのだが後からセバスに文句を言われるのも面倒なのでセバスが戻ってから冒険者組合まで出向く旨を使いの者に伝える。セバスはどこで何をしているものやら、大好きなお節介やら人助けに没頭できて実に気楽で羨ましいものだとデミウルゴスは深く息をついた。

＊＊＊

セバス・チャンは困惑していた。この困惑はこの所ずっと抱き続けて解決できずにいるものだ。これまでなら晴れ晴れしい気持ちを抱けていた親切や人助けにも後ろめたさを少しばかりどこか感じてしまうし、それがまた己の中の戸惑いを強めていく。

デミウルゴスが破壊と殺戮に走り暴虐を働かないかというのは当初からのセバスの懸案事項だったが、それを自制している理由がまさか自分とやっていく為と言われるとは思っていなかった。セバスは

デミウルゴスが嫌いだしデミウルゴスも同様にセバスが嫌いだろう、そんな相手がそんなにも自分に気を遣っているというのは今置かれている事態の深刻さを思わせて、同時に深刻であるという自覚が自分にはまだまだ足りなかったのだという事も知らせてくる。

デミウルゴスの指摘の通りにセバスは自分がデミウルゴスに合わせるなどという事は欠片も考えていなかった。その点は素直に反省したし、悪い事をしたと思った。だから自分も（例え相手がデミウルゴスであっても）上手くやっていく為に少しは気を遣わなければならないだろうし出来る限りの譲歩もしなければならないだろうと思ったのだが、デミウルゴスの言い出す事はセバスには到底受け入れ難く、まるでセバスが受け入れられない事をわざと選んで言っているのではないかと思わされる程だった。デミウルゴスのあのセバスに対する底意地の悪さを考えれば有り得ない話ではない。

だが、面白くはないがデミウルゴスの言う通りであるのは認めなければならない。今為すべきは二人揃って無事にナザリックに帰還する事であり、その為には譲れるところは譲るべきだ。もしシャルティアが「あの酔っ払いの方、少うし遊びたいでありんすからわっちにくれなんし」とでも言ったならば内心眉を顰めながらもセバスは酔っ払いを引き渡しただろう。遊ぶ相手を選んだ事にむしろ感心すら覚えるかもしれない。シャルティアの残虐さや残忍さ、嗜虐性は至高の御方によってそうあれと定められたものであるからセバスもそれを肯定している。それがデミウルゴス相手だと、どういう訳だかセバスは一歩も引けないような意地っ張りな心持ちになってしまい何も譲歩出来なくなる。デミウルゴスの嗜虐性とて至高の御方にそうあれと定められたものであるのは何も変わりがないというのに。それが何故なのかがセバスには全く分からない。分からないままにデミウルゴスに対して反発しているし、その感情の動きはセバスにとってごく自然に感じられるものだった。

同様のものをデミウルゴスもセバスに対して抱いているとセバスは思っていた。それなのにナザリックに帰還するという目的の為にデミウルゴスは己を抑え最大限の譲歩をしている。言われた通りデ

ミウルゴスの本来の性質を考えればその譲歩がどれ程のものかはデミウルゴスに対してセバスがいくら意固地でもはっきりと分かる。だがそれでも、酔っ払って人を殴った程度の事で生きたまま腹を割かれ腸を引きずり出されて切り刻まれたり全身の生皮を剥がれたりして痛み藻掻く様を愉しまれるような目に合うのを許容しろと言われても出来なかった。多分気絶しないような力加減で相手が苦しむのを出来得る限り愉しむだろう。それ位はデミウルゴスなら平気でやるだろうし、それ以上のセバスでは考えも付かないような残忍な事だって恐らくはする。そういう点ではシャルティアの方がまだ幾分かは趣味は悪くない。

相手にだけ大きく譲歩させている今の状況は正しくはない、自分の側も譲歩も許容もすべきだと分かっている。だが何をどこまでどう譲歩すればいいのかそれを自分が許容出来るのか、妥協点が全く分からないというのがセバスを強く困惑させていた。どうして他の者には許せる事をデミウルゴスに対してだけはこんなにも心が狭くなってしまうのか、それすら分からないままにセバスの思考は出口を見失っていた。今は状況が状況なのだし同じナザリックの者としてもっと仲良くとは言わずともせめて協力すべきだ、頭ではそれを理解しているのに心の奥底深くの正体の知れぬ部分がそれを許さない。

考え事をしながら歩いていたらいつの間にやら街の反対側の門まで歩いて来てしまっていた。元々気の向くまま宛てもなく歩いていたのだが、さすがに宿から離れすぎてしまった。そろそろ戻らなくては夜になってしまうと思いセバスは踵を返し来た道を逆に戻り始めた。セバスが宿に居着かない理由は人助けや親切をしたいからではない、デミウルゴスと同じ空間に居たくないからだ。宿には居たくないが行く場所もないので適当に外を歩いていたら様々手助けが必要な人が見当たるので手を貸しているだけで、別に親切をしようと探している訳でも名声を高める目的でやっている訳でもないのだが、名声を高めるのには効果的だからとデミウルゴスが黙認するようになってくれたのは助かっている。ましてや今は答えの見えない問いに悩まされているので、それを気詰まりでない外で歩きながら考えてもい

いというのは非常に助かる。
ふと前を見ると、乳飲み子を背中に背負い二人の幼子を連れた母親が重そうな籠を両手に持って歩いていた。あれでは一人で子供の面倒を見ながら荷物を運ぶのは大変だろう、手助けが必要だろうと思いセバスは早足に母子へと歩いていった。幸いアダマンタイトのプレートのお陰で不審者と思われる事もなくなりこんな偉い方にとかえって恐縮される事が多くなった。
声を掛けると冒険者プレートを見た母親に「堕落の果実の……」と言われたのは正直な話本当に勘弁して欲しいしパーティ名を勝手に決めたデミウルゴスに対して未だに腹が立つのだが、今更変更しては名声を広めるのにはマイナスにしか働かないと言われてしまえば反論できない。あの男は多分それすら計算ずくで最初から仕組んでいたのだ、そういう男だしあの男のそういう小狡い所が本当にセバスは嫌いだ。その狡智がナザリックの為に揮われるのであれば何も文句はないが、このパーティ名はセバスへの単なる嫌がらせとしか思えなかった。あの男なら冒険者のパーティ名としてもっと相応しいものなどいくらでも考え付くだろうにわざわざセバスが嫌がるようなものしか提案してこないのだ。これに関しては自分からこれといった案を出せないセバス自身にも非があるのでそう強くは言えないが、それでも面白くはない。
母子の家はそう遠くないというので帰り道のついでとばかりに両手の荷物を引き受け、子供達にマントの裾に纏わり付かれながら情報収集を兼ねた母親との世間話でセバスはデミウルゴスの不愉快な顔を忘れる事にした。
＊＊＊
セバスが宿に戻ってきたのは夕闇が辺りを覆い始めてからだった。ようやく戻ってきたセバスの顔を見て少しばかり唇を歪めデミウルゴスは深く息をついてみせた。
「只今戻りました」
「帰ってきたばかりのところ悪いが、冒険者組合から呼び出しがかかっている。頼みたい依頼があるそうだ。君が戻ってきてからと

思って詳細はまだ聞いていない、話を聞きにすぐに行こうと思うのだが問題は？」
「問題ございません、お待たせして申し訳ございませんでした」
「ああ、本当に待ったね。ナザリックの為に働けない時間は総じて無駄だが、今君を待っていた時間はその中でも取り分け無駄だったよ」
「あまり先方をお待たせしても良くないでしょうから、早速参りましょう」
　デミウルゴスの愚痴を聞いていたセバスは特段の感情を見せず背中を向け部屋を出た。先方を待たせているのはセバスの帰りが遅かったからだしセバスが待たせていたのは冒険者組合だけではなくデミウルゴスも同様だったというのに馬の耳に念仏とはこの事だと苦り切った顔を隠しもしないでデミウルゴスも後に続き冒険者組合へと向かう。
　冒険者組合で名乗るとすぐに応接室へと通された。少し待つと男が一人入ってきた。
「堕落の果実のお二人だね、よく来てくれた。私はダニール・モニア、このプラートの冒険者組合の組合長をしている」
「丁寧なご挨拶痛み入ります。デミウルゴスと申します」
「セバス・チャンと申します」
「とりあえず座ってくれ、今かなり厄介な件を抱えていてね、君達がこの街に来てくれたのは本当に幸運だった」
　組合長の言葉に従いデミウルゴスとセバスはソファに腰掛ける。組合長も向かいに座り口を開く。
「早速君達に頼みたい依頼の話なのだが、依頼者は冒険者組合、我々だ。この街から北に五日程歩いた所にテメルという街があり、そこから東に海沿いに山脈が続いている。この山脈へモンスター討伐や鉱夫の護衛、薬草採取等に出向く依頼も時折あるのだが、薬草採取に向かった金（ゴールド）級パーティが消息を断ったのが十五日程前。それを捜索する為にミスリル級パーティを送ったのだがこちらも現在音信不通だ。捜索隊のミスリル級パーティには万一の際の連絡手段として伝言の羊皮紙（スクロール・オブ・レポート）を渡しているし〈伝言（メッセージ）〉を使える魔法詠唱者（マジックキャスター）もいるのだ

が一切の連絡がない。君達にはこの二パーティの捜索と原因の究明を頼みたいのだが、引き受けて貰えるだろうか」
「……捜索、という事であれば修行僧(モンク)と魔法詠唱者(マジックキャスター)の構成の我々では不向きではないでしょうか？　野伏(レンジャー)がいるパーティの方が適しているように思うのですが」
「ですが放ってはおけないでしょう、冒険者達の安否が気掛かりです。捜索もあなたの召喚魔法で何とでもなるのでは？」
　はっきり言ってまるで旨味のない依頼だと思い断る方向でデミウルゴスは話し始めたのだが、それをセバスが遮る。大好きな人助けの範疇の依頼だからお節介癖を出してやりたがるだろうと予測はできたが案の定だ。遠回りも損も承知の上で（デミウルゴスはしたくもない）人助けをして名声を高める方向で行くしかないかと心の中だけで盛大な溜息をデミウルゴスはついた。まるでマイナスという訳でもない、二パーティを救う事が出来れば堕落の果実の英雄としての名声はますます確固たるものになるだろう。二パーティがまだ生きていれば、の話だが。時間も大分経っている、デミウルゴスとしては装備が回収できれば御の字ではないかと思っている。
　ナザリックの情報が未だ掴めない以上プラートはただの通過点に過ぎず近い内に首都に向かう事になるのだろうから、この地の冒険者組合に恩を売ったところで大して意味はない。そして生存者の見込みがないのだから名声を得るという目的に使える依頼でもない。正直なところデミウルゴスはそんな依頼に使う時間があるなら徹底的な情報収集に充てたい。だがこの人助け大好きのお人好しが受けたい空気を出してしまえば人類の守護者という名目のアダマンタイト級冒険者としては受けざるを得なくなる。迷惑この上ない。
「確かに通常であれば野伏(レンジャー)や盗賊がいるパーティに頼む内容なのだが、何せミスリル級パーティまで行方不明とあっては生半な戦力を送ってもかえって損失が増すだけ、そこで君達に頼みたいのだ。希望であれば野伏(レンジャー)が在籍しているミスリル級のパーティを随伴させよう」
　足手纏い、と言ってしまえればいっそ楽なのだが。そんな内心は窺

わせず至極冷静な表情と声のままデミウルゴスは口を開いた。
「いえ、その必要はありません。我々だけで何とかいたしましょう。ただ我々は二人とも〈伝言(メッセージ)〉が使えませんので定時連絡用に巻物(スクロール)を必要数支給して頂けると助かります。現地に到着したら定期的に連絡を入れさせて頂きます」
「分かった、用意しよう。準備にはどれ程かかるだろうか？」
「最初に金(ゴールド)級冒険者が薬草採取に向かった地点が分かる地図と〈伝言(メッセージ)〉の巻物(スクロール)さえご用意頂ければ、こちらの準備は出来ておりますので明日にでも発てます。金(ゴールド)級冒険者達が行方知れずとなってから大分経っておりますから、そうのんびりもしていられないでしょうしね」
「分かった、大至急用意させよう。明日の朝取りに来てくれるだろうか」
「了解いたしました」
　話が纏まり明日の朝出発となる。行方不明になってからの期間を考えても冒険者達がまだ生きているとは考えづらい、骨折り損のくたびれ儲けになる予感しかしない依頼ではあるがそれを理解してくれないセバスがいる以上は断りづらい。こちらに何の利益もないので断りたいなどという言い方は名声を高めようとしている以上出来ないのだから婉曲に断るしかないというのに、空気を読まないセバスがいる。忌々しい事この上ない。
　さすがに腹に据えかねて宿の部屋に戻るなりデミウルゴスは常の優雅さに似合わずどかりと背凭れに深く背中を預けて椅子に掛け長い溜息をついた。
「全く君ときたら、こんな何の得もない依頼をどうして受けたがるのかね。これだけ時間が経っているのだ、木っ端冒険者共など全滅しているに決まっているだろう」
「まだ探してもいない内から全滅と言い切る事は出来ないかと思いますが、知恵者らしからぬ乱暴な言い様ではないですか？」
「消息を断ってから半月も経過しているんだ、脆弱な人間がまだ生きているなどと楽観的に考えられる方がどうかしていると思うがね。

助けられる者がいない以上名声も上がらない、我々に何ら利益を齎さない依頼だ」
「どのような依頼にも全力であたる事によって信頼と実績が培われていくのではないですか？　あなたは目先の利益の話しかしていないように思います」
「信頼と実績はそれなりのリターンのある依頼で培えばいいのだよ、こんな移動時間ばかりかかって実のない依頼を受けたがるとはお人好しにも限度というものがあるだろう。ゴミ屑のような下級冒険者でも君よりは仕事を選ぶのではないかな」
「最上級の冒険者なのですから他の冒険者では出来ない依頼を果たす社会的な責任と義務というものが我々には発生いたします。今回の依頼はまさにそのような依頼でしょうし受ける事は義務とも言えるのではないかと考えます」
「それは人間共の理屈だろう。我々には人類の守護者たるべきよりも優先すべき事があるのではないかね？」
「冒険者達を救い名声を高める事はナザリックを探す上でもマイナスにはならないかと存じますが」
「マイナスにはならないのはあくまでも助けられればの話だ。君の憶測は希望的観測に基づいたもので何も根拠がない」
「全滅しているというあなたの仰りようにも根拠はないのではないでしょうか」
「劣弱な人間が半月も飲まず食わずでいたらどうなると思う？　死んでいると考える方が自然だと思うが」
「まだ生きている者もいるかもしれません探し出してみない事には分からないでしょう。全ての希望を捨ててしまう程絶望的な状況とも思えませんし、そもそも――」
　その調子で決着点の見えない言い合いは出発時刻になる朝まで続いた。お互いに深い溜息をついてデミウルゴスとセバスは冒険者組合に向かい地図と巻物（スクロール）を受け取りその足でテメルへと向かうべく北に進路をとった。
　三日程歩き続けてテメルへと到着する。二人とも休息は必要とし

ないのでそのまま山へ向かおうとしたが、途中でセバスが立ち止まった。
「馬車を借りていった方が良いかと考えます」
「これから山道だ、馬に合わせる必要も出てくるし邪魔になるのではないかな？」
「冒険者を救い出した時に運ぶ手段がないのでは困ります」
「また君の希望的観測か。無駄になるとは思うが、まあいいだろう。死体なり回収した装備を運ぶにも足が必要だろうしね」
　呆れたように息をつきつつもデミウルゴスの方が折れ馬車を一台借り、細い山道へと進んでいく。金（ゴールド）級冒険者達が薬草を採取しに行ったと思しき地点の近くまで道を進んでそこで馬車を木に繋いでおき、デミウルゴスが斥候の悪魔を召喚して冒険者達（の死体）を探すよう命令して放つ。
　しばらくそのまま悪魔の帰りを待っていたが、やがてデミウルゴスが訝しげに首を傾げた。
「どうされたのですか？」
「……どうも妙な事が起こっているようだ。悪魔の意識が途絶えた。殺されてはいないようだから意識を失って無力化されたと考えるのが妥当だろうが……無力化出来るなら何故殺さない？」
「どこなのか地点は分かるので？」
「それは問題ない、向かうとしよう」
　デミウルゴスの言葉に即座にセバスは頷き、二人は森へと分け入っていった。
　斥候の悪魔が無力化されたという事は何らかの脅威があるのは間違いないが、殺されてはいないという事は差し迫った命の危険は近付いてもすぐにはないという事だろう。デミウルゴスとセバスをも無力化する危険性はないではないが悪魔が帰還出来ない状況である以上はこちらから出向いて確かめるしかない。対応できない場合はすぐに撤退だが毒や麻痺、移動阻害などの各種耐性を種族特性や装備で得ているデミウルゴスとセバスの動きを封じられるような脅威はユグドラシルでさえそうそう考えられなかったというのにましてやこ

の世界ではほぼないだろう。無論可能性はゼロではないが見極めない事には話にならない。そのまま二十分程も進むと目的の地点へと到達する。

そこには、妙なものが幾つも転がっていた。白い綿のようなものに包まれた成人男性ほどの大きさの塊が十程もあるだろうか。召喚した悪魔もその只中に転がっており、意識を失っているようだった。その奥に異様なものがあった。

一抱え程もありそうな巨大な白い綿に似た物体の表面には血の色をした雫のような模様が滴り無数に散らされている。何とも毒々しい見た目だった。これは一体何なのか、考えていると視界を覆わんばかりの粉が巨大な物体から舞い散らされた。

「成程、これは茸か何かで、近付くと胞子を撒き散らすようになっていて、それに麻痺毒の効果でもあるのだろうね。各種耐性のある我々には効果がないようだが。一部は証拠兼サンプルとして冒険者組合に持ち帰るとして後は焼き払ってしまおう。セバス、どこかの部分を取っておいてくれるかい、胞子が散らないように厳重に包んだ方がいいだろう」

「承知いたしました」

デミウルゴスが渡したナイフを受け取ってセバスは茸らしきものへと近付いていき、その一部をナイフで抉って革袋へと入れ厳重に縛りそれを更に別の革袋に入れた。

「さて、さっさと始末してしまおうか。〈獄炎の壁（ヘルファイヤーウォール）〉」

念には念を入れて徹底的に焼き払おうとセバスが離れたところで尚も胞子を吐き続ける茸に向かいデミウルゴスは獄炎の魔法を放った。灼熱に焼かれた茸は瞬時に焼け溶け、後には燻る煙だけが残った。

「……ということは、この転がっているのが冒険者だろうね。苗床にされたという訳か」

もう息はないだろうと考えているのでデミウルゴスは興味なさげにそう呟いたが、セバスは転がっている内の一つの前に屈み込み菌糸の膜を破っていく。やがて若い男の顔が現れ、顔を近づけ口元に手を

当てたセバスがデミウルゴスを振り向く。
「まだ息があります、仮死状態に近いようですが体温もあります、このままだと危ないでしょうが……」
「ほう、それは良かったね。そこから助かるかどうかは私達の領分ではないだろう、神殿の神官にでも任せたまえ」
　そのデミウルゴスの言葉には答えずセバスは次々に菌糸を破り冒険者達の息があるかを確認していった。金（ゴールド）級冒険者と思しき者達は時間が経っている為衰弱が激しい様子だったがまだ息はあった。どうやらあの茸の寄生形態は仮死状態に近い状態にしてじわじわと生命力を吸い取っていくものだったらしく、行方知れずになってからこれだけ時間が経っているというのに驚く事に全員生きていた。応急処置としてセバスが気功で体力を回復させ馬車に運ぶ。元より興味のないデミウルゴスは馬車まで移動してセバスが冒険者を運び終わるのを待っていた。
　そこからテメルの神殿へと冒険者達を運び、神官に後は任せる事になる。原因も究明したし冒険者達も助けたのだからもうプラートへ帰ってもいいだろうとデミウルゴスは考えていたのだが、冒険者達の安否を見届けますとセバスが言い張るので結局付き合わされた。根を張った菌糸が治癒魔法で消えるものなのかは少しだけ興味があったが冒険者の命などどうでもいい、命が助かろうが助かるまいが救助したという事実は作ったのだから安否など見届ける必要はないというのにセバスにも困ったものである。
　冒険者達は無事に助かった。治癒魔法を受けて意識も取り戻し後は衰弱した体力を回復させるだけとなったので療養はテメルの神殿で行う事になった。ここまで確認したのだからもう十分だろうといい加減ぶち切れてしまいそうな堪忍袋の緒をどうにか宥めつつデミウルゴスは半ば強引にプラートへと戻る事にした。
　結論から言えば今回の依頼は受けて正解だった。単に運が良かっただけとしかデミウルゴスには思えないが結果として冒険者の命は救う事が出来たし、それによって貴重な高位冒険者の命を多く救った英雄に堕落の果実の名声は高められた。セバスの思惑通りに事が運

んでしまったのは非常に面白くないのだが結果としては良かったと認めざるを得ない。
「情けは人の為ならずと申します。利益か不利益かだけで判断されるあなたには分からないかもしれませんが、巡り巡って己の為となる事もあるのです。急がば回れ、とも申しますね」
「君はつくづく一言多い男だね。今回はたまたま上手くいっただけでいつもこうとは限らない、出来る限り確実な方法を選んだ方が目的には早く到達出来ると思うのだが？」
「そのようなやり方では人々の信頼を勝ち得る事は出来ないでしょう、英雄は時に見返りのない危険にも人を思い身を投じるもの、英雄という評価を得ようとするならばこういった依頼も積極的に受けるべきではないでしょうか」
「人の心などすぐ移ろうもの、そんな不確実な要素を当てにするよりは確実に利益の出るやり方を選ぶべきだと言っているんだよ、君も分からない男だね。十分な根回しをした上で誰も文句の付けようがない数で実績を示す方が確実だとは思わないのかい」
「分かっていないのはあなたの方では？　心は移ろいますが不変のものもあります、人々が忘れられないだけの偉業を成せばあなたの言う確実さも担保されるのではないですか？」
「その偉業を成すのに毎回こんな不確定要素ばかりの依頼をやらされるのではたまったものではない。分かっていないのはどう考えても君だね、我々は一刻も早くナザリックへ帰還するという目的があるというのにそんな寄り道ばかりに時間を取られては困ると言っているんだ」
「人の心を掴もうとするならばこのような依頼は遠回りではなく近道であると考えます、それがあなたには分かっていないようですが軍略を考える上で人の心という不確定要素も重要なものでしょう、それでナザリックの防衛指揮官が務まるとはとても思えませんね」
「人の心を把握していないとは誰も言っていないだろう、そんな不確実なものを当てにするべきではないと言っているだけだ。今回はたまたま上手くいっただけの結果論でそこまで言われては私も黙って

いられないが、君はそもそも自分が甘すぎるという自覚が足りないのではないかね？　今回だって助けて利益があるかどうかではなく下らない人間共を助けたいという甘さで引き受けたものだろう、ナザリックへ帰還する為に為すべき事についてもっと考えて貰わなくては困るのだが。そもそも今回は冒険者共が生きている可能性の方が少なかったというのに――」

セバスの甘さも役に立たない訳ではないし時には大きな結果を生むのだと思い知らされながらも、それでもそんな不確実な手法を認めることの出来ないデミウルゴスは結局その日も夜中ずっと実りのない言い合いに時間を費やす事となった。

凶眼と計画

冒険者組合からの依頼を達成した後もデミウルゴスは十分と思える期間をプラートでの情報収集に充てたがナザリックの情報に関しては成果を得る事が出来なかった。聖王国内で情報収集を行っているので当たり前だが聖王国の政情や内情、情勢にどんどん詳しくなってしまい、十分な手駒さえあれば簡単に手中に出来そうな気がしてきてしまったので目的を見失ってはいけないとデミウルゴスは思い直した。手中にしておいてモモンガ様に捧げるというのも悪い案ではなかったろうがセバスがいてはそれも出来ない。もし最初からその案を採用できていたなら亜人共もさぞいい手駒になったろうにと思うと惜しい気はするがないものねだりをしても仕方がない。

プラートにいてもこれ以上得るものはないと判断したデミウルゴスは聖王国首都ホバンスへの移動を決めた。セバスからも特に異論は出なかったので再び一週間程をかけて徒歩で移動する。

首都ホバンスはこれといった特徴のない中世の王都といった佇まいの都市だった。街の奥に建つ王城も壮麗や荘厳といった雰囲気は特になくデミウルゴスから見れば至極つまらない凡俗な城だった。

堕落の果実の名声は首都にまで既に届いているらしくアダマンタイトのプレートを見た門の衛兵からは最大級の敬意を払われる。今回は前回と同じ轍は踏まない、セバスとは後で待ち合わせる事にして門で別れてデミウルゴス一人で冒険者組合に顔を出してから宿をとる。今回も情報を直接探る者と情報屋を探す者それぞれの役目を割り当てた影の悪魔（シャドウ・デーモン）を送り出してしまえば差し当たっては今の所とりあえずする事がなくなる。

酒場で酒でも適当に飲みながら噂話を集めるというのも効率は悪いものの情報収集の一つの手段だが、人間共の飲んでいる酒の不味さときたら一口たりとも飲みたくないとデミウルゴスは思わされてしまう。しかしそれ以上にこの何も出来ない時間というものがデミウルゴスにとっては苦痛で仕方がない。本来ならばナザリックの為に寸暇を惜しまず働いているところなのにこんな風に時間が無駄に浪

費されるのかと思うとただただ遣る瀬無い。故に、せめてナザリックに帰還する為に時間を使わねばという強烈な使命感のようなものからデミウルゴスは酒場に降り、飲みたくもない酒を頼んで他のテーブルの話に耳を傾ける事にした。

泊まっているのは冒険者向けの宿なので話題も冒険者が興味を持つモンスターの情報やマジックアイテムの相場の話、他の冒険者パーティや国内・他国の強者等の話になる。大抵はプラートまでで得られた情報と大差はない目新しさのない話が繰り返されていたのだが、一つ初耳の話があった。リ・エスティーゼ王国で三つ目のアダマンタイト級冒険者パーティが誕生したという。二人組で片方は絶世の美女、という噂話としか言い様のないあやふやな話だったが、情報屋が見つかったらもう少し詳細が分からないか探りを入れてみるかと頭に留め置く。今すぐ使える情報ではないが今後役に立つ事もあるだろうし強者の情報を把握しておく事は必要だ。

これから訪れる事になるかもしれないと他国の冒険者の情報もデミウルゴスは出来る限り頭に入れている。聖王国でナザリックが見付かればそれに越した事はないがその可能性は低いだろうと考えているから恐らくは各国を回ることになるだろう。その時冒険者が味方となるにせよ敵になるにせよ事前に情報が分かっているのとまるで分からないのでは対応が違ってくる。それにしても二人組とは、デミウルゴスの言えた事ではないが変わったパーティである。たった二人でアダマンタイトと認められる働きをしたという事は相当の実力者と考えられるから要注意だろう、と警戒度は高めに設定しておく。

基本的に冒険者は国家からは独立した存在で、国同士が対立しているからといって冒険者が徴兵され戦争に駆り出されるようなことはないらしい。冒険者が普通の兵に当たれば普通の兵の側がまず勝てずに次々に殺され被害が拡大しすぎる為だという。聖王国の冒険者組合はどうも立場が弱いらしく亜人との戦争となれば冒険者も徴用されるだろうことは誰でも推測が付く事実らしいが、さておき人間同士の戦争で冒険者同士が争うという事は原則はなく、冒険者のルール

に則って行動している限りは敵対の可能性は限りなく低い。ワーカーという冒険者のドロップアウト組はこの限りではなく利害がぶつかり殺し合いなどに発展する事もあるらしいが、組合が依頼を調査して割り当てる冒険者同士では考えられない事だ。故に敵対の可能性はほとんど考慮する必要はないのだが、デミウルゴスとセバスは異形種であり完全に人に見える形態のセバスはともかく特にデミウルゴスは耳と尻尾を晒せば人でない事が一目瞭然という事を考えれば万が一の露見の可能性は考えておかねばならない。

冒険者組合で確認したがアダマンタイトに頼むような依頼は今の所ないようだから余程の事がない限りはしばらくは情報収集に専念できる。どうにかナザリックの情報の欠片だけでも掴めれば、とデミウルゴスは考えていたのだが。

＊＊＊

ネイア・バラハはただひたすらに走っていた。宛てもなく闇雲に、遠くへ遠くへより遠くへと駆けていた。

どうしてこちらへ走ってきてしまったのか、今どこへ向かって走っているのか、そんな事すら考える余裕は今の彼女の頭にはなかった。それほどまでに偶然聞いてしまった話の内容は衝撃的すぎて、彼女の頭の中全てを占めてしまっていたのだ。立ち去る時に足音を消せたかどうか分からない、気付かれたかもしれない、そんないつもであればきちんと考えられるような事でさえ今の混乱しきった彼女の頭では考えられなかった。

人混みを掻き分け盲滅法に走り抜ける。本当は別の方向へ走るべきだった、聖騎士団の屯所へと行くべきだったというのにどうしてこんな街中へ来てしまったのか、ネイアがようやくそんな思考を浮かべるだけの余裕を得られた時だった。

道のど真ん中を我が物顔に歩く一団の先頭の男を避けきれずに正面からネイアはその男の胸板に衝突した。勢い余ってネイアは後ろに吹っ飛び尻餅をつく。

「すっ、すみません……」

「すみませんだぁ？　謝って済んだら警吏はいらねぇよなぁお姉ちゃ

ん？　ああ痛え、こりゃ神殿で治癒して貰わなきゃいけねえかもな？」
「うわっ……こいつ目付き悪すぎだろ……何人殺してんだこの女」
「目なんか目隠ししちまえばいいだろ、穴さえありゃあ俺は何でも構わねえよ」
「ほんとお前それしか考えてねえな、まあ俺もやるけど。ハハハハ」
　下卑た笑い声を上げながらチンピラといった風体の男達はネイアを取り囲んだ。ネイアも見習いとはいえ聖騎士の端くれ、こんな街のチンピラ如きには負けはしないが五、六人に一度にかかられるとなると分が悪い。
「お姉ちゃん、詫びる気があるってんなら誠意を見せてもらわなきゃなぁ？」
「そうそう、金出せなんて言わねえからさ、その代わりしっかり体でな」
「ほら、来いよ」
「やめて下さい！」
　腕を掴もうとしてきた男の腕をネイアが振り払うと、男達は苛立ちを露わにした。
「大人しくしろってんだよこのアマ！」
　ネイアとぶつかった正面の男が頬を叩こうと腕を上げ振りかぶる。どうにか反撃してその隙に逃げ出せれば、でも他の奴等が動いたら対処出来ない、ネイアが考えても男の手はネイアの頬を叩こうと動かなかった。何者かの手が横合いから男の手首を押さえ込んでいた。
「先程から見ていれば女性一人に六人がかりで下劣な発言ばかり。女性は守るべきもの、というと少々時代錯誤でしょうが、あなた方はそれでも男として恥ずかしくはないのですか」
「痛痛痛、痛えよ！　このっ、クソジジイっ！」
　いつの間にそこに立っていたのだろう、綺麗に刈り込んだ髭を蓄え旅人用と思しきマントに身を包んだ白髪の紳士は涼しい顔で男の腕を捻じり上げた。痛みに耐え兼ねたのか男が後退り紳士がようやく手を離す。

「邪魔すんじゃねえよ爺い！」
「困りましたね、あまり派手な行動は慎むように言われているのですが……あなた方が殴りかかってくるなら正当防衛という事になるでしょうから仕方ありませんね」
　腕を下ろし向き直った紳士を見てネイアを含めた全員が息を呑んだ。その胸に輝く冒険者プレートは最高位を示すアダマンタイトの輝きを放っていた。
「こっ、こいつ……アダマンタイト!?」
「じゃあ、もしかしてあの亜人十傑を全部やっちまったっていう……」
「堕落の果実の……」
「次そのパーティ名を口にしたら容赦なく殺しますよ」
　ギン、と獲物を捉えた猛禽類のような鋭い視線と共にネイアにも分かる程の明確な殺気がパーティ名を口にした男に向けられた。ひっ、と怯えた声を上げてその男は尻餅をついた。
「……くそっ、やめだやめだ、こんな目付きの悪い女に拘る事ぁねえんだ！」
「いっ、行くぞ！」
　捨て台詞を残しほうほうの体で男達は逃げ去っていく。事の成り行きに呆然とするネイアに紳士は優しげな笑みをにこりと向けてきた。
「お怪我はありませんか？　何かお急ぎの用事があったのでしょう、お時間は大丈夫ですか？」
「えっ……いえ、あの、その……怪我はありません、ありがとうございます。その……それから、別に用事があった訳じゃないんです……」
「ほう？　随分お急ぎの様子だったので何かご用があるのだとばかり思っておりましたが……何かご事情があるのでしょうか？　立ち入った事をお聞きすることになるかもしれませんが、もしかしたらお力になれるかもしれません。もしよろしければ何故あんなに急いで走っていたのか話してみませんか？」
　紳士のその言葉にネイアは答えを迷って躊躇した。この紳士を巻き込んでしまってもいいものか、という思いと、アダマンタイト級の

冒険者なら言葉の通りに力になってくれるのではないだろうか、という思いから。
「あの……でも、ご迷惑をおかけしては……」
「困っている女性のお力になる事は男の責務です、迷惑などとは考えませんよ」
「……ここでは、ちょっと。私の家なら……ああ、駄目、母さんを巻き込んじゃう……」
「余程込み入った事情がおありのようですね。それではわたくし共の宿でお聞きしましょう。といっても今日着いたばかりで宿の場所もまだ分からないのですが、……仲間、がもう宿の部屋をとっている筈ですから待ち合わせ場所まで参りましょう」
　仲間、と言う時に少し嫌そうにしたのは何故なのだろうとネイアは少々疑問に思ったが今はそれどころではない。本当ならば冒険者に相談する前に聖騎士団の屯所に行くべきなのだろうがあの話をしていたのが誰なのかすらネイアには分からなかったし証拠も何もないから訴えようにも確たるものを何も示せない、だけどネイア一人で抱えたまま悶々とするにはあまりにも重大すぎる話だった。誰かに聞いてほしかった。
　意を決してネイアが頷くとまるで安心させるように柔らかくにこりと紳士は笑んだ。
「失礼、まだ名乗っておりませんでしたね。わたくしセバス・チャンと申します、よろしくお願いいたします」
「ネイア・バラハです」
「わたくしの……仲間、は少々困った男なのですが……頭だけはとにかく良いですから何かいい知恵を出してくれるかもしれません。まあ、狡賢いと言った方がより正確ですが……」
「あの、お仲間……ですよね？」
「はい、一応……そういう事になっております」
　答えながらセバスは明らかに嫌そうな顔をした。仲間と思われるのは心外、とでも言いたげな顔である。一体どんな大変な人が待っているのだろうと思いながら待ち合わせ場所へと向かうセバスに従い

ネイアも歩き出したのだが。

＊＊＊

「セバス。我々の宿は冒険者向けで連れ込み宿ではないし、そもそも私も一緒に過ごす部屋なのだがどういう訳で女性連れなのかね。止めはしないからそういう宿に行ってくれないかね、金はあるだろう？」

待ち合わせ場所でセバスとネイアを見るなり苦々しげな顔をして苦言を呈した男は、顔も声もとても良かった。頭だけって言ってたけど嘘つきましたねセバスさん、どこもかしこも完璧な人なんですけど、とネイアは若干騙されたような心持ちになった。そもそもセバスだってネイアのような小娘でさえちょっとときめいてしまうような素敵な紳士だ。どういう組み合わせなのだろうこの二人は、どうしてセバスは仲間と思われるのをあんなに嫌そうにするのだろう、話題のアダマンタイト級冒険者達に対する様々な疑問が好奇心から次々湧いてくる。

「誤解していただいては困ります。この方はネイア・バラハさん、大変お困りの様子だったのですが道端や家では話せない事情があるそうでそれならば我々の宿で事情を聞こうと思いこうして連れてきたのです。話も聞かずに決めつけるのは些か乱暴では？」

「君の大好きなお節介に私も巻き込む気かね。まあいつも巻き込まれているがね、迷惑極まりない話だ。君はいつもそうだ、こちらの事情など全くお構いなしに考えなしに行動するのだからね」

「何も考えていないということはございません。困っている方を見過ごせませんし、お力になる為にどうすればいいかを精一杯考えておりますが」

「我々にはもっと他に考えるべきことがあるのではないかね、そこのところをどうも君は分かっていないようだ」

「我々の目的の為にも有効な手段である事はあなたも認めた筈では？」

「君はお節介が第一になっているだろう、我々の目的を第一に考えてくれなければ困ると言っているんだ。大体にして君には好きにして

いいとは言っているが私まで巻き込まないでほしい、自分自身で責任を持てる範囲でやってほしいのだがね」
「勿論の事責任はわたくしが全て請け負います。場所がないから宿を使いたいというだけの話」
「それなら連れ込み宿でも構わないだろう、君だけの問題なのにどうして私もいる部屋でする必要があるのか理解に苦しむね」
「そのようないかがわしい場所にバラハ嬢をお連れできません。たかだか部屋で話を聞くだけでそんなに小うるさく言うのは神経質を通り越して病的とさえ言えますね」
「それを言うなら君のお節介癖の方が余程病的だがね。助けてほしいと言われた訳でもないのに困っていると自分で決めつけたら助けて自己満足に浸るなど病気としか言いようがない。何か強迫観念にでも囚われているのではないかね」
　流れるように繰り広げられる罵倒の応酬を呆然としてネイアは見守った。感想は唯一つ、この人達本当に仲間なの？　だった。あまりにも棘棘しすぎるし険悪すぎる。冒険者といえば生死の境を共に乗り越えた強い絆で結ばれた仲間、というイメージがネイアにはあったのだがそのような固定観念など粉々に突き崩されてしまった。この人達が協力して戦っている姿があまりにも想像出来なさすぎる。
「――私がいる場所でどうしても話を聞く、というなら依頼ということになるがそれでいいのかね。バラハ嬢は私達に依頼が出来るほど裕福なのかね？」
　いつの間にか矛先が自分に向いてきた事に気づきネイアは慌てた。アダマンタイト級の冒険者に依頼が出来るような金など聖騎士見習いの身分の小娘にある筈がない。
「デミウルゴス、わたくしはそのようなつもりで彼女をお連れしたのではないのです、バラハ嬢を困らせるような事を言うのはやめて下さい」
「すみません、アダマンタイト級の方に依頼が出来るようなお金はとても……それに政治絡みの話ですから本来であれば冒険者の方にお願いするのは筋違いですし……」

「ほう？」
　デミウルゴス、とセバスに呼ばれたセバスの仲間の男の眼鏡の奥の眼がその時比喩ではなく本当にきらりと光った、ようにネイアには見えた。瞬きするとその光は消え失せていたから気のせいだったのかもしれないが。
「いいだろう、聞くだけ話を聞くことにしようじゃないか。高位冒険者にしか果たせない責務だったかね？　そのような案件かもしれないしね」
「どのような風の吹き回しですか」
「文句があるのならこの件はここで終わりだが、セバス、君はそれでいいのかね？」
「……分かりました、参りましょう」
　苦虫を噛み潰したような嫌そうな顔をしてセバスが了承を返し、デミウルゴスが先に立って宿へと歩き出したのでネイアもそれに続いた。先程のやかましさが嘘のように宿まではひたすらに無言だった。喧嘩するか黙っているかしかないのだろうかこの二人は、とネイアは再びこの二人が仲間であるという事実に疑問を抱いた。
　高位冒険者向けの最高級の宿は豪華な造りで、手入れが行き届いているとはいえ古びた王宮よりも綺麗かもしれないと首都生まれ首都育ちの筈のネイアは田舎者のように建物の中をきょろきょろと見回しながら歩いた。こんな高級宿に入る機会などネイアにはない。九色の黒を頂いているとはいえ父はそう高給取りではないし、勿論自力で来る事も出来ない。部屋に入るとデミウルゴスは椅子に腰掛け、セバスが引いてくれた椅子にネイアも座る。
「さて、それではお聞きしたいのですが、バラハ嬢、あなたはどうしてあんなにも急いで走っておられたのですか？」
「急いで走っていた程度の事で人助けかね、それは本当に助けが必要な事だったのかね。〈早足（クイック・マーチ）〉が使える魔法詠唱者（マジックキャスター）なら助けになれるかもしれないが」
「あまりにも慌てて走っておられた為に性質（たち）の悪い連中にぶつかり連れていかれそうになっていたのでお助けしたのです。余計な茶々を

入れられてはバラハ嬢が話しづらいでしょうから黙って聞いていて頂けますか」
「話が進まないのは私も望むところではないしまあいい、黙るとしよう」
　肩を竦めてデミウルゴスは口を閉ざしたが、ネイアは未だ胸の内に秘めたこの件を話すべきなのかを迷っていた。冒険者は政治には非介入という不文律があるのは誰だって知っている、アダマンタイト級ならばある程度自由がきくとはいえこの二人を巻き込んでしまうのが本当に正しいのかがネイアには判断がつかなかった。
「お一人で抱えているのにはあまりにも重い問題だからあんなにも無我夢中で走られていたのではないですか？　お力になれるかはまだ分かりませんがとにかく話してみるだけでも話してみれば少しは胸の支えも下りるかもしれませんよ」
　不安を見透かしたように穏やかな声でセバスが促してくれる。それでもしばし躊躇して、それからようやくやっと意を決してネイアは口を開いた。
「今日、私は王宮の外れにある倉庫で備品の武器を磨いていました。集中している時に声を掛けられると煩わしいので気配を殺す癖があるので私がいる事に気付かなかったのかもしれないんですが……後から入ってきた何者かが相談を始めたんです。建国記念の式典で、女王を暗殺する暗殺者に連絡を取る相談でした。でも誰が話していたのかも分かりませんし何も証拠はありませんから上役に報告しようにもどう報告していいか分かりませんし、それより何よりその時は気が動転してしまって……それで逃げていたんです」
「女王を暗殺……それは一大事ですね。一刻も早く誰かに伝えた方がよろしいのでは」
「でも……何をどう説明すればいいのか……私が聞いたのは、今夜暗殺者に使者を送る手筈になっている、という事だけなんです」
　困り果ててネイアは目線を伏せ、いい考えが浮かばないのかセバスもかける言葉がないようだった。ただ一人、デミウルゴスだけが満足気に微笑んだ。

「成程成程。バラハ嬢、簡単な話だよ。君は聞いたそのままを上役に伝えればいい、それだけだ。なるべく上の者にね。装備品から見るに、君は兵士なのだろう？」
「聖騎士見習いです」
「それならば聖騎士のトップ、レメディオス・カストディオに伝えられれば重畳。彼女は女王の側近というから彼女に伝えられれば女王の警護も万全の体制が敷かれるのではないかね？」
「確かにそうですが……でも証拠がないですし誰がどんな手段で女王を狙うのかも分かりませんし」
「その調査を我々に依頼したまえ。依頼料は……そうだね、ケラルト・カストディオにこの件が確実に伝わればそれで十分。それさえ確約出来れば調査もするしセバスを君の護衛に付けようじゃないか」
　唐突なデミウルゴスの申し出にネイアは目を白黒させた。レメディオスに伝えればその妹で女王のブレーンたるケラルトにも確実に伝わるだろう。だがそれを何故冒険者が望むのか、その狙いがネイアには全く分からなかった。
「但し、一つ条件がある。これから私が行う計画にセバスが一切口出しをせず従う事。それが出来るなら普段からのセバスの不寛容さも私への譲歩のなさもこの際水に流そうじゃないか。だがこの条件が呑めないならば我々は冒険者の不文律に従い政治絡みのこの件からは一切手を引く」
「……何を企んでいるのですかデミウルゴス」
「企むとは人聞きが悪いね。女王、ケラルト・カストディオ、馬鹿な貴族、盤上に駒が揃い舞台が整ったという事さ」
「犯人の目星が付いているのですか」
「当然だ。三人程には絞れているから今夜の動向を探れば自ずと知れるだろう。何せ今夜動く事は分かっているのだからね。首謀者が知れれば後は放っておいてもケラルト・カストディオが芋蔓式に引っこ抜いてくれるだろうさ。目星をつけた人間の屋敷の場所を知りたいのでその点はバラハ嬢にご協力頂きたい」
「……計画とやらが受け入れ難いものであれば従えません」

「私としては不本意だが、君が希望するだろう通り罪のない市民には極力被害が出ないよう万全の注意を払う事を約束しよう」
「どういう計画か聞かせて下さいますか」
「いいだろう、こちらへ」
　そう告げるとデミウルゴスは立ち上がり部屋の隅へと移動した。セバスもそれに続き、部屋の隅でネイアに聞こえない小声でデミウルゴスが何やら説明を始める。それを聞いていたセバスの顔は驚愕の色から怒りに変わった。
「何を考えているのですかあなたは！　そのような事許せる筈がございません！」
「死人は極力出さないようにするし、怪我人も……努力しよう。さて、これが呑めないというならこの件からは君にも手を引いてもらうがどうするかね？　本来であれば冒険者は手出しをしてはいけない案件だ、それを目こぼしするばかりか私も協力するのだから君も少しは譲歩の姿勢を見せてほしいものだが」
「ですが！　あまりといえばあまりな！」
「ふむ、では君は女王が誰に狙われているのかが分からないまま放置する事を良しとするのだね。ケラルトでも調べられるだろうが、あの女は今まで得た情報を総合すると恐らくは正確に調べるよりは自分達に都合の悪い者に罪を擦り付けるタイプだろう。そうなると建国式典での女王襲撃は行われてしまうという事になるが、それも私の計画を採用すれば防げるのだよ？　そして一切合切の責任は首謀者の貴族に負わされる事になる。我々の名声は揺るぎないものになり益々喧伝される。一体誰が損をするのかね？」
「……」
　まさに苦渋といった苦しげな表情を浮かべてセバスは黙り込んだ。デミウルゴスの言う計画とは一体どんなものなのか、死人とか怪我人とか物騒な事を言っていたが一体何をするつもりなのか、分からない事が多すぎてネイアは何も言う事が出来なかった。先程セバスが何を企んでいるのかと言っていたがデミウルゴスはまさに何かを企んでいるのだろう。一体建国記念式典で何をやらかすつもりなのだろ

う、それをネイアは見過ごしていいのだろうか、そもそもネイアがこんな相談事を持ち込んだからこんな事になってしまっているのではないか、見えない企みへの恐ろしさやセバスへの申し訳無さがない交ぜになってしまってネイアは混乱の極みで今にも泣き出したい気持ちになった。

「……分かりました。わたくしにも譲歩が必要なのは確かですし、女王暗殺は阻止しなければなりません。但し、死人や怪我人は必要最小限に抑える事だけは必ず約束して下さい」

「君の了承を得られて嬉しいよ、約束は守ろう。ではバラハ嬢、貴族の邸宅の位置を三軒ほど教えてほしいのだが。その後君はセバスと共にレメディオス・カストディオに会いに行くといい。アダマンタイト級冒険者の面会とあれば彼女も無碍にはすまい。セバスはそのままバラハ嬢の護衛に就いて構わない。こちらから用事がある時は使いを送ろう」

「承知いたしました」

肚を括ったのかセバスは素直に頷いたが、ネイアは未だに混乱の中にいた。どんどん話が進んでいくがこのままでいいのだろうか。何か大変な事が起きてしまったらそれはネイアが引き起こした事だ、そんな事を許していいのだろうか。

「あ、あの……一体、何をするつもりなんでしょう……？」

「バラハ嬢、悪いが君は部外者なのでね、計画の全容を話す事はできない。引き受ける条件に一つ追加しなければならないね、君は私が何かを計画している事を決して口外してはならない。心配しなくても先程セバスに約束した通り被害は最小限に留めるし、全て綺麗に解決される予定だから安心してくれていいとも」

にこりと穏やかで優しげな笑みをデミウルゴスは浮かべたが、それがまるで悪魔の微笑のように見えてしまって、悪魔ってもしかしたらこんな風に優しげな表情と声で人間を誑かすのかもしれないと失礼とは思いつつもネイアは感じてしまったのだった。

護衛と策謀

デミウルゴスに貴族の邸宅の大まかな場所を教えたネイアは、セバスと共に聖騎士団の屯所まで戻ってきていた。入り口でセバスが団長への面会を申し入れるとさすがアダマンタイト級冒険者の威光というべきか、面会の申し入れを聞いた聖騎士はすぐに話を通しに行ってくれた。

だが、ネイアは不安で一杯だ。あれからもう一つ追加の条件がデミウルゴスから出された。堕落の果実が王女暗殺の件に関して調査している事は内密にしてレメディオスにも話さない、というものだ。政治には関わらない冒険者の不文律からみればこんなドロドロの政治絡みの事件に関わると知られるのはあまり外聞もよろしくないだろうから当然といえば当然だが、彼の考えている事はそんな事ではないような気が何となくする。

セバスの面会の申し入れを伝えに行った聖騎士はすぐに戻ってきた。団長が会うという。その聖騎士の先導でセバスとネイアは聖騎士団の詰める建物の一階奥にある団長の部屋へと通された。

部屋の奥には聖騎士団団長レメディオス・カストディオが座り、横には副団長で九色の桃色を頂くイサンドロ・サンチェスと同じく副団長のグスターボ・モンタニェスが控えている。従者の身分のネイアでは普段は遠くからしか見る事のないような人達だ。

「貴殿が最近噂のだ……だら……？」

「堕落の果実です団長」

「それだイサンドロ、その冒険者だそうだな。今日は何用あって私に面会を求めてきたのか、用件を聞こう」

そのレメディオスの言葉にセバスは一歩進み出るとぴしりと美しい礼をした。

「お初にお目にかかります、わたくしセバス・チャンと申します。まずは面会を許可して頂いた事を感謝申し上げます。実は今日、聖騎士見習いをされているこちらのネイア・バラハ嬢と偶然街で出会いまして、恐ろしい企みが進行していると聞きましたので是非カストディオ

様のお耳に入れたいと思いこうして参上した次第です」
「恐ろしい企みとは……？」
「王女暗殺の計画がどこかで密かに進んでいるらしいのです。バラハ嬢、あなたの聞いた事を団長殿にご説明差し上げて下さい」
　セバスに促され、ネイアはごくりと唾を飲み込んでからゆっくり頷いた。団長と言葉を交わすなど初めての事だ、緊張しないわけはないのだが言わなくてはならない。
「あの……わたくしは本日城内の倉庫で備品の武器を磨いておりました。そこに誰かが入ってきて、建国記念式典で王女を暗殺する暗殺者に今日使者を送る手筈になっている、という話をしたのです。私が聞けたのはそれだけですので詳しい計画の内容までは分かりませんし、その者達はすぐに出ていったので誰なのかすら定かではありませんが……」
　ネイアの言葉を聞くとレメディオスは眉を吊り上げ、どん、と強く机を叩いた。思わずネイアの肩が竦む。
「ネイア・バラハ、何故すぐに報告しなかった！　一大事ではないか、カルカ様の命を狙うなど何という不届き者、即刻成敗してくれる！　イサンドロ、グスターボ、行くぞ！」
「団長、どこへ行かれるつもりですか。何者が企てているのかも定かではないのですよ？」
　半ば呆れたような諦めたような声色のグスターボの言葉に、レメディオスは言葉をぐっと詰まらせた。
「……まっ、まずは、犯人探しだ！」
「どうやってですか……それにどう考えても我々の管轄ではありません。まずはケラルト様にご相談されては如何でしょう？」
「そうだな、ケラルトならば何かいい知恵を出してくれるやもしれん。さすがだなグスターボ！」
　満面の笑顔で大きく頷いたレメディオスに、グスターボは長い息を吐いた。団長ってこんな人だったんだ、副団長のお二人は大変そうだな、という思いがネイアに湧き上がる。
「一つお願いがございます」

「うむ、セバスだったな、何だ？　言ってみろ」
「偶然にも重大な秘密を耳にしてしまったバラハ嬢の命を誰が狙うやも知れませんので、可能であればこの件が解決するまでわたくしが側近くで護衛に当たる事をご許可頂きたいのです。勿論聖騎士の皆様方の任務のお邪魔にならないようにさせて頂きます」
「城にいる間はそんな不届き者は入ってこられないと思うが……まあいいだろう。それにしてもアダマンタイト級冒険者の護衛とは随分豪勢だが、ネイア・バラハ、君の家はそんなに裕福なのか？」
「いえ、それは……その……」
「これは人助けの一環でして、金銭での報酬は頂きません。余人に話せぬ秘密を抱えてしまったバラハ嬢のお力になりたいというわたくしの勝手でございます。聖騎士の皆様方にはご迷惑をおかけするかとは思いますが快くご許可頂いた事誠に感謝申し上げます」
　表情からみると純粋に好奇心から団長は聞いたようだったが、ネイアにとってはどうにも答えづらい問いだった。まさか報酬が「ケラルト・カストディオにこの件が確実に伝わる事」だなどとどう説明したらいいものやらさっぱり分からない、ネイアにだってよく分かっていないのだ。セバスの助け舟が心から有り難かった。
「ふむ、変わった冒険者もいるものだ」
「堕落の果実のセバス殿といえば各地での民衆への善行でも名を馳せておりますから」
「冒険者にしては見上げた心掛けだな、感心したぞ」
　イサンドロの説明にレメディオスは納得し、セバスを見てうんうんと頷いた。
「さて、それでは私はこの件をケラルトに相談してくる。グスターボ、一緒に来てくれ。イサンドロはしばらくここを頼む。ネイア・バラハは持ち場に戻るように」
「はっ」
「了解しました」
　レメディオスが立ち上がり、ネイアとセバスは一礼して部屋を後にしてネイアの持ち場へと戻ることにした。今日は一日中武器磨きの

予定だったので件の秘密の相談を耳にした倉庫である。
　倉庫に向かう途中でセバスはらしくもなく唇を歪めて眉根を寄せ、長く息を吐いた。
「どうされたんですか？　セバスさん……大丈夫ですか？」
「いえ……申し訳ございません。パーティ名を連呼されたものですからつい……」
「そういえばゴロツキに言われた時にも怒ってましたけど、お嫌いなんですか？　自分達のパーティ名なのに」
「……この名前にするのをわたくしは反対したのです。それを、あの男が無理矢理決定して！　変更したいと言っても聞いて貰えず！」
　紳士らしからぬ剣幕で鬱憤を晴らすようにセバスは捲し立てた。その勢いに呑まれてネイアはぽかんと呆気にとられてしまう。
「……これは失礼いたしました。大変な身の上のバラハ嬢に愚痴を零してしまうなどわたくしもまだまだ精進が足りません」
「いえ、それはいいんですけど、あの……仲、悪いですよね、デミウルゴスさんと……お仲間なのに」
「そうですね、あの男とわたくしとは水と油と言えます。行きがかり上仕方なく行動を共にしているだけです」
「そういえば目的があるようなお話をされていましたけど、どんな目的なんですか？」
「離れ離れになった同胞を探しているのです。名声を高めれば情報も様々集まりますし我々の名が同胞にまで届くかもしれないですから、こうして冒険者をしているという次第です。あの男も同胞の一人ではあるのですが……」
　そう言うとはぁ、とセバスは深く溜息をついた。深い事情はネイアには分からないが、セバスとデミウルゴスはあれほど反りが合わないのに一緒に行動せざるを得ない状況なのだろう。売り言葉に買い言葉のあの様子を見れば恐らくはどちらが悪いというわけでもないだろうからデミウルゴスを気の毒だと思う気持ちがないわけではないのだが、何を考えているのかよく分からない彼よりも親切な紳士であるセバスの方につい肩入れして同情してしまうのは無理からぬ事な

ので許してほしいとネイアは思った。
　非常事態だったとはいえサボってしまった分も夕方まで真面目にネイアは武器磨きをして、その後従者が集合し指導役の聖騎士から明日の訓練などの説明を受けて帰宅となる。セバスさんの事母さんに何て説明しよう……と考えると途端にネイアの気が重くなり足取りまで自然と重くなった。
　母を巻き込みたくはないが護衛してもらう関係上セバスと離れる訳にはいかない。そしてセバスの護衛はデミウルゴスの言い出した事だ、彼の謎の計画の一端に恐らくは組み込まれているのだろう。それを母さんに言いづらいからなんて理由で崩していいものかという躊躇もある。いかにも物騒そうな彼の計画にネイアが協力しなければならない義理はないのだが、女王暗殺を未然に防ぐ計画ならば話は別だ。
　ただ単にお互いに顔を見ないで済む口実ができたから利用されただけとはネイアは露程も思っていない。そしてデミウルゴスにはついでとはいえ（かかる公算は低いが）もう一つの目論見がある。
「どうなさいましたか？」
　黙思したネイアの様子を気にしてかセバスが気遣わしげな声をかけてくる。
「いえ、あの、セバスさんの事を母にどう話そうかと思って……女王様の事まで話してしまうと心配をかけてしまうので……」
「それでしたらわたくしにお任せ下さい、上手く説明しておきましょう」
「そんな、悪いです、母への説明まで任せてしまっては全部セバスさんにやって頂く事になってしまいます」
「お気になさらず、それも今回の私の役目の一つです。それにバラハ嬢に安心して頂く事こそ護衛の最も大事な仕事でございますよ」
　そう言ってネイアを安堵させるように微笑んだセバスの表情に、ネイアの心はすっかり緩んでしまう。任せていれば全部大丈夫、そんな安心感をこの紳士は与えてくれる。いけないしっかりしなくちゃ、とは思うものの自分で母を上手く説得できる妙案はない。こんな自分

はだらしないと思うし不甲斐なくもあるがセバスに任せる他ないようだった。
「……分かりました、それじゃ……お願い、します」
「承りました。どうぞ大船に乗った気持ちでお任せ下さい」
にっこりと笑ってセバスは前に向き直った。そして次の瞬間、駆け出した。
何が起こったのかがネイアには分からなかった。セバスは何故走り出したのだろうか、どこへ行くのだろう、護衛はどうしたのか？何一つ分からない。
行く手には車輪が溝に嵌った馬車があった。駆け寄ったセバスが何か声を掛け、あれよあれよという間に馬車の車体を持ち上げ溝から道へと戻す。
……まさか、あれを助けに？　護衛対象のネイアを放って？
デミウルゴスがあれだけ苦々しげに嫌味を言っていた理由がようやくネイアにも分かった。困った人を見ると恐らく今のように反射的にセバスは助けに行くのだ。一緒に歩く方はたまったものではないだろう、その度に待たされるのだ。ネイアはまだいい、セバスさんという人は困った人を助けずにはいられないから自分も助けて貰えたのだ、と思える。だが嫌いな相手となれば大目に見る心のゆとりもないだろう。だからといって嫌味を言っていいという事にはならないがデミウルゴスがセバスに困らされているのは確実な事と思われた。
その調子でそこかしこにいる困っている人にセバスが手を貸し時にはネイアも手助けをしながら帰路を辿り、家に帰り着いたのは普段よりもずっと遅い時間だった。
普段からこれをやってるのセバスさん……とネイアは思わずにはいられなかった。それは名声も上がる筈である。少しうんざりしている自分にネイアは気付くが、本来ならばこれは見習うべき行動なのだ。規範となるべきだが誰もが実行出来る訳ではない理想をセバスは実際に行動に移しているに過ぎない。本当はそうした方がいいと誰もが思いながら忙しさや力の無さを言い訳にして我が身可愛さに

つい身を引いてしまうものを、理想通りに実行出来る立派な心の正しさと強さをセバスは持っているのだ。
ただ、帰りはいいが行きにこれをやられると大変困る。遅刻する。後でセバスに言っておかなければ、とネイアは決意する。
娘が連れ帰ってきた初老の男性を見て母は首を傾げたが、不逞の輩にネイアが狙われているところを助け、今後も狙われる危険があるのでしばらく護衛をさせてほしいとセバスが頼む。全部が全部嘘ではないが本当という訳でもない。だがアダマンタイトのプレートの信頼度は抜群で、アダマンタイトの方がそう仰るなら、と半信半疑ながら母も納得したようだった。
それなら客室を用意します、と母が歩き出そうとするのをセバスが止める。
「わたくしはお嬢様の部屋のドアの前で護衛に当たりますので寝室は結構です。毛布だけ貸して頂けますか」
「それではお客様に対してあまりに失礼ですので……」
「わたくしは客ではなく護衛として参りましたのでお気遣いは無用です、お気持ちだけ有り難く頂いておきます」
「そ、そんなに大変な相手でしたら私も武装した方がいいかしら？」
「母さんやめて……セバスさんがいて下さるのは念の為だから」
本当は念の為ではなく、あの話を聞いていた事が相手にばれれば確実にネイアは命を狙われる。だがそんな事を母に言う訳にはいかないし巻き込みたくもない。相手に気付かれていない、とはネイアには断言出来なかった。動転して倉庫を立ち去る時の記憶があやふやだからだ。
食事、風呂、トイレ、いつでもどこでもセバスはネイアの側を離れなかった。さすがに風呂とトイレはドアの前で待っていたが。それでも、自宅だというのにこうも張り付かれると気の休まる時間がない。仕方ないとはいえもう少し寛ぎたい、と自室でようやく一人になったネイアはベッドの上でクッションを抱き溜息をついた。今もセバスはネイアの部屋のドアの横で警戒に当たっている。
セバスさんって真面目過ぎる位真面目。そこが素敵なんだけど。

ふとそんな思いが浮かんで、その内容を反芻してぼっと顔に火が付いたように血が上り熱くなり、ネイアはクッションに顔を埋めた。と、歳の差ありすぎだよね……？　とかどこかズレた事を尚も考えてしまう。

だって仕方がないではないか、ダンディでハンサムで礼儀正しくて正義感が強くて親切で優しくて、しかもアダマンタイト級の強さなのだ。ネイアのような小娘が相手にされないであろう事は分かり切っているが、少し位憧れたっていいではないか。

連れ込み宿……デミウルゴスの言葉を思い出してしまってますます顔が熱くなる。雑念を払おうと深呼吸してみるがまるで効果はなかった。母に事情を説明するのに困るので宿をとろうかとも考えたのだがそうしなくて良かった、と心からネイアは思った。セバスと同じ部屋で寝るなど平常心をとても保てる気がしない。

恋に恋しているような少女の憧れの気持ち、こんなものだって目付きの悪いネイアには今まで縁遠いものだった。ネイアの人並み外れた目付きの悪さだってセバスはまるで気にせず接してくれるし触れてもこない。それもまたネイアにとっては嬉しい事だった。

ちなみにセバスはネイアの目付きの悪さなどまるで意にも介していないというかそもそもネイアの外見に興味がないだけなのだが、それをネイアが知る由はない。

これからしばらくセバスさんとずっと一緒、少し困るけどとっても嬉しい。仄かな憧れが甘く胸を締め付ける感覚のくすぐったさを感じながらネイアは明日に備え眠ることにした。

＊＊＊

セバスの所から戻ってきた影の悪魔（シャドウ・デーモン）の報告を聞き、ふむ、と唸ってデミウルゴスは顎に手を添えた。

あれから三日が過ぎた。想定通りといえばそうだが、陽動としてセバスを付け目立つようにしたネイア・バラハの方には動きはなし。相手が陽動にかかってくれればセバスの特殊技能（スキル）・傀儡掌で新しい情報が手に入るかもしれない、というついでの作戦だったが当てが外れたようだ。

当たりをつけた三人の貴族の内一人が目算通りに動き、暗殺者へと使者を送った。暗殺者の棲家ももう把握しているし、暗殺者の留守中に密書も拝借している。確認したがご丁寧にというか魯鈍にもというか貴族の名前が入っていたので、祭りの当日に然るべき場所に置いておけばケラルト・カストディオに対するいい餌になるだろう。彼女にそれが渡れば全責任は（していない事まで）首謀者の貴族に伸し掛かる事は間違いない。

女王暗殺などという後ろ暗い企みの連絡に後に残る書状を使いそれに名前を入れているというのも、それをすぐ燃やしもせずにご丁寧に残しておくというのもどちらもデミウルゴスにとっては解せない行動だし間抜けしかいないのかとしか思えないのだが、間抜け揃いなのは大いに助かる。書状を捏造する手間が省けたというものである。貴族はただの間抜けだろうが暗殺者はもしかしたら後々強請りたかりにでも使おうとでも考えているのかもしれない。欲をかいた愚か者にせよただの間抜けにせよ、どちらにしろこの先の彼の運命はもう決まっているのだが。

後は舞台の選定を残すのみ。王城に程近く、人目に付かない寂れた場所を探すだけだ。

焦れたのか犯人はまだ見つからないのかとセバスが聞いてきたので、懇切丁寧な答えをちゃんと影の悪魔（シャドウ・デーモン）に持たせてやった。ケラルト・カストディオはまず間違いなく犯人を泳がせ現行犯で確保しそこから首謀者を辿ろうとする。その動きを邪魔しては肝心要の計画に支障が出る。犯人自体は既に見つけてあるし監視も常に付けてあるから安心しろ、と。

そもそもの計画を渋々了承しただけのセバスは不満かもしれないが、セバスの不満などデミウルゴスの知ったことではない。気にかけてほしいならデミウルゴスの不満にももう少し気を配ってほしいものだ。

並行してナザリックに関する情報収集も始めているが、やはりというべきか成果は今のところない。リ・エスティーゼ王国で誕生したという三番目のアダマンタイト級冒険者についても直近の出来事故か

詳しい情報が遠い聖王国まではまだ届いておらず、漆黒というパーティ名が判明したのみだった。更に詳細な情報の調査は複数の情報屋に既に依頼してある。聖王国から北方にあるエ・ランテルなるリ・エスティーゼ王国とバハルス帝国とスレイン法国の三カ国の国境付近に位置する都市でアンデッド数千を倒したというがどこまで本当なのかは定かではない。

建国記念式典まではあと数日ある。ローブル聖王国の建国記念式典はその名の通り建国記念日を祝う祝典で、一般市民が王城への入場を許可され王族が平民の前に姿を見せる数少ない機会だ。全国から貴族も集まりこの時期の首都ホバンスは普段以上の活況を見せる。

観客が多ければ多いほどプロモーション効果は高くなるというもの、建国記念式典という晴れがましい舞台が用意されたのは好都合とばかりにデミウルゴスの口元は緩んだ。セバスの意向さえなければ晴れの式典を惨憺たる地獄に変えることも出来るというのに、と思うと残念さが湧き上がるが考えても詮無い事だ。あのセバスにこの計画を了承させただけでも良しとせねばならない。

予定されている暗殺の手口も判明したが、原始的としか言い様がなかった。超遠距離からの毒矢での狙撃だった。情報屋の話では暗殺者の男は裏の界隈では名の通った長弓の使い手で、彼に狙撃されれば方角から犯行場所を推定されてもそもそも距離が遠すぎて犯行場所を正確に当てられないだろうし、よしんば犯行場所が判明しても縛吏が到着する前に逃げ切れるだろうという話だった。ローブルの至宝と名高い顔(かんばせ)を国民に見せる為に目立つ場所に立つ女王はいい的だろう。

もっとも、弓矢による暗殺など最初から起こらない為これは大した問題にはならない。

これだけ穴のある暗殺計画だ、ケラルトならば首謀者の貴族と暗殺者に行き着き事前に犯行場所を推定してそこに兵を配置しているかもしれないが、それも問題にはならない。何故なら暗殺者は当日そこに出向くことはないからだ。私達に相談せずともケラルトにさえこの話が伝わっていれば解決していただろうに、ネイア・バラハは随分

と都合のいい働きをしてくれたしセバスのお節介もたまには役に立つ、とデミウルゴスは機嫌良くほくそ笑んだ。
出来ればレメディオス・カストディオの強さをこの目で確認出来れば万全だったが会う口実もないことだし、オルランド・カンパーノよりは確実に強いが亜人十傑とはいい勝負、というセバスの報告を信じるしかない。それにそんな些細な違いではデミウルゴスにはよく分からなかった可能性もある、セバスにレメディオスと会わせたのは正解と思われた。オルランドと亜人十傑の強さの差などデミウルゴスにはミリ程の違いとしか感じられない。相手の強さを計る事にかけてはセバスの目の方がより正確だ。
王宮の広場からよく見通せて、人気のない最適の場所を探さなければならない。高さがあればパフォーマンスとしては尚良い。高さのある建造物がそもそもそれ程ないので、探す作業には然程の時間はかからないだろう。
苦痛に呻く声が聞けないのは心から残念だが、私の用意した舞台で役者達が踊る様を思うと今から実に愉快だ。
ここ数日セバスの辛気臭い顔を見ていないのも手伝って、計画の準備が思った通りに推移しているデミウルゴスの機嫌は至極良い。後は舞台を選定し必要な物品を用意し想定外の事が起きてもすぐに対処出来るよう抜かりなく監視を行うだけである。記念式典まではセバスと顔を合わせなくてもいいと思うと実に爽快な気分だった。
早くナザリックに戻りたい、心からそうデミウルゴスは思った。ナザリックにいれば持ち場の違うデミウルゴスとセバスは基本的には顔を合わせることがない。セバスが側にいることで常に胸を苛む不愉快さにも悩まされなくて済む。あの不愉快さの正体を結局のところデミウルゴスは未だに知ることが出来ずにいる。セバスのお節介が役に立つ事もあると分かってもそれすらも不愉快だった。
そんなもので何が救えるだろう、一人の手で救おうとするには人の世の不幸はあまりにも数多く世界に満ちすぎているのに。
セバスのお節介が不愉快なのは自己満足の欺瞞に過ぎないから、と結論付けようとした事もあった。だがどうもそれだけではないもの

を己の心の中にデミウルゴスは感じ取っていた。そもそもセバスのお節介がどれだけ自己満足の欺瞞であってもそうあれとセバスは至高の御方に定められたのだ、それが受け入れられないのには別の理由がある筈だった。

モモンガ様ならばこの正体の分からないものについて何かお分かりになるのだろうか。今は会えぬ主人への思いが募る。慈悲深く叡智に溢れるあの方ならば非才なるこの身に教えを垂れて下さる筈だ。

何はともあれセバスがいない今は制御できない感情に振り回されることもなく至極快適だ。あと数日だがこの自由を謳歌しようとデミウルゴスは心に決め、場所の選定の為の影の悪魔（シャドウ・デーモン）を召喚した。

＊＊＊

食事の時間なのでドアを開け自室から出てきたネイアは、ドアの横に立っていたセバスが何やら難しい顔をしているのを不審に思った。

「どうしたんですかセバスさん」

「……いえ、デミウルゴスが、犯人は判明しているがこのまま泳がせると。わたくしとしてはバラハ嬢の身の安全を第一に考えてほしいのですがあの男にも困ったものです」

「いつも思うんですけど、デミウルゴスさんとどうやって連絡しているんですか？」

「あの男の……魔法で、です」

デミウルゴスは魔法詠唱者（マジックキャスター）なのだろうから魔法を使って連絡を取っているのは別段おかしくないのだが、何故セバスは少し答えに迷ったのかをネイアは不思議に思った。

「犯人を泳がせるのって、計画の為ですか？」

「そうですね……何を考えているのかは知りませんがあの男によれば、ケラルト・カストディオは恐らく犯人を泳がせ現行犯で捕まえようとするだろうからその動きを阻害しないようにと」

「確かに、証拠もなく捕まえる訳にもいきませんしね……その判断は間違いじゃないと思いますよ」

そうは答えたもののデミウルゴスの行動には謎が多いのも事実だとネイアは思った。ケラルトに犯人を捕まえさせるつもりならば最

初から堕落の果実が調査を行っている事を明かし犯人の情報も流せばもっと効率的だ。それをしないのは何か別の目的があるからなのだろうか。

セバスに計画への協力を約束させたあの時デミウルゴスは、我々の名声も確固たるものとなる、と言っていた。つまり今回の事件の解決に何らかの形で堕落の果実が貢献する予定なのだろうが、情報提供という形でなければ他にどういう方法で貢献するのだろう。自分達だけで女王暗殺を阻止するならばケラルトに情報を流す必要はない。考えていると頭の中が段々こんがらがってくるのをネイアは感じた。

頭を使ったら余計お腹が空いてしまった。とりあえずご飯を食べてからまた考えることにしよう、と思いネイアはセバスを見上げた。

「私の事はセバスさんが守って下さるから大丈夫だという考えなんでしょうきっと、それよりまずはご飯です、食べに行きましょう」

「そうですね、今日もご馳走になります」

柔らかく笑んでセバスは返事を返し、二人は連れ立ってキッチンへと歩き出した。お腹が一杯になったネイアが眠くなり考えるのは明日でいいか、と思ったのは余談である。

建国式典騒動

そしてやってきた建国記念式典の当日、ネイアは従者として参列していた。セバスは後方で警戒に当たっている。何かあればすぐに駆け付けますので、と微笑んでくれたセバスの声は穏やかで、これから従者としての務めを果たさなければならないというのにネイアの心はすっかり緩んでしまった。いけない、と思い直して前を向く。聖騎士の端くれにでも確かに名を連ねている従者として女王始め王族の方々をお守りするという大事な仕事がネイアにはある。これから女王が狙われると知っているのだから尚更気を抜いている場合ではない。

ケラルト・カストディオならば然るべき手段を講じて暗殺を防ぐのだろうという事はネイアにも大体の想像は付いたが、それでも万一ということもある。ケラルト様の智謀は知れ渡っているけれども、人なのだから漏れだってあるかもしれない。それにデミウルゴスの動きが全く予想が付かない。セバスをネイアの護衛に付けたままでどうやって女王暗殺阻止に貢献するつもりなのだろう。

普段は閲兵などを行う広場は本日限り入城を許された老若男女を問わない平民で溢れている。ローブルの至宝と名高い女王、カルカ・ベサーレスの玉容を一目見ようと会場の空気は期待に満ち溢れていた。女王はその美貌と慈愛に溢れた人柄から国民からの人気は高い。優しさからくる甘さ故に強い政策に出られない女王を八方美人と揶揄する声もないではないが、仲の悪い北と南の貴族を取り纏め大きな瑕疵もなく平穏に国を治めていらっしゃる立派な方だとネイアは思う。聖王国がこうして平和なのは、間違いなく女王の力あってのものだ。

そんな女王を、長子を差し置いて女が王になるなど認められないとか権益の邪魔になるとかそんな理由で暗殺しようとしているならば許し難い事だとネイアは思った。暗殺の理由は分からないけれどもその行為は聖王国の平和を間違いなく乱すものだ。

女王の警護は近衛兵団と聖騎士が固め万全の体制が取られている

が、国民に顔を見せ語り掛ける為に広場で演台に立つ間はどうしても無防備になってしまう。無論レメディオスとイサンドロという聖騎士団の中でも選りすぐりの強者である九色を頂く二人がすぐ脇に控えているのだから並の暗殺者など不意すら付けず太刀打ちも出来ないだろうが、二人でも対応不能な方法で暗殺を仕掛けてくる可能性もある。これから先は何が起こるか分からない、大した力もない従者とはいえネイアも己の務めを十全に果たさなくてはならない。

式典は滞りなく進んでいく。大貴族の挨拶、楽隊の演奏、この日の為に練習を積んできた子供達の舞踊など、昨日のリハーサル通りに何の問題もなく進行している。街では騎士団によるパレードが行われて城に入り切らなかった市民たちの目を楽しませている筈である。

式典は進み、やがてレメディオスとイサンドロを従えた女王が城内から姿を現すと会場内は大いに沸いた。従者になる時の式でしかネイアは間近で見たことはないが遠目にも女王の天使の如き佳容は際立っていた。女性として勿論憧れるのだがそれよりも天から与えられた女王の美は女王になることを約束されていたが故のように思われてこの方こそがやはり聖王国を導くのに相応しいお方なのだとネイアは改めて思った。

女王からの挨拶の段になり、女王が演台へと上がり両脇を二人の九色が固める。広場から歓声が上がったその時、異変が起こった。

王城の周囲を囲むように、突然真紅の炎の壁のようなものが天高く噴き上がった。広場を包んだ歓声は瞬時に悲鳴へと変わり、そして時計台の方角から何かが飛来してくる。

それは、翼持つ悪魔の群れだった。悪魔達は広場の上で止まり、その中でも取り分け巨大で燃え盛る翼とやはり燃え盛る尾を持つ筋骨隆々たる悪魔が眼下を睥睨する。

「我が名は大悪魔アモン！　この国の女王を殺害せんとする愚かなる人間に召喚されたが、誇り高き大悪魔たる我が人間如き劣等種に膝を屈すると思ってか！　貴様等人間共には、甘美なる恐怖と絶望を与えてやろう。そう、抗いがたい死を！　さあ悪魔達よ、行くがよい、獲物が山を成しておるわ！」

号令に従い悪魔達は広場へ向かい滑空してくる。混乱と恐慌の坩堝と化した広場に一筋の檄が飛んだ。
「落ち着け！　聖騎士団、五番隊と従者は市民たちの避難誘導、四番隊は女王と王城の警護に回れ！　一番隊から三番隊は悪魔の迎撃に当たるぞ！　イサンドロは四番隊と共に女王を安全な場所までお連れしろ！」
聖剣サファルリシアを既に抜き放ち構えたレメディオスの鋭く通る声による指示で聖騎士団が一斉に動き出す。ネイアも指示に従い市民たちを安全に逃がすべく仲間達と共に門の方へと駆け出した。
えっ、暗殺だよね？　何で悪魔がこんなに出てくるの？　という疑問はとりあえず胸の内にしまっておくしかない。危機は目前に迫っている、罪もない市民達の命が危ないのだ。
「落ち着いて下さい、急がず押さないで、指示に従って！　門の方へと、ゆっくり移動して下さい！」
聖騎士が市民を誘導し、従者がそれをサポートする。悪魔がこちらへと来ないか気を張りつつネイアも門へと市民を誘導するが、悪魔達はレメディオス率いる迎撃部隊へと一目散に向かっていき市民達へと迫ってくる様子はなかった。
そんな中、誰の仕業か突然門が閉じた。逃げ場を失った市民達はパニック状態に陥り聖騎士や従者がどれだけ声を掛けても抑え難い混乱が生じる。ケケケケ、と耳触りな高い笑い声を上げながら門の向こうから悪魔がやって来て市民達の前へと降り立つ。この悪魔が門を閉じたのだろう。
そんな混乱の中、目立たぬ木陰に転移してきた影があった。広場の混乱をフードの奥から冷たく見つめるデミウルゴスをセバスは苦々しげに見つめた。
＊＊＊
時は少し遡る。
身支度を整えた暗殺者は棲家を出ようとしていた。今日は彼の人生でも一番大きいといえる仕事の日だ、準備は抜かりなく行った。後は狙撃地点に行き、女王が出てくるまで待機するだけだ。使う道具は

使い捨てられるように新規に調達して狙撃地点に運び込んであるので手ぶらで行ける。既に前金は受け取ってあり、更に成功すれば成功報酬金貨五千枚の仕事だ。混乱に乗じて他国に逃げても一生遊んで暮らせる金額が手に入る。この仕事をこなせるのは聖王国広しといえども自分だけだろうという自負もある。やってやる、という意気込みが強く暗殺者の胸に湧き上がり、出入り口のドアへと足を踏み出したその時だった。

眼前に突然ローブ姿の男が現れた。本当に突然、湧いて出たのだ。

「さあ、あなたの人生最後の舞台へご招待いたしましょう。〈上位転移（グレーター・テレポーテーション）〉」

暗殺者の肩に手を置き、驚くほどするりと心に染み入ってくる、いつまでも聞いていたいような蠱惑的な声で男はそう告げた。瞬間、視界は薄暗く切り替わった。男と暗殺者は暗殺者の知らない場所へと転移していた。

ここはどこかの部屋の中なのだろうか、暗殺者はすっかり混乱しきって目の前の光景から目が離せなくなっていた。肩から手を離した男がどけると、その向こうには巌の如き体躯に禍々しい顔を憤怒で染め、翼に焔を纏った――悪魔がいた。悪魔は何かの血で描かれたと思しき魔法陣の上に立っていた。

「やりなさい」

男が告げると全てを心得たように悪魔は巨木のような太い腕を振り上げ、次の瞬間にはその拳は暗殺者の胴を突き破っていた。細かく千切れた臓物と血が辺りにぶち撒けられる。そんな状態になっても暗殺者はまだ死ねずにいた。悪魔の腕が抜かれ地面に放り出されても息のあるまま、一体何が起こって自分に何が起きたのかを把握しきれずに混乱から抜け出せずにいた。

「何が起こっているか不思議でしょうから教えてあげます。あなたにはここで悪魔召喚を行い召喚した悪魔に殺された事になってもらうのですよ。ああ、最高ですねその表情、その目。こんなにすんなりと死なせてやるのは勿体ないですが、回復手段がないですから仕方がありません。そう、あなたはこれから死にます。どんな気持ちですか？

これから死ぬというのは」
カヒューカヒューと浅く荒い息を繰り返していた暗殺者の喉からごふりと血の塊が吐き出され、床が血で染まる。痛いという感覚すらもう分からない、今はただ寒い。生きていくのに必要なものがごっそりと体から失われた感覚がする。首すら動かせず、どうにか眼球を動かして暗殺者はローブの男を見た。
そこには、死に行く弱者の哀れな姿を愉悦をもって観察する「悪魔」がいた。
俺は、魅入られていたのか、いつの間に――……。それが暗殺者の最後の思考になった。
暗殺者の瞳から生命の光が失われたのを確認するとデミウルゴスは大して面白くもなさそうに息をつき、入手してあった密書を暗殺者の腰のポーチに紛れ込ませた。
「さて、仕込みはこれでいいでしょう。後はゲヘナの炎の発動と共にあなた方が派手に登場するだけです」
時計台の中にある使われていない一室をデミウルゴスは悪魔召喚の舞台に選んだ。整備の為にしか人が訪れず、王宮に程近く高さもあり悪魔の登場には丁度いい。特殊技能（スキル）を目一杯まで使い召喚した悪魔達に向かいデミウルゴスは言葉を発する。
「作戦を確認します。あなた方は王宮の閲兵広場に赴き聖騎士と戦うこと。多少の怪我はやむを得ませんが死者を出すことは厳禁、既に指示を与えている一体を除き聖騎士以外の一般市民への手出しは無用です。あなたは……そうですね、大悪魔アモンとでも名乗りなさい。あなた方は女王暗殺の為にそこの暗殺者に召喚されたが人間如きには支配されずに逆に殺し王都を混乱の渦に陥れる為に来た、という設定です。そこのところを愚かな人間共にも分かるようによく説明するように。セバスの報告が正しければ鱗の悪魔（スケイル・デーモン）とレメディオス・カストディオはいい勝負になるでしょう。鱗の悪魔（スケイル・デーモン）が敗れたらあなたが出ていって力の差というものを少し見せてやりなさい。但し〈炎のオーラ〉は切っておくように、彼女や他の聖騎士に死なれたら困りますから。その後セバスが出てくる手筈になっています。セバスがあ

なたに負ける……という事はまず有り得ないでしょうが、魔法を使わないという制限以外は殺す気でやって構いません。手を抜いているように見えては困りますからね」

憤怒の魔将（イビルロード・ラース）に向かいデミウルゴスはそう説明する。憤怒の魔将（イビルロード・ラース）が魔法まで使って本気で戦ったらこの王都ホバンスなどたちまち焦土と化してしまう、それはさすがにまずい。この国最強のレメディオス・カストディオでも到底太刀打ち出来ない強大な悪魔であると認識されればあくまでそれでいいのだ。

この部屋が発見される準備も万端整っている。動物の血で描いた魔法陣、怪しげな魔術書、儀式に使うマジックアイテムの数々等を準備してある。暗殺者が元々使う予定だった狙撃地点に用意されていた弓矢等女王暗殺に結びつく一切の物も昨夜の内に処分済みだ。ケラルト・カストディオが狙撃地点になる筈だった場所を洗っても何も出てきはしない。

「では、行きますよ」

そう告げると確認を取らずにデミウルゴスは歩き出した。確認など取らなくても召喚した悪魔はデミウルゴスに絶対服従、着いて来ない事など有り得ない。時計塔の最上部、王都を見渡せる場所にまで上がるとようやくデミウルゴスは立ち止まり後ろを顧みた。

「ゲヘナの炎を合図に侵攻を始めなさい、くれぐれも失敗のないように。〈上位転移（グレーター・テレポーテーション）〉」

ローブを脱ぐとそう告げて返事も聞かずにデミウルゴスは再び転移で移動した。転移先は王宮上空、ここで式典の進行を観察しゲヘナの炎発動のタイミングを見計らう。皮膜の翼を展開し上空から眼下を見下ろす。さながら人が地を這いずる虫だ。死人を出してはいけないというのが返す返すも惜しい。

さて、セバスは指示通りにきちんと動いてくれるものか。作戦の成否はそれのみに掛かっていると言っても過言ではない。デミウルゴスの策に乗るのはセバスにとっては面白くはないだろうがレメディオスを圧倒する悪魔、しかも魔将と戦わないでいる理由もないだろうから大丈夫と思いたいところだ。セバスはデミウルゴスを信用して

いない、レメディオスが殺されても不思議ではないと考える筈だ。そう思わせる為に全体の総数を減らしてまで圧倒的な力の差のある魔将をわざわざ召喚した、デミウルゴスが本気だとセバスには思って貰わなくては困るのだ。

観客達が満足して拍手喝采してくれるような迫力のある戦闘が展開されるといいのですが。

これでゲヘナの炎が発動すると同時に一天俄かに掻き曇る演出でも出来るよう〈天候操作（コントロール・ウェザー）〉が使える者がいれば完璧だったのだが、と手駒が不十分な事をデミウルゴスは実に残念に思った。

＊＊＊

この悪魔は強い、出会い頭の棍棒の一振りを躱してレメディオスは眼前の悪魔の実力を直感した。悪魔は山羊の頭蓋骨のような頭で鱗に覆われた体躯、長い尻尾と蝙蝠のような翼を持っている。この悪魔には生半な者が当たっても対抗できない、最低でもイサンドロクラスの実力が必要だろうが彼女は今女王を安全な場所に避難させている。ならば自分が一人で引き受けるしかない、というのがレメディオスの下した判断だった。

「この悪魔は強い、私一人で抑える！　集中するからグスターボ、指揮を任せる！」

「了解しました！」

グスターボの返事を聞いてレメディオスは駆け出し、悪魔と一気に間合いを詰めた。下段から斬り上げたサファルリシアの白刃が煌めき光の尾を引く。その一閃は悪魔の鱗を僅かに裂くに留まるがそれで構わない、棍棒を持つ手首を狙い袈裟懸けに剣を振り抜く。その狙いは悪魔に読まれていたようで棍棒に阻まれるが、弾かれた剣を膂力で無理矢理振り抜いて空いた脇を狙い横薙ぎを放つ。

悪魔達は数こそそう多くないものの、並の聖騎士が最低三人がかりでなくては対抗出来ない強さを持っていた。故に白熱する団長と悪魔の戦いを目に出来た者はそう多くはないのだが、指揮を執らねばならないグスターボは横で繰り広げられる超級の戦いについ目を奪われていた。

そんな戦いなど目に入れる余裕の全くない者もいた。ネイアである。他の悪魔は何故か聖騎士にしか向かっていかないが、門を閉めた悪魔は狙いを市民達に定めたようだった。キキキ、と耳触りな笑い声を上げて人々が怯える様子を楽しんでいるようだった。ネイアも他の従者達も剣を抜き威嚇するが、聖騎士が三人がかりでようやく戦える相手だ、従者ではまともな戦いは覚束ない。市民を誘導していた聖騎士達はパニックになった市民達を抑えるのに手一杯でこちらに向かって来られない。

じりじりと焦れるような時間が過ぎていき、ついに悪魔が腕を振り上げ市民を守る従者達に向かって一歩を踏み出そうとしたその時だった。

風、としか認識できなかった。一陣の疾風が吹き抜け、次の刹那には拳を振り抜いたセバスと霧散する悪魔の姿があった。

「……セバスさん！」

思わずネイアは叫んでいた。拳を下ろすとセバスはネイアを見やり、にこりと微笑んだ。

「バラハ嬢に危害が及ぶ危険がございましたので、余計かとは思いましたが加勢させて頂きました。罪のない市民の皆様方に被害が及ぶのもわたくしの望むところではございません。それに……」

「……それに？」

「わたくしの力が必要となる時が、もうじき来るかもしれませんので」

静かにそう告げて、セバスは空を見上げ未だ降りてこない大悪魔アモン――を名乗る憤怒の魔将（イビルロード・ラース）を鋭い目付きで見据えた。

正直な所憤怒したいのはこちらの方だ、とセバスは思った。デミウルゴスは一体何を考えているのか。憤怒の魔将（イビルロード・ラース）はレベル八十台の悪魔、レメディオスを始めとする聖騎士達の敵としてはどう考えても強すぎる。死者は出さないし怪我人についても出さないよう努力するという言質は取っているものの、デミウルゴスをセバスは信用していない。この場にいるデミウルゴスとセバス以外の全員を皆殺しにする事など憤怒の魔将（イビルロード・ラース）にとっては赤子の手を捻るより容易い。レメディオスが対抗できない以上セバスが出るしかないのだ。

デミウルゴスがセバスをいくら嫌っているとはいえまさか憤怒の魔将（イビルロード・ラース）に全力を出させて戦わせたりはしないと信じたいところだがそれも分からない。〈隕石落下（メテオフォール）〉でも使われようものならセバスは大丈夫でも首都が滅ぶし、直接攻撃主体の能力構成とはいえ高位悪魔らしく高位階の魔法も使える憤怒の魔将（イビルロード・ラース）に〈上位転移（グレーター・テレポーテーション）〉を駆使した魔法攻撃中心の戦術を取られたら厄介だ、周囲への甚大な被害は避けられない。言質を取っているのだからそんな事はしてこないと信じたいがデミウルゴスを信じ切ることはセバスには出来ない。デミウルゴスならば嫌がらせ程度の軽い気持ちでやりかねないのが恐ろしいところだ。

デミウルゴスにとって人の命など玩具に出来なければ利用価値があればいいところ盤上の駒、利用価値もなく悪くすればただの数字に過ぎない。ここに集まった民衆や聖騎士達はセバスの活躍を見て語り広げる生き証人、という利用価値はある、とは思うものの安心しきることがセバスには出来ない。

苦戦しながらも聖騎士達はどうにか悪魔の群れを撃退しつつあった。そうなるように丁度いい強さの悪魔をデミウルゴスが用意したのだろう。ここまでは多少の怪我はあるようだがセバスの希望通り死者なく事態は推移している。

「てやーっ！」

迅雷風裂、英雄の領域に達したレメディオスの繰り出した鋭い突きが鱗の悪魔（スケイル・デーモン）の胸に深々と突き刺さる。それが必殺の一撃となり鱗の悪魔（スケイル・デーモン）は黒い粒子となって霧散していった。

うおおっ！　と勝鬨の声が聖騎士団から上がる。だがレメディオスは構えを解かずに上空を鋭く睨み付けた。

「貴様の配下は片付けたぞ、降りてこい、大悪魔アモンとやら！」

「ほう、我に挑むか、命知らずなことよ。いいだろう、その顔が絶望に歪む様もまた良き供物となろう」

ゆっくりと、時間をかけて大悪魔アモンは闘兵広場へと降り立った。こいつはやばい、という事が見ただけでレメディオスには分かるし他の者にだってはっきりと分かっているだろう。この悪魔は桁が

違いすぎる。大悪魔を自称するだけの力は恐らく確実に持っている。出し惜しみなどしていられない、最初の一撃から全力のものを叩き込むことをレメディオスは決意した。

駆け出し一気に距離を詰め。

「魔界に還れ、悪魔！」

繰り出した突きに聖撃を流し込み、聖剣サファルリシアの一日に一度しか使えない切り札の能力を起動する。剣から伸びる光は刀身の二倍の長さにもなり、眩しい閃光を放つ。この光は属性が悪に傾いていればいるほど眩しく見える。思った通り大悪魔アモンも恐らくは眩しさのあまりに目の辺りを腕で覆った。がら空きになった胸に、聖なる力の流れ込んだ突きが突き立つ。

筈だった。

サファルリシアの刀身は悪魔の体表を覆う鱗に遮られ進もうとしない。聖なる光自体も属性が悪の者に対しては攻撃力を発揮する筈だが、目の前の悪魔は痛痒すら感じている様子はなかった。

「それで、終わりか？」

「……！」

悪魔の言葉通りに己の顔が絶望で歪むのをはっきりとレメディオスは感じた。レメディオスが使える最強の攻撃は、この悪魔に何のダメージも与えなかった。聖なる力に弱い筈の悪魔が、聖剣の力による攻撃を受けても顧みる価値などないと言いたげに平気そうにしている。

無造作にアモンは腕を振るった。それに吹き飛ばされレメディオスはごろごろと転がり、すぐ立ち上がったもののそこから動けなくなった。ただ斬りかかったとして攻撃が効くとはとても思えない。あの強大な力を持つ悪魔と戦える者などこの場には――

その時、レメディオスとアモンの間に立つ者があった。あの白髪とマント姿にはレメディオスも見覚えがある。確か、アダマンタイト級冒険者の、セバスとか言っていた。従者ネイアの護衛でここにいたのだろう。いくらアダマンタイト級とはいえ自分の攻撃を楊枝で刺した程にも感じていなかったアモンと渡り合える力があるとは思えな

かった。
「やめろ、死ぬぞ！」
「ご安心を。この程度の悪魔に敗れるわたくしではございません。業腹ですが、乗るしかないようですね！」
前半はレメディオスを顧みてうっすらと笑みを浮かべ言葉を掛け、後半は前に向き直って心から不愉快そうにセバスは吐き捨てた。
即座に間合いを詰め正拳突きを放つ。憤怒の魔将（イビルロード・ラース）は両腕でガードするがこじ開けるように拳を上に流し、空いた隙間に再度正拳突き、だがこれは浅い。左から襲い来た憤怒の魔将（イビルロード・ラース）の拳をいなし、更に間合いを詰めて脇腹に蹴りを叩き込もうとするが尾に阻まれる。尾を軸にして首に回し蹴りを叩き込み、即座に姿勢を戻して憤怒の魔将（イビルロード・ラース）の拳を受け流し、腹に重い一撃を喰らわせる。
セバス優位の攻防を、大悪魔アモンの力の一端を身を以て感じたレメディオスはただ呆然と見つめ眺めていた。何も言葉が出てこない。己の想像を超えた領域で行われる戦いが眼前で繰り広げられていた。
「ご心配なさらずとも、あの程度の悪魔にセバスが敗れるような事は決してございませんからご安心下さい」
声を掛けられ横を見ると、いつの間に立っていたのか眼鏡をかけた魔法詠唱者（マジックキャスター）が立っていた。
「……何者だ」
「失礼、自己紹介がまだでしたね。わたくしアダマンタイト級冒険者チーム堕落の果実のデミウルゴスと申します、セバスのチームメイトです」
「……お前は、戦わないのか？」
「残念ながらわたくし炎属性のエレメンタリストでして、あの悪魔にはわたくしの魔法は通用しないかと」
それでもチームメイトならば少しでも何か助けようとするものではないか、とレメディオスは思ったが、詳しくは知らないもののエレメンタリストとはある属性の魔法に特化した魔法詠唱者（マジックキャスター）であるという事は一応知っていたので納得はしきれないながらも流すことにした。それよりも今は目の前の戦いを見逃したくない。

「一つお伺いしたいのですが、先程の非常に眩しい光、あれは聖剣の力ですか？」
「そうだ。聖剣サファルリシアに備わる一日に一度使える聖撃を強化する力だ。質問はそれだけか？」
「はい、ありがとうございます。お邪魔でしたか」
「そうだな、目の前の戦いを見ることに集中したい」
「それは失礼いたしました。もうお邪魔はいたしませんのでどうぞごゆっくり」
　にっこりと満足そうに微笑んでそれきりデミウルゴスは口を閉ざした。どうやら面白い見世物になっているようなので終わったら主演のセバスにはお疲れ様の一言くらいは掛けてもいいかもしれないと上機嫌に考える。聖剣サファルリシアの切り札が魔将相手にはまるで効かないのが確認できたのも上首尾だ。
　対称的にセバスは非常に不機嫌だった。デミウルゴスの書いた脚本にまんまと乗せられて戦わされている己も腹立たしいが、何より腹立たしいのは全ての元凶・デミウルゴスだ。内々に穏便に解決できるであったろう話をあの男がこんなに大事にして挙げ句の果てにこの出来試合である。憤怒の魔将（イビルロード・ラース）の攻撃が全て本気であるのは感じ取れるが魔法は使ってこないところをみると制限されているのだろう。魔法や特殊技能（スキル）を使われていたら人目がある為竜人形態を取れず力の制限されたセバスはもう少し苦戦している。
　そうして得られるのは、聖王国最強の聖騎士でも傷一つ付けられない悪魔をセバスが倒したという事実とそれによる名声だ。成程名声を高めるにはもってこいのいい手だろう。だがその手段が気に食わないと心からセバスは思った。自作自演、やらせのでっち上げだ。こんなやり方はセバスには到底許容できない。己も譲歩が必要だからと了承はしたが、正直こんな大掛かりな舞台で大事にするとは思っていなかったし魔将を呼ぶなど聞いてもいない。いつもこうだ、デミウルゴスは一つの了承を取り付ければ後から百は付け足してきて、君が了承したんだろうといけしゃあしゃあと言うのだ。
「こんな！　三文芝居に！　付き合うわたくしの！　気持ちが分かり

ますか！　あなたに！」
　叫びに合わせて拳を叩き込む。憤怒の魔将（イビルロード・ラース）とて三文芝居に付き合わされているいわば仲間だが、激情を叩き付ける相手が今セバスの前にはこの悪魔しかいなかった。本当は元凶であるデミウルゴスに叩きつけられれば一番いいのだろうが、いくら嫌いとはいってもナザリックの仲間とナザリックの名を汚した訳でもないのに戦うのは憚られる。だが、もしデミウルゴスがナザリックの名を汚す行いをしたなら自分が討伐を買って出ようとセバスは固く決意した。智に優れ上手く立ち回り人一倍忠誠心の篤いあの男に限ってそんな事は有り得ないというのが悩みの種だが。
　最早趨勢は決していた。格闘戦で遅れを取るようなセバスではない、まして魔将相手に負ける筈がない。ならばせめてもの情けと、拳に気を込め渾身の一撃を叩き込む。拳は憤怒の魔将（イビルロード・ラース）の強固な鱗を突き破り、心臓を抉って潰していた。
「本気の……戦いが出来た事……嬉しく思うぞ、人間の冒険者……」
　最後まで憤怒の魔将（イビルロード・ラース）は役者を押し通した。満足気な声を残して身体は黒い塵へと還っていき、後には何も残らなかった。デミウルゴスが解除したのだろう、王城を中心に展開されていたゲヘナの炎も消え去る。
「セバス様！」
　陽光差し込む閲兵広場をネイアが駆けてくる。ネイアもこんな猿芝居に付き合わせてしまったと思うと申し訳なくなりセバスは笑えなかった。
「セバス様……セバス様が、正義だったんですね」
「はて、わたくしが正義、何故そのような事を？」
「どんな小さな事でも誰かが困っていればお助けになる誰よりも正しい心、そしてそれを為す強さ、どちらもお持ちのあなたが正義でなくて他の誰が正義でしょう」
　ネイアの言葉に寂寥感が去来してセバスはゆっくりと横に首を振った。ネイアが見ているものは影に過ぎない。今ではもう失われてしまったものの残滓に過ぎない。

「日々目指してはおりますが、わたくしなど正義を名乗るのも烏滸がましいことです。わたくしが知る限り完全なる正義を行っていた方はただ一人。わたくしの主人……だった方です」
　失われ、今はもう戻らないもの。それを思いセバスは微笑んだ。お元気で、と言い置いて歩き出し、高みの見物を決め込んでいたデミウルゴスの元へと向かう。
「このような猿芝居には今後一切関わりませんので重々ご承知おき下さい」
「散々な言い様だが、君の働きで我々の名声は否が応にも高まるのだよ？　もう少し喜んでもいいと思うのだがね」
「手段が問題です。自作自演ではないですか」
「それの何が問題なのか分からないね。重要なのは結果だろう？　それに何も火のない所に煙を起こした訳ではない」
「事態を大きくしすぎです」
「舞台は派手な方が宣伝効果が高まるだろう？　観客だって多い方がいい」
「そんな事をしなくても冒険者の依頼で名声は高められます。噂に聞く蒼の薔薇のように伝説の武具など探し当てればよいではないですか」
「それも悪くはないだろうが、今回はお誂え向きな好機を君が運んできてくれたのでね。情報を集めたら更に名声を高める手段についても検討するとしよう。勿論君が嫌がらないものを考えるつもりだ」
「……自作自演はもうやめて下さい」
「それは状況次第だ、約束はできかねるね」
　そうして堕落の果実は宿へと帰っていき、悪魔達がやって来た時計塔を調べた者達が怪しげな魔法陣と惨殺死体を発見して悪魔の発言の裏付けが取れひとまず王都を震撼させた悪魔騒動は決着が着いた。完全に裏をかかれたケラルト・カストディオが一人首を捻るが犯人の死体から発見された密書で首謀者も割れている。暗殺者は邪教の崇拝者などではなく長弓使いだし、仮にも女王を暗殺しようという者がそんな書状を持ち歩くだろうかというのもまたケラルトに不審を抱

かせる一因ではあったのだが、証拠も不自然な程綺麗に揃っているし実際に悪魔が聖騎士団と戦っている。可哀想なのはしてもいない悪魔召喚の罪を被る羽目になった首謀者の貴族で、女王暗殺未遂と邪教崇拝と王都擾乱の罪によってケラルトによって三族皆殺しの目に合ったのだった。

再会と帰還

セバスはいつも通りに朝から街へと出ていた。宿に一人残ったデミウルゴスは自分も出掛ける事にした。行き先は情報屋の元だ。調べるよう頼んでおいた様々な情報もそろそろ集まった頃合いだろうと踏んでの事である。

回る順番を特に決めていた訳ではなく何となく最初に訪れた情報屋の男は、デミウルゴスの姿を認めると愛想よく笑いかけてきた。

「おはようございます、デミウルゴスの旦那」

「やあおはよう。頼んでいた情報はどうなっているかな？」

「集まってますよ。まずリ・エスティーゼ王国のアダマンタイト級「漆黒」についてなんですが、裏が取れました。エ・ランテルの共同墓地でアンデッドが大量発生した事件で数千のアンデッドを薙ぎ倒して首謀者を討ち取ったのは本当だそうです。その他にも、二人でギガントバジリスクを討伐したとかゴブリン部族連合の殲滅とか。本当にこの短期間で二人でやったなら堕落の果実に並ぶ実力を持ったパーティかもしれませんね」

「ほう、それは興味深い」

心の底から興味深いとデミウルゴスは思い返事を返した。この国で最強と言われるレメディオス・カストディオの実力を見て人間の強者があの程度ならば大した事はないと思っていたが、人の中にも警戒すべき強さを持った者はまだいるかもしれない、という事だ。

「二人組といいますがどんな構成なのでしょうね？」

「グレートソード二刀流の戦士と第三位階を使う魔法詠唱者（マジックキャスター）の二人組だそうです。名前は、戦士がモモンで魔法詠唱者（マジックキャスター）がナーベ、とかいうらしいですね」

「モモンとナーベですか……モモンとナーベ……」

その名前に引っかかるものを感じデミウルゴスは目線を伏せ考え込んだ。

あまりにも都合良く考えすぎだろうか、だが符合してしまう。モモンとナーベが、もしモモンガ様とナーベラル・ガンマならば、漆黒の

業績も少しも不思議ではないのだ。まさかモモンガ様御自ら人の中で冒険者に身を窶し情報収集に当たっているのだろうか。偉大なる魔法詠唱者（マジックキャスター）であらせられる筈のモモンガ様がグレートソード二刀流の戦士という点が解せないがモモンガ様ならば戦士に変装する魔法を使われる事も可能だろう。ナーベラルは二重の影（ドッペルゲンガー）故にナザリックの中では数少ない人間の中に溶け込める容姿を持った者、供回りとしては最適かもしれない。

　ただの偶然だという可能性だってある、だがただの偶然で片付けてしまうには漆黒の業績は飛び抜けすぎているし、偶然なら偶然でいい、また探せばいいだけの話なのだ。

　漆黒の二人、モモンとナーベがモモンガ様とナーベラル・ガンマかどうかを確認する。それが急務と思われた。

「漆黒はエ・ランテルを拠点に活動しているのですね？」

「はい、そのようで」

「聖王国からは北に向かえば着きますか？」

「大城壁から街道をずっと北上していって、リ・エスティーゼの王都から南東に街道を辿っていけば一ヶ月位で着きますかね」

「それでは時間がかかりすぎます！　もっと近い道はないのですか！」

「……えっ、あの……そうですね、大城壁を北上して山脈を越えたところにある砦から山脈沿いに東に向かうともっと近いと思いますが……街道はないですよ？」

「構いません！」

　デミウルゴスの勢いに情報屋の男は気圧されている様子だったが構っている余裕はデミウルゴスにはない。こういう時に地図がないのが本当にもどかしい。金を入れた革袋を取り出して無造作に金貨を掴み取り情報屋の男に握らせる。

「いい情報をありがとうございました」

「……えっ？　いいんですか？　他にもまだ頼まれていた情報が……」

「今の話が聞ければ十分です、それでは」

革袋をしまうとデミウルゴスは踵を返し駆け出した。その後ろ姿を情報屋の男はぽかんと眺めた。いつも優雅で余裕を崩さないデミウルゴスのあんな姿を見たのは初めての事だったからだ。

宿までデミウルゴスは必死に駆けた。セバスが外に出ているのももどかしい。宿に戻って影の悪魔（シャドウ・デーモン）を使ってセバスを探し出し呼び戻してこの話をしなければならない。ホバンスになどいる意味も価値ももう欠片もない、今は一刻も早く漆黒についての真実を確認せねばならない。

宿まで戻ると、不思議な事にセバスが部屋にいた。慌てた様子でドアを開け駆け込んできたデミウルゴスの様子をセバスは不思議そうに眺めていた。

「お帰りなさいませ、随分と慌てたご様子ですが何かあったのですか」

「ああ、あったとも。今君を探して呼び戻そうとしていたところだ。どうして宿に？」

「冒険者組合から手紙を預かって参りましたので、わたくしでは読めませんし一人で開けるのもどうかと思いお待ちしていたのです」

「……手紙？　誰からだね」

「漆黒、という冒険者チームからだそうです」

それを聞いた途端にデミウルゴスはテーブルまで駆け寄り、上に置かれた手紙を手にして急いで封を切っていた。

もしかしたら、という予感がある。もしかしたら、デミウルゴスとセバスの名声が彼の方に届いたのではないか。彼の方の名が遠いこの国にまで届いたように、デミウルゴスとセバスの存在も見つけて貰えたのではないだろうか。

中に入っていた便箋を開くと、そこに書かれていたのは紛う方なき日本語だった。

『拝啓

突然のご連絡失礼いたします。

堕落の果実のお二人のご高名は遠くこのエ・ランテルにまで届いております。

もしかしたら私の知る方ではないかと思いお手紙を認めさせてい

ただきました。
アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ、この言葉に覚えがあればご連絡ください。
我々はエ・ランテルの黄金の輝き亭という宿に逗留しています。
それでは用件のみですが失礼いたします。
敬具
モモンとナーベより』
――アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ。
間違いがない。間違えようがない。興奮でデミウルゴスの手は震えていた。何も言わずに便箋をセバスへと差し出す。
「わたくし字が読めませんが……」
「君にも読める字で書かれている。いいから読みたまえ」
デミウルゴスの言葉に不思議そうな顔を返しながらもセバスは便箋を受け取り目線を落とした。その鉄面皮が驚愕の色を帯びるのにそう時間はかからなかった。
「……これは」
「モモンとナーベ、この名前で連想されるものはないかい？　私が急いで宿に帰ってきたのはそれを君に伝えて一刻も早くエ・ランテルに発ちたかったからだが、これではっきりした。セバス、急いで支度を。すぐにエ・ランテルに向かう」
「かしこまりました」
この手紙を見てしまってはセバスとて否も応もない、手紙を大事にしまいこむとすぐに身支度を整える。足早に二人は部屋を出て廊下を抜け階段を下りる。
「親父、我々はエ・ランテルへ向かいますので冒険者組合にはそのように伝えて下さい！」
「あっ、はい」
宿の親父はセバスの言葉に慌てて返事を返したがセバスは返事など聞いてはいなかった。デミウルゴスとセバスは宿を飛び出して東の城門へと急いだ。
もしかしたら罠という可能性もないではない。デミウルゴスとセ

バスのようにユグドラシルからやってきた存在ならば有名なギルドだったというアインズ・ウール・ゴウンの名を知っていても不思議ではない。だが侵入された事のない第十階層をずっと守っていたナーベラル・ガンマの名を知る者はアインズ・ウール・ゴウンの外部にはそう多くはないだろうし、何より罠なら罠でそんな不愉快で人を虚仮にした罠を張るようなふざけた者など全力で叩き潰すだけだ。

それから二人はただひたすらに駆け続けた。東へと駆け抜け続け、大城壁に至って北上し、険しい山脈の道を抜けて砦へ至るとそこから山脈沿いに東へと向かう。二人とも睡眠も休息も食事も必要としない、不眠不休で走り続けられる。雨も風も関係はない、何の言葉もなく、ただ黙々と全速力で二人は走り続けた。

一分でも、一秒でも早く、あの方の元へ。その思いにおいて事ここに至って二人の心はようやく一つとなっていた。山脈を抜けてからは村落を探し道を聞き、一心不乱に二人はエ・ランテルへと向けて駆け続けた。

どれだけの日数がかかったのか正確なところをデミウルゴスすら把握していない。それ程に夢中だった。ようやく平野の向こうにエ・ランテルの堅固な城壁が見えてきた。

心が逸る。デミウルゴスは勿論の事セバスも必死だった。城門へと急ぎ、アダマンタイトのプレートを見せて名乗り足早に検問を抜ける。通行人に黄金の輝き亭の場所を聞く声色も必死になってしまっていた。エ・ランテル一の高級宿屋の建物は立派ですぐに分かった。抉じ開けるように入り口を開け飛び込むように中に入ってカウンターへと駆け寄り、漆黒の二人が逗留している部屋を聞く。

部屋番号を聞いてどたどたと階段を駆け上がり目的の部屋のドアをノックする。ドアを開き中から顔を見せたのは、紛う方なきナーベラル・ガンマ、その人だった。

「セバス様、デミウルゴス様……！　アインズ様が仰っておられたのはやはり本当だったのですね」

「アインズ様……？　それは一体誰なんだ、ナーベラル、どういう事なのだね、君と一緒にいるのはモモンガ様なのではないのか」

「ここでは何です、とりあえずお二人とも中へどうぞ」
確かに廊下でするような話ではない。言葉に従いデミウルゴスとセバスは部屋の中へと入り、ナーベラルが情報収集対策の魔法をいくつか部屋にかける。
「わたくしと一緒に冒険者をしておられるのはモモンガ様なのですが、モモンガ様は今はアインズ様……アインズ・ウール・ゴウン様という名前を名乗っておられるのです」
「成程そういう事だったのか。それで、モモンガ様……いや、アインズ様は今どちらに？」
「今はナザリックに戻っておられます。お二人が到着した事をお知らせしますのでしばしお待ちを。〈伝言（メッセージ）〉」
ナーベラルが〈伝言（メッセージ）〉でデミウルゴスとセバスの事を伝え、しばらくすると〈転移門（ゲート）〉ののっぺりとした黒い闇がぽっかりと開いた。デミウルゴスとセバス、ナーベラルは跪き頭を垂れる。
はっきりと伝わってくるその気配だけで頭を上げなくても分かる。ゲートの闇の中から現れたのは、再会をどれ程待ち望んだだろう、ナザリック地下大墳墓に唯一人最後まで残って下さった慈愛溢れる至高なる主人、その人に違いなかった。
「三人とも、面を上げよ」
威厳ある声が響く。我知らず心が歓喜に打ち震えてしまう。頭を上げると、黒に金の縁取りをした豪奢なローブに身を包んだ尊き白磁の顔（かんばせ）、記憶と寸分の違いもないモモンガその人の姿があった。
「セバス、デミウルゴス、よくぞ戻った。手紙が届くのにかかる日数を考えると連絡が来るにしてももう少し先になるかと思っていたが……」
「モモンガ様、いえ、今はアインズ様でございましたね。書状を賜り、我等二人一秒を惜しんで急ぎ馳せ参じました。シモベたる我等の事を気にかけて頂けた事感激の至りにございます」
「当然ではないか、ナザリックの者は全て我が友が残してくれた子供のようなもの、一人たりとも欠ける事があってはならぬ。そして、まずはアインズ・ウール・ゴウンの名を勝手に名乗った事を謝ろう。も

しお前達に異議があるというなら名を戻す事も考えるがどうだ？」
「そんな、異議などあろう筈がございません、その名を名乗られるのにアインズ様以上に相応しい方などおられません」
「同意見でございます」
「そうか、それならばよい。この地に来てお前達の姿が見えなかった時は肝を冷やしたが、生きている事はマスターソースで確認出来た故探していたのだ。原因は不明だがナザリックがこの地に転移してくる際、二人だけが聖王国に飛ばされてしまったという事か……謎が多いな」
　そう言うとアインズは顎に手を当て考え込んだ。邪魔は憚られるが気になる事、聞きたい事は山のようにある。まず一番気になる事からデミウルゴスは聞く事にした。
「恐れながらアインズ様、先程ナーベラルがアインズ様はナザリックに戻られていると言っておりましたが、ナザリック地下大墳墓ごとこの世界に来た、という事なのでしょうか？」
「ん？　ああ、そうだ。このエ・ランテルからそう遠くない場所にある。この世界、という言い回しからするとお前は我々がユグドラシルとは別の世界にいるという結論に独自に行き着いたという事か、デミウルゴスよ」
「左様でございます」
「成程、ナザリック一の智恵者という設定は伊達ではない訳だな。戻ってくれた事心強く思うぞ」
「勿体なきお言葉にございます」
　ナザリック地下大墳墓がこの地にあり、ナーベラルがいるという事は他の者も恐らくはナザリックごとこの地にやって来ているのだろう。栄光あるナザリックと仲間達の存在を確認出来たデミウルゴスとセバスの顔に安堵が浮かぶ。
「それで冒険者として名声を高めて名を広げる作戦をとった、という訳か」
「左様です。その他にも冒険者として地位を高めれば身一つで聖王国に放り出された我々の身分の問題も解決出来ましたし様々な情報が

集まりやすくなりましたので。またナザリックを探し旅をする事を想定しておりましたので、アダマンタイトのプレートは人類の生息圏であれば何かと役に立ちます。御自ら冒険者をされているアインズ様には釈迦に説法でございましょうが」
「そんな事はない。ただな……亜人十傑だったか？　それと、最近聞いたが聖王国の王都の悪魔事件……かなり華々しい活躍なのだが」
「お褒めに与り恐縮です」
「うむ……ただな、我々漆黒の名声を高めるに当たってな……我々の名声と堕落の果実の名声が半々ぐらいになってしまってな……」
　言いづらそうなアインズの言葉にデミウルゴスもセバスも顔色を真っ青にする。特に作戦を考案したデミウルゴスなど生きた心地がしていない。
「申し訳ございません！　アインズ様の名声を広めるお邪魔になってしまうなど一生の不覚、この不手際、一死をもって報いたく……！」
「待て待て待て、お前達はどうして何かあるとすぐに死にたがるのだ？　いいかデミウルゴスにセバスよ、死ぬことは許さん。お前達がもし何かあって命を落としたとしてもすぐに復活させる。軽々しく死ぬなどと二度と口にする事のないようにな」
「何と慈悲深い……！　しかし、それではどうやってこの過ちを償えば……！」
「よい、気にするな。全てはナザリックに戻る為にやった事なのであろう？　それならばナザリックの利益に適った行いであろう。ナザリック一の智者とナザリック格闘戦最強の二人がいない事はナザリックにとっては大きな損失なのだからな」
　（ナザリックのシモベにとっては）あまりにも寛大なアインズの言葉に三人の忠誠心ゲージは既に天井を突き抜けていた。自分が墓穴を掘っている事にも気付かずアインズはうんうんと自分の発言を噛み締めて頷いていた。
「しかし二人とも本当によく私の元まで戻ってきてくれたな」
「それについてはデミウルゴスの智謀あってのものです。そうでなくてはこれ程短期間でアインズ様まで届く名声は高められなかったで

しょう」
「それを言うならセバスのおせ……善行は名声を高めるのに大いに役立ちました。わたくしだけでは人間の間で名声を高めるのは難しかったかと」
　互いに称え合う二人を見て、二人で支え合ってきっと絆が深まったのだなとアインズは考えた。故に提案してみることにした。
「二人とも今回の事で絆が深まったのだな。それではどうだ、これからも一緒にコンビで働いてみるか？」
「そればかりは！　いくらアインズ様の仰せと言えども了承いたしかねます！」
「わたくしも同意見です！　それだけはどうかご勘弁を！」
「お、おう……」
　ある意味ぴったり息が合っている二人の答えにアインズは気圧されたので話題を逸らす事にした。
「というか堕落の果実とは凄いパーティ名だがデミウルゴスが考えたのか？」
「わたくしは反対いたしましたがデミウルゴスが強引に決めました」
「そうか、セバスは反対だったのか……私はなかなかいい名前だと思うのだが……」
「そ、そんな、アインズ様……わたくしは！　わたくしは自分が堕落と関係しているなどと思われる事は至極心外でございます！　わたくしは堕落とは無縁！　堕落が甘い果実と思っているのはこの悪魔だけで十分でございます！」
「お、おう……」
「何を言おうが負け犬の遠吠えだねセバス。アインズ様が認めて下さったパーティ名なのだよ？　アインズ様が認めたのならばつまりそれはナザリックにおいては正義となるという事だ」
「ぐ……ぐぬ……」
　正義ってそこまで？　と思わず素でアインズは聞きそうになりぐっと堪えた。悔しそうにギリリと歯噛みしているセバスは少し可哀想だが中々いい名前じゃないかとアインズは思うので仕方がない。

「それで、アインズ様。計画の現在の進捗はいかほどなのでしょうか」
「ん？　計画、進捗？　何の話だデミウルゴスよ」
「無論、世界征服でございます。聖王国について情報収集いたしましたがナザリックの力があればあのような弱小国を支配下に収める事などいとも容易い事にございます。ご命令さえ頂ければ直ちに征服して参ります」
　一瞬、何を言われているのかがアインズには分からなかった。というか頭が理解を拒んだ。デミウルゴスは一体何を言っている？　世界征服？　何で？
「……デミウルゴスよ」
「はっ」
「世界征服とは一体どこから出てきたのだ？」
「ナザリックひいてはアインズ様の威を示されるものと当然考えておりましたが……違う、のですか？」
「……お前がいない間に決めたのは悪いと思うが、ナザリックの方針は既に決している。優先すべき第一はナザリックの存続、次にナザリックの強化だ。維持費用の調達方法についてはいずれ考えなければならない故税収を得る為の領地を求めることもあるだろうが……世界征服を企ててまだ見ぬ強者を敵に回しナザリックの存続が危うくなるような事はしない。今はまだ周辺国家の情報収集の段階だ」
「はっ、浅慮を晒し大変失礼致しました……」
　しないのですか……と言わんばかりにデミウルゴスの表情はしょんぼりと萎れた。したかったんだな、世界征服、と思ったがそんなリスクを背負うにはこの世界の事はまだ分からない事の方が多いので可哀想だが黙殺する事にアインズは決めた。
「征服はしないがナザリックの強化の為に色々と調べねばならぬ事も多いし、情報もまだまだ集める必要がある。二人にはこれから目一杯働いてもらう事になるが頼めるか」
「なんと勿体ないお言葉……！　わたくし共はあなた様のシモベ、ただお命じ下さればこの身が朽ちる時まで働き続けます！」
「デミウルゴスの言う通りです。アインズ様のご命令さえ頂ければど

のような困難な命であっても遂行してご覧にいれます」
　はぐれていたこの二人も他のシモベ同様の強い忠誠心を見せるので正直なところアインズは若干引いていたのだが、それはそれとして無事に帰ってきてくれた事は本当に喜ばしい。様々な不安があったろう、苦労があったろう。それを労(ねぎら)ってやりたい気持ちで一杯だった。
「その前にまずは二人ともナザリックに戻ろうではないか、皆に無事も知らせてやりたい。そして、それからお前達二人の冒険譚をゆっくりと聞くとしよう。ナーベ、引き続き留守を頼んだぞ」
「かしこまりました」
　そうして帰還したナザリックでセバスもデミウルゴスも感涙にむせんで号泣してしまったのも、書類に埋もれていたアルベドが幾分疲れた顔をして二人を出迎えて仕事を割り振れるデミウルゴスが帰還した事に（これでアインズ様との二人の時間が作れると）狂喜したのも、嬉々としてデミウルゴスが語った聖王国でのいともたやすく行われたえげつないマッチポンプの内容にアインズがドン引きしたのも、二人の小さな冒険のちょっとした後日譚としてアインズの心に残ったのだった。